〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起

ー小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣ー

第一節　新劇の勃興と震災前夜における新劇人　その一
第二節　新劇の勃興と震災前夜における新劇人　その二
第三節　大震災による新劇人の衝撃と覚醒　その一
第四節　大震災による新劇人の衝撃と覚醒　その二
第五節　震災からの復興と各種劇団の復活
第六節　築地小劇場への構想と準備
第七節　築地小劇場の創業と柿落し（第一年六月『海戦』）
第八節　愛と青春への築地讃歌（第一年八月『思い出』・十一月『恋愛三昧』）
第九節　ゴオリキイの戯曲と小山内薫の念願（第一年十月『夜の宿』）
第十節　東山千栄子の俳優志願（第一年十二月①『朝から夜中まで』）
第十一節　築地小劇場〈子どもの日〉（第一年十二月②『そら豆の煮えるまで』）
第十二節　チェーホフの戯曲と築地演技陣（第二年二月『桜の園』）
第十三節　『青い鳥』と及川道子（第二年十二月献身と熱狂）

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起ー小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣ー

第一節　新劇の勃興と震災前夜における新劇人　その一

小山内薫の壮図～自由劇場公演『ボルクマン』～新劇勃興の意義～市川左団次の発議～
島崎藤村の推挙～自由劇場開始の盛会～与謝野晶子の観劇と劇評～芸術座の『復活』上演
～小山内薫の劇壇失意～土方与志のヨーロッパ留学～平沢計七の労働劇団

幸福の追求と自由・平等を理念とするヨーロッパの近代文化を摂取して、歌舞伎の伝統に拮抗する新たな演劇、いわゆる新劇は市川左団次と小山内薫による自由劇場結成を契機として勃興した。劇団最初の公演は明治四二（一九〇九）年有楽座でなされ、イプセン晩年の戯曲『ボルクマン』が舞台に供される。「こういう風な芝居は」と小山内薫はあらかじめ宣言した。「開闢（かいびゃく）以来日本で初めて演ずるのであるから、その困難な事は大抵でない。極言すれば、日本の劇壇にまだこういう劇を演ずる技術の方法が、一つも準備してないと言って好い。」「もともとこの為事は、若い人間のする為事だ。若い者が新しい芸術を日本に興そうというのだ。」①

① 小山内薫「『ボルクマン』の試演について」（小山内薫・市川左団次編『自由劇場』自由劇場事務所、一九一二年。一〇一ー一〇三頁。

イプセン原作『ボルクマン』は鉱山の開発と産業の発展を意図する実業家の物語であって、有楽座での公演は森鴎外邦訳の脚本により小山内薫が演出を采配した。演技は歌舞伎育ちの役者が担当し、男役として元銀行頭取ボルクマンを主役の市川左団次、息子エルハルトを市川猿之助、フォルダルを市川左升がそれぞれ演じ、女役では女形の沢村宗之助がボルクマンの妻グンヒルドに、同じく市川莚若が義妹エルラに扮するほか、女優たる河原崎紫扇がファンニイ・イルトンを、おなじく市川松蔦がフォルダルの娘リーダを務めた。①

イプセン作・森鴎外訳『ボルクマン』第四幕

二人は森の木の疎らなりたる狭き高き処に達す。背後に嶮しい崖あり。左手遙か下の方には入海に接する広やかなる平地を見る。その奥には遠山重複せり。森の木の疎らなりたる処には雪高く積りいる。主人ボルクマンは先に立ち、エルラは跡に付きて、右手より苦し気に雪道を辿り来る。

主人　（左手崖の処に立ち留る）さあ、ここへお出で。お前に見せるものがある。

エルラ　（傍に寄る）何を見せて下さいますの。

主人　（遠方を指さす）まあ、あれを御覧。あの目の前に見えている広々とした土地を御覧。

① 河竹繁俊著『日本演劇全史』岩波書店、一九五九年。一〇五〇ー一〇五二頁。

エルラ　昔あのベンチに腰をかけて、わたくし共は今見える処より、もっともっと遠い処を見ましたのでしたね。

主人　さうさ。あの頃は夢の国を見たのだ。

エルラ　（沈黙に頷く）ええ。わたくし共の生涯の夢の国でしたね。今はその国も雪に埋められてしまいました。（間）そして御覧なさい。あの老木もとうとう枯れてしまっていますね。

主人　（相手の詞を聞かずに）あれ。あの港の外に煙を上げている大きな汽船があるが、あれがお前に見えるかい。

エルラ　いいえ。

主人　己には見える。（間）あれが行ったり来たりして、世界中の人間に交通させるのだ。そういう事にしようと己も昔は夢の中で思っていた。

エルラ　（小声に）その夢はとうとう夢の儘におしまいになりましたね。

主人　うむ。夢の儘でしまいになった。（聞き耳を立つ。）あれ、あの下の方の川の処で。（間）聞いて御覧。工場が器械を運転させているだろう。己の工場が。己が立てる筈であった工場のみんなが。あの器械を運転させている音を聞いて御覧。夜業をやっているのだね。夜も昼もあの通りやっているのだ。聞いて御覧。ね。車輪が渦を巻いてロラが輝いているのだよ。永遠に運転しているのだよ。①

こうした演劇の革新は坪内逍遙や森鴎外による西洋近代劇の導入で準備され、小山内薫と市川左団次による自由劇場の結成で本格化した。大山功による史書『新劇四十年』は、思想統制の厳しい太平洋戦争末期の刊行ながら、近代的な理念に導かれる新劇勃興の意義を忌憚なく伝えている。関東大震災が勃発し、築地小劇場が興起する一九二〇年代には、維新以来の文明開花を受けて、都市の生活と種々の学芸が成熟し、産業革命の進展につれて、労働問題の発生と社会主義への関心も顕著となった。

新劇勃興と築地小劇場（大山功著『新劇四十年』）

新劇はわが既成演劇としての歌舞伎劇、新派劇に反抗して起ったものであり、いわば既成演劇の革新を動機として起ったものである。しかし既成演劇の革新運動は新劇勃興当時に於て初めて起ったものではなく、それは遠く明治十九年の演劇改良の頃にまで遡ることが出来る。この演劇改良会は末松謙澄、外山正一を主唱者として当時の一流の官僚、実業家、学者、文士等が中心となり、市川團十郎を擁して、既成演劇の革新を目ざして起ったものである。その後尾上菊五郎、守田勘弥等が参加して演劇矯風会なるものへ再組織され、更に明治二二年再び組織を改めて日本演劇協会が設立された。

① イプセン作・森鴎外訳『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』（自由劇場脚本）、二四二―三四五頁。online.

これらの会の目的とする所は従来のわが歌舞伎劇を革新する所にあったが、結局は彼等の演劇の本質に対する無理解と、それから招来された誤れる写実主義のためにいわゆる「活歴」と称される新歌舞伎劇を残したことと、演劇改良会が理想とした歌舞伎座を建てた以外何等の業績も残さなかった。「活歴」は近代文芸、近代演劇に於ける写実主義とははるかに縁の遠い、皮相な史実尊重と徒らに高尚上品を衒う当時の官僚的国家主義の道徳的理想を主張した非芸術的な史観にすぎなかった。・・・

こういう情勢の裡にあってかって日本演劇協会の文芸委員たりし坪内逍遙は、早稲田専門学校に文学科を創設し、欧州の文芸、演劇殊に沙翁劇の研究に没頭し、一方制作に志すと同時に演劇の研究、評論を発表していた。そして遂に明治三九年その門下生を擁して文芸協会を起し、演劇の全面的革新に乗りだした。又坪内逍遙と同じ日本演劇協会の文芸委員たりし森鴎外も西洋の文芸、演劇の紹介、翻訳、批評を物し、特にハルトマンの独逸美学の立場から先駆的な意見を発表し、実際の劇壇に多くの示唆を与えていた。そこに新しい演劇創造の機運は漸く動きはじめた。

更らに明治四二年洋式の新らしい劇場たる帝国劇場の創立が企画され、女優の募集養成が開始された。また一方同じく洋式の劇場である有楽座が完成し、新派の一方の旗頭藤沢浅二郎は単独で東京俳優学校を立てた。そして、これらの新気運に促進されて文芸協会は組織を一新し、演劇研究所を設立して実際の革新運動に乗りだす色々な準備をととのえた。

このような外面的な事情によって漸く劇壇革新の新機運が醸成される一方、内面的にも新しい演劇創造の素地が出来上りつつあった。即ち当時の人々、特に若きインテリゲンチャは、わが国資本主義の発展と西欧自由主義の輸入とによって、漸く封建主義思想、感情をもった歌舞伎劇、新派劇に飽き足らざるものあり、

自己の生活感情を充足さしてくれる新しい演劇を願望してやまなかった。このような事情を背景にして起ったのが、明治四二年の自由劇場の創立であり、明治四四年の文芸協会の運動であった。そしてここにわが国新劇運動の第一幕がきっておとされたのである。

自由劇場はいうまでもなく小山内薫と市川左団次との共同事業であり、明治四二年十一月第一回試演をもってそのスタートをきったのであった。小山内薫は大學卒業後伊井蓉峯一座に関係して演劇の実際を研究すると同時に、日本演劇の批評等に筆をとっていたが、秘かに商業演劇の前途に深い憂慮を抱いていた。一方市川左団次は父を亡って以来、明治屋の孤塁を守って奮闘していたが、明治三九年松居松葉に従って渡欧し、西欧の演劇の実状を視察し翌四十年帰朝した。そして彼の地の演劇界の情勢に深く刺激され、演劇革新を目ざして敢闘したが、当時の人々には却て冷罵を以て迎えられ、迫害さえうけやうとした。このような環境と立場におかれた二人が、昔日の交流を層一層深め、ここに相携えて新しい演劇運動を起すべく創立したのが、自由劇場に外ならなかった。・・・

大正十二年の震災によって東京の主なる大劇場は殆どみな灰燼に帰して、再び演劇なぞの復興は何時の日か分からないという状態になってしまった。しかし復興事業は意外に早く進捗し、演劇娯楽等に渇望する民衆は次ぎつぎに建てられるバラック式の劇場へ殺到するという現象を招来した。第二期に於て殆どその姿をかくしたかにみえた新劇団も次ぎつぎに再生してきたが、殆ど仕事らしい仕事をすることなく消えていった。それらの中で最も大きな業績を残した中心的存在たるものが築地小劇場であることはいうまでもない。築地小劇場はかっての自由劇場の指導者であった小山内薫と、氏に師事して演劇研究のため独逸に滞在していた

後進土方与志との共同事業である。①

二五歳にして襲名し、明治座座元を引き継いだ二代目市川左団次は、明治三九年亡父の追善供養のあと九ヵ月の海外旅行に赴いた。まずパリでは『ノオトルダム・ド・パリ』の舞台に接し、女優サラ・ベルナールとも会見する。ついでスイスの湖畔にウィリアム・テルの墓を訪ね、イタリアではミケランジェロの天井画に感嘆。ベルリンではイプセンの『社会の柱』やゴリキーの『どん底』を観劇し、さらにイギリスへわたって俳優学校を参観するとともに、シェイクスピア祭に際して『ジュリアス・シーザー』等に接した。こうした研鑽の成果を抱いて帰朝後の左団次は、劇場と演出の改革に着手し、明治座で『ヴェニスの商人』を上演するものの、徒らに反発と嘲罵を浴びるのみである。以後数年不振と失意が続くなかで、旧友小山内薫はたえず彼を励まし、扶け合うふたりの先覚者が、やがて自由劇場の創建へと前進した。②

市川左団次・小山内薫の自由劇場結成（『左団次芸談』）

① 大山功著『新劇四十年』三杏書院、一九四四年。一三ー一七、六七頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』南光社、一九三六年。九〇ー九四、九八ー一〇四頁。
小山内薫「市川左団次の半生」（『小山内薫全集』春陽堂、一九三一年、春陽堂。第五巻、六七二、六七六ー六八五頁。）

小山内君をそもそも私が知ったのは十七、八歳の頃で、その当時私は雑俳に凝って元数寄屋町の鶯亭金升氏の門に通っていたので、その運座で始めて顔を合わせた東亭扇升、又の名富士見小僧と云ったのが小山内君で、まだ軍人志願の中学生時代で、その後高等学校の文科に入ってからは余り運座には顔を出さず、大学時代は伊井一座の真砂座に関係していて、私の洋行から帰った頃には浅草の瓦町に住んで真砂座とも関係を絶ち、専念演劇の研究に没頭して、その研究の結果をば聞かしてくれたので、非常に心強く思ったが、私の劇場制度改革の失敗当時のことを、小山内君は「この興行中私は毎日のように彼を楽屋に訪ねた。私は出来る限り彼の〈孤独〉を慰めた。彼は誰にも云はぬ憤激を私に洩らした。十何年唯ぼんやり付合ってきた私と彼は、この時初めて本当の〈友達〉になったような気がした」と書いてゐる。

そうして仁左衛門氏が明治座に一座していた明治四二年の三月のことであった。私は楽屋へ訪ねてきた小山内君をとらまえて「いつ迄こんなことをしていても、きりがない。この間から話している計画を是非とも実行しようではないか。一年に一回でも二回でもいいから、実際に自分のしたいと思う芝居をば演ってみたい」と、相談したのだった。

小山内君とても勿論賛成である。然しひどく謙遜して、今の自分の学問ではまだ到底不十分であるから、みっちり勉強をする間、もう十年待ってくれないかと云いだした。けれども私は、そう云えばそうでもあらうが、然し今出来ないことは、十年経っても出来ないに違いない。思い立った以上は、直ちにやらなければ駄目だ、と促し立てた。全くのところ、自由劇場はただこの勇気だけで出来上ったのであった。

従ってこの事業は世間からはかなりに危惧の念を以て迎えられた。然し興行演劇に於ては自分の思う儘に芸術家としての使命を果すということが出来なかったので、興行演劇を演らねばならぬ位置に置かれた私と

しては、この自責の念に全く苦しみ悶えていたのであった。そうしてせめては此自由劇場に依って俳優としての使命を果し、本来の演劇に為に尽したいと熱望したのであった。・・・

「始めて劇評の筆を執る」と書かれて、森田草平氏は縷々と述べられて、「これを要するに、今回の自由劇場第一回試演は予想外の大成功であった。それは役者の手柄でもなければ、背景のお陰でもない。直接イプセン自身の効果である。従ってイプセン劇を始めて日本に輸入した小山内薫、市川左団次の手柄である」と評された。

故鈴木泉三郎氏は『俳優評伝左団次』の巻のなかでその時の模様を誌されているが、「第一回試演を行った時のわれらの感動と云ったら、まァ何と云ったらよかろうか。丁度心の内に描いていた夢のような恋が叶った時の喜びにも似ているのであろうか。一人の友達はすこし取逆上せたのではあるまいかと思う程な、はしゃぎすぎた態度と表情で、上ずった声でその夜は明け方近くまで、わたしの部屋でおしゃべりをしていた。も一人は一緒に芝居を見ている内に、陰気に黙り込んで仕舞って、はねてからよそで少しばかりの会食の間も、涙ぐんでいるやうに見えて、話し声など震えていた。」 ①

かくして明治四一年小山内薫を主事、市川左団次を舞台監督として自由劇場が結成され、年二次の公演を原則として、島崎藤村や柳田国男など十七名を顧問に仰いだ。女優の人材が乏しいのを考慮して、第一回公演にイプ

① 市川左団次著『左団次芸談』一二八ー一二九、一三九ー一四〇頁。

センの作品中でも『ボルクマン』を推挙したのは藤村とされる。① 彼によれば、近代劇導入の社会的意義は、学芸の発達を促進するに止まらず、広く万民の思考や言談を革新するところにある。『若菜集』と『破戒』でわが国近代文学の口火を切った藤村は、『ボルクマン』観劇の前年自伝的な小説『春』を完成し、浅草新片町にて次作の長編『家』を準備しつつあった。

島崎藤村「自由劇場の新しき試み」

自由劇場でこの秋舞台に上せようとするのは、いわば近代劇そのものの翻訳を試みようとしているのです。・・・イプセンなどの戯曲を上場すると云うことは今までになかったのです。すべての点から云って、今日完全なものを求むることは、無論できませんが、ただよく全体を纏めたと云われるよりも、鬱勃たるイプセン劇の新味を、幾分なりと提出して貰いたいと願っています。文学の方面から云っても、海外に於ける、露仏もしくは独伊等の新作物が、翻訳されて伝えられたと云うことは、筆を執るものにとって、刺激を与えるばかりでなく、またそれを味う人々の眼をも覚したのであります。清新な外国の作物が翻訳され、また現にされていると云うことは、新文学の興るについて大なる刺激を与えたので、従来とは異なった人世の取扱い方、なんらの束縛なき物の見かた、自然の愛などを教えたのです。こう思うと劇そのものの翻訳にも、これが刺激となり、導火線ともなって、新しく興って来る劇の先駆ともなろうと考えます。私が今度の自由劇場

① 伊藤整著『日本文壇史十五 近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一二五ー一二九頁。

に於て、イプセンの作『ボルクマン』を上演するについて、望を嘱しているのは、そこにあるのです。

振り返って今の時世をを見れば、過去の人々が享楽した演劇音楽等は、吾らにとって真に隔世の感がある。今は実に落莫たる時である。「生」を享楽すべきものの極めて少い時である。せめて新しい芝居の起って来るまでー吾らだ胸いっぱいに泣いたり笑ったりすることのできる芝居の起るまでー西洋近代劇の忠実なる翻訳によって、自分等に近いものを、舞台の上に見出そうではありませんか。・・・

演劇が吾ら日常の会話に及ぼす影響も多い。武士道とか、禅とか、その他昔から種々な教育を経て来て、吾らは沈黙に慣らされたが、その結果は自己を表白するに拙いものとなった。吾らはあまりに言葉を卑み過ぎた。イプセン劇などがこれからしばしば演じられて、ああいう自由な、陰影の多い言いまわしが可笑しくなく聞えて、自然とそれが多くの人の会話にも上るようになると、その影響は大きなものだろう。①

伊藤整の大著『日本文壇史』の第十五巻「近代劇運動の発足」には、自由劇場第一回公演に向けた明治文壇の関与と反応も詳しく叙述される。この劇団は千五百人を限度する会員組織であって、年会費は二円五十銭、会員には家族をも含む観劇の特典が与えられる。②

① 島崎藤村著『後の新片町より』新潮社、一九一三年。二〇四ー二〇七、二二一ー二二二頁。

② 伊藤整著『日本文壇史十五　近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一二五ー一二九頁。

自由劇場第一回公演第一日（伊藤整著『日本文壇史』）

自由劇場の公演の第一日なる十一月二七日には、顧問として関係した文壇人や画家たちだけでなく、若い文士や学生たちも大きな期待を持っていた。当日は島崎藤村、蒲原有明、柳田国男、岩野泡鳴、徳田秋声、岩村透、田山花袋、和田英作、北蓮蔵、森田草平、正宗白鳥などが集った。翻訳者の鴎外はこの日、内務大臣平田東助の息子の結婚式に招かれていたので、母の峰子が孫の於菟と茉莉を連れて出かけた。鴎外は二日目を見に行くことにしていた。また小山内自身も執筆者の一人である『スバル』からは小山内の友人の吉井勇と長田秀雄が見に来ていた。また、学生たちのなかには、東大の国文科の二年生で、数え年二四歳の谷崎潤一郎というのが平土間の椅子席で見ていた。・・・数え年二五歳の長田秀雄は、もう寒い頃であったので、外套を着て『スバル』の同人たちと有楽座に入った。彼の席は土間の真中辺であった。小屋は満員になっていた。・・・

『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の劇ははじまった。左団次は頬髯をつけ、老人の身ぶりで現れた。重つ苦しい芝居であったが、この舞台も背景も演出も、すべてがこれまでの日本の演劇とは違って、イプセンという西洋の劇作家の創造をそのまま実現しているという強い印象が観客を捉えて離さなかった。・・・

芝居がすむと、湧くような拍手が小屋を満たし、しばらく鳴りやまなかった。文士や画家たちは、場内の食堂なる二階の東洋軒で行われる慰労会に出席した。『スバル』関係の若い作家たち、吉井勇や長田秀雄などはその人々のあとから上って行った。二間をぶつ通しにしたそこの二階の部屋に椅子や卓が雑然と並べられたあった。長田は隅の椅子に腰を下して恐る恐るそこに集った先輩たちをみまわした。三六歳になる藤村、

花袋、秋声のほか、もう三つ、四つ若い蒲原有明や官吏の柳田国男、それに美術評論家の岩村透などが煙草の煙を吐きながら談笑していた。舞台装置を手伝ったという和田英作、中沢弘光、岡田三郎助その他の画家たちが疲れ果てたような、しかし満足した目つきで集まっていた。入口のドアが開いて、小山内薫と市川左団次を先頭に、自由劇場の俳優や関係者の全部が、顔の作りを落とし、衣装を着かえて現れ、挨拶して細長い一つの卓のまわりに坐った。皆の前に盃が置かれ、ボーイたちがシャンパンを注いでまわった。岩野泡鳴が立ち上って、元気のいい声で祝辞を述べ、小山内薫が劇場関係者を代表して答辞を述べた。一同は心からの拍手をしてその労をねぎらい、成功を祝して乾杯した。　①

こうした自由劇場の公演は、年度にして第一回から第四回まで有楽座を舞台とし、第五回から第八回までは帝国劇場に替えて行われた。与謝野晶子が最初これに接したのは、明治四四年六月一日有楽座においてある。この興行では長田秀雄作『歓楽の鬼』、秋田雨雀作『第一の暁』、吉井勇作『河内屋与兵衛』、メーテルリンク作『奇蹟』の四本小山内薫の演出で組まれ、左団次は『歓楽の鬼』と『河内屋与兵衛』の各主役を演じた。②　日本人による戯曲を初めて舞台にするとあって、当日は島崎藤村、徳田秋声、正宗白鳥、木下杢太郎、高村光太郎など著名な文学者も観劇する。『明星』の同志ともここで再会した与謝野の記録は、新劇勃興の雰囲気とともに、新

① 伊藤整著『日本文壇史十五　近代劇運動の発足』講談社、一九七九年。一三三―一三七頁。

② 小山内薫・市川左団次編『自由劇場』自由劇場、大正元年。付録。

たな戯曲上演の意義をよく伝えている。歌集『みだれ髪』で名高い彼女は、この年『新訳源氏物語』の執筆を始めるとともに、平塚雷鳥に賛同して『青鞜』創刊号へ詩作「山の動く日来る」を寄稿した。

与謝野晶子「自由劇場の印象」（『定本与謝野晶子全集』第十四巻）

六月一日、二日と催された自由劇場を初めの夜に観に参りました。私共の席の側の箱に藤村様の顔が見えました。並んでいらっしゃるのは秋声さんと白鳥さんと承りました。左の二階には木下杢太郎さんが独逸人夫婦を伴れて来ておられる。その周囲には今日演じる新しい脚本の作者達やその友人達の若い作家が集っておられる。中にも黒地に紅い肩章のある上等兵の服を着た長田秀雄さんが目に立って見えました。後で廊下でお目に掛かると、今夜は特別に中隊長の許可を得て十二時までは外出が叶うのだと仰っしゃる。幕が明くと岡田八千代さんにお目に掛かる。お久しくと御挨拶する。どういう訳か少しお痩せになった様な気がしました。鈴が鳴り出したので席に就こうとすると、一列おいた後の方で挨拶をなさるのは高村光太郎さんでした。前の團十郎の娘さん達の組みの近くに平出（修）さん御夫婦がお嬢さんを伴れて来ておられる。例によって小山内さんの開会の挨拶がある。きゃしゃな姿のこの若い舞台監督がフロックコオトを著けて、大きなネクタイをひらひらさせながら、つやを消した銀色のよく徹る声で気の利いた挨拶をなさるのを聴いて、先年平田禿木先生が倫敦の舞台で観て来たとお話しになった愛蘭土生れの詩人イェエツの挨拶ぶりなどが想い出されました。「三つながら私共と同じ若い作者の若い心持で作った一幕物を選んだ」と仰った時は何かなしに目がうるみました。

長田さんの『歓楽の鬼』の博士夫人はイプセンの書いた女を想わせるような台詞に面白い所があると思いましたが、延若の扮装が芸妓の様であったのと、博士と話しながらヒステリイ風な気分になって、反抗的な台詞に移る間が、少し突然であったのと、博士に死んだ子の事を言われて、直ぐに平凡な日本の女に復って仕舞って、泣きじゃくる所が、呆気なかったのとを物足りなく感じました。・・・良人が畢生の著述に従おうとする病苦を振棄てて、良人の家を出て行こうとする夫人の主我的意志的な所は、一種のノラを想わせて、あれ位露骨なのが面白いのですが、亡くなった子の為にせっかく覚めかけた新しい心を頓挫して仕舞うのは、性格の発展が矛盾していると思いました。・・・

次の幕の秋田雨雀さんの『第一の暁』は前のと違って翻訳物臭くない、型の無いきびきびとした、全く新しい技巧で出来た一幕物でしたが、俳優に作為が飲み込めていなかったらしいのと、舞台の装置がうまく行っていなかったのとで、変に呆気ない物になって仕舞いました。・・・猿之助の扮した三五郎が自分の斬った先学者の志を継いで、「僕は城へ帰りたくない。あの冷い牢獄の様な板間を踏んで何をするのだ。空気の腐った白壁の中から、藻の生えた濠を眺めていて、何をするのだ。僕は行く。其処には暖かな春と自由と云う大野があるのだ。国と国が友達のように手を握る。だが其処へ行くには大きな戦争があるかもしれない。」といって遠い行方の知れぬ漂泊者となって、城下を離れる気持は、私の胸にも応えました。この三五郎もまた第二の犠牲だと思いました。而して今夜この有楽座に集った若い芸術家と若い女との中には、三津丸もおれば、三五郎もおる、と思うと湿った心も躍りました。

この『第一の暁』の象徴は現代の大勢であり、現代の先覚者たる若い者の心であると思います。新しい歓喜を期待する改造、如何にもそれには是非はげしい一戦争を要します。保守と進歩との争い、野蛮と文明と

の争い、親と子の、社会と個人との争い、古い権威と新しい生活との争い、それは悲惨ではありますが、とにかく革新の元気に満ちた愉快な時運に出遇ったのを喜ばねばなりません。真に生き甲斐のある私共だと思います。妥協を排して各自に真剣な生活を作り出す時代が近づきました。既に芸術家と若い婦人との世界にはその第一の曙光が見え出したじゃありませんか。

箱の中へ子供を伴れて来ている羽左衛門に何か言って、下の席の女優達がはんけちを投げたりしていると、吉井勇さんの『河内屋余兵衛』が開きました。岡田画伯などの御苦心なすっただけあって、第一に舞台が目新しく整っていました。向かって右に大きな黒びかりのした油桶が六つ七つ並んで、暗い夜の陰に種油の匂いがしそうです。正面は広く内庭を取って、奥の突き当りの表口には大きな戸が締っています。・・・

余兵衛の傍には妹が座ったまま、うなされて居る兄を夜明けまで守っていました。余兵衛は、夢で長崎の商人が預けて行った絵の中のドン・ファンと云う立派な若い人に逢った。その人は美しい言葉で、わしの思って居ることと同じ心持を言って居た。その人もまたわしの様に「長崎」へ行きたいと言って居た。わしはもうしばらくもこんな土地に居たくない。長崎へ行こう。そこへ行ったらドン・ファンという人にも逢われるかもしれない。「長崎へ、長崎へ。」こう云って夢を見て居るような気分になって、よろよろと庭へ跳び下りながら、裸足で表口を明けて駆け出します。「兄さん、わたしも伴れてって下さあい。」と云う声が、大きな潜り戸を明け放したままの表口から舞台に響き渡る。外はすっかり白く夜が明けて居る、空虚になった河内屋の店は夜の様に寂寞。幕が徐々と下りました。

この劇の暗示する所も前の『第一の暁』と同じく、今の若い男女の心持ちです。幾多の余兵衛とその妹とは、この劇がかように舞台の上で成功を得た如く、自己の改造に勝利を得ねばなりません。「長崎へ、新し

い思想の生活へ。」と感動した私の心も、余兵衛の妹の健気な後を追いました。

次のマテルリンクの『奇蹟』の幕が明く迄廊下へ出ると、荷風さんと良人が立話をしています。某さんが、勇さんの御父様の吉井伯爵も、勇さんの妹さん達も二階に来ていらっしゃるなどと教えて下さいましたので、「それでは余兵衛の妹よりも、実際の余兵衛のお妹さんの方がお美しいでしょう」と申しました。 ①

大正二年坪内逍遙門下の島村抱月を主幹として芸術座が結成され、文芸部には中村吉蔵、秋田雨雀、水谷竹紫らが、俳優陣には主演女優の松井須磨子をはじめ、沢田正二郎や倉橋仙太郎が参加した。メーテルリンクの戯曲『モンア・ヴァンナ』および『内部』を掲げて、最初の公演は有楽座で十日間行われる。しかし、興行的な見地から芸術性に大衆性を加味する方針に転換し、第三回公演にはメロドラマ『復活』が採択された。帝政ロシアの社会批判を基調とするトルストイの大作を、安易に改編した『復活』の稽古中に、沢田ら多くの男優は脱退したが、その主題歌「カチューシャの唄」は、松井須磨子の好演もあって巷間に絶大な人気を博するに至る。②

芸術座の『復活』と「カチューシャの唄」（秋庭太郎著『日本新劇史』）

① 与謝野晶子「自由劇場」『定本与謝野晶子全集』第十四巻（評論・感想集一）講談社、一九八〇年。四六三ー四七〇頁。

② 河竹繁俊著『日本演劇全史』一〇五九ー一〇六〇頁。

（大正三年）『海の夫人』『熊』に次いで三月二六日から六日間、帝劇に於ける第三回芸術座公演に抱月脚色のメロドラマ『復活』の如きは、明確に大衆を目指しての演目で、さきに「今年の劇壇と芸術座の事業」で抱月が述べた芸術座のレパトリーの方針がはっきり具体化されたものであった。・・・芸術第一主義を標榜して旗揚げされた芸術座の幹部の、この時分における世間に売らんかなの妥協振りが窺われるが、これも芸術座の経済的基礎工事のためには是非なきことであったのであろう。とにかく「カチューシャ可愛や、別れのつらさ、せめて淡雪とけぬ間に、神に願いをララ掛けましょか」云々の唄は、第一幕と第四幕に唄われ、非常な効果を挙げ、さうしたことから『復活』という芝居を喧伝せしめ、低級ながら新劇趣味を全国的に普及せしめるに及んだもである。・・・

劇中歌カチューシャの唄が当時如何に流行したかは、その当時抱月宅に身を寄せていた作曲者中山晋平の次の言によって明らかである。「カチューシャの唄もかなり伝播力が早く、帝劇の興行は三月だったのですが、興行中すでに町を歩いてみると、そのメロディーを聞くことが出来ましたが、四月、五月に成ると東京中盛んに歌われるようになっておりました。そのうちに夏休みが来て、東京の学生が故郷に帰って歌い拡めるという事になったので、半年位のうちに日本全国どこへいってもこの歌が聞かれるようになり、芸術座が『復活』を持って巡業するとき、大げさに言うと無人の境を行くように楽であったということです。・・・

帝劇を打ち上げてから翌四月に芸術座は、新劇普及興行という触込みで、『復活』をもって浅草公演を試みたのも、所詮は座の経済がそう楽でなかったからであろう。新劇普及と言い条、売らんかなの興行政策に外ならなかったと言えよう。・・・一部からはまたぞろ堕落呼ばわりされもした。また一方には座長の須磨子に対して、「私は用事があって浅草へ行き、駒形の通りを歩いていると、異様な広告の行列に出会いまし

た。彼等の持っている赤い旗には、白くある字が染め抜かれています。見るとそれには、松井須磨子一行、カチューシャ劇、常盤座などという文字が記されているではありませんか。私は思わず立ち留まって、この異様な広告の行列を眺めました。カチューシャの唄を奏している笛の音や太鼓の響きは、ものうげに春の空に消えてゆきます。そして私は次第に砂埃の中に遠ざかってゆくこれらの人々を悲しく見送らずにはいられませんでした。」云々と好意的に忠告を与えた吉井勇のような人もありはしたが、それと知りつつも芸術座は経営上やむを得ず、かかる通俗劇をもって大衆的債安興行をその後もしばしば行ったのである。①

陸軍軍医たる父を幼くして喪くした小山内薫は、つとに東京帝国大学の学生時代に、文芸雑誌『万年草』に投稿し、森鴎外と上田敏の知遇を得た。鴎外を介して新派の俳優伊井蓉峰に紹介され、彼は深川の芝居小屋『真砂座』に迎えられる。小山内薫と二代目市川左団次とにより結成された自由劇場は、明治四二（一九〇九）年初の公演として新築の洋式劇場、有楽座でイプセンの戯曲『ボルクマン』を披露した。その翌々年渋沢栄一を創立委員長として帝国劇場が落成し、自由劇場の公演は以後ここで行われる。やがて小山内は演劇視察のためヨーロッパ諸国を歴訪し、モスクワ芸術座でゴーリキの『どん底』等に感銘を受けた。② 大正三年帝国劇場では芸術座

① 秋庭太郎著『日本新劇史』理想社、一九五六年。二三六、二三八ー二三九、二五三ー二五四頁。

② 小山内富子『小山内薫ー近代演劇を拓く』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。五一、八二ー八四、一〇五ー一〇六、一二一ー一二二、一二九頁。

の島村抱月演出、松井須磨子主演によってトルストイ原作『復活』が上演され、その主題歌『カチューシャ』が世を風靡する。一方帰国した小山内は同年やはり帝劇でゴーリキの『夜の宿』（『どん底』）を演出するとともに、島村・松井に対抗して有楽座でアンドエーレフの象徴劇『星の世界』を有楽座で上演。自由劇場の公演は以後四年間中断し、大正八年に復活するも不評に終った。この間に彼は大劇場の営利主義や興行の低俗化に違和感を募らせる。小山内の慨嘆「新劇復興のために」は大正六年より雑誌『新演芸』に連載され、商業演劇への失望と訣別が表明された。

商業演劇への失望と訣別（小山内薫「新劇復興のために」）

日本の「新しき芝居」よ。哀れな日本の「新しき芝居」よ。お前のこの頃の痩せようはどうだ。お前のこの影の薄さはどうだ。お前はオイケンやベルグソンやタゴオルのように、やっぱり「一時の流行」であったのか。

お前が始めて外国からこの国へ渡って来た時、この国の所謂「有識者」はどんなにお前を歓迎したろう。どんなにお前を有難いものに思ったろう。そして、どんなにお前を無くではならぬものに思ったろう。

然るに、今日のお前はどうだ。お前は僅かに「田舎廻り」に生きている。お前は辛くも浅草公園に生きている。そしてもう「有識者」とは何の関係もなくなってしまった。「有識者」の末流とも何の交渉もなくなってしまった。・・・

お前がほんとに莫迦にされ始めたのは、あの「カチュシャの唄」からだ。『復活』は、お前にとって『復

活』ではなかった。『復活』ではなく、『死滅』だった。「カチュシャの唄」で当った『復活』ートルストイにはほんの僅しか関係のない『復活』ーまるで黙阿弥の芝居を見るようなセンチメンタリズムの『復活』ーあれから、お前の本当の姿は段々舞台の上に見られなくなった。お前は段々名前ばかりになった。そして、名前ばかりのお前がお前だとして、今までお前を見た事もない人達に喝采され出した。そして、今まで不完全なお前の姿の内にも本当のお前を求めてやまなかった人達が、段々お前を遠ざかるようになってしまった。

芸術座が「二元の道」を説き出したのも、丁度その頃だったろう。「二元の道」とは何の事だ。簡単に言えば、一方では神に仕えながら一方では人に仕える事だ。そう言うのが若しむづかしえれば、一方では金儲けをしながら、一方では芸術家になろうというのだ。即ち、少しは俗衆の媚びても、先ず金をうんと儲けた上で、それから損得を顧みない純粋な芸術を見せようというのだ。・・・

『復活』で味をしめた芸術座が二元の道を説き出してから、お前は本当にみじめな目を見始めたのだ。お前はやがて浅草の六区へ連れて行かれた。お前は大阪俄や活動写真と一緒に陳列された。そして、あの埃だらけな、外から見通しな野天のような舞台で、薄暗い醜い光の中で、臭い息と噎せるような烟の籠った空気の中で、耳も聾になりそうな騒がしい物音と人声の中で、八公熊公の前にお前の姿を晒さなければならなくなった。あたりが騒がしい為に、役者の声は段々高く叫るようになった。あたりが騒がしい為に、役者の目は段々大きく見張るようになった。役者は群衆の勢に負けまいとして、舞台の上で出来るだけ荒ばれた。哀れな日本の「新しい芝居」よ、かくしてお前は咽喉を割られたり、まなじりを割られたり、手足を抜けほど引っ張られたりした。無惨に傷つけられたお前の魂は、やがて公園の池に投げ込まれてしまった。・・・

「新しい芝居」よ。決して失望してはいけない。決して落胆してはいけない。お前の本当に立つのは寧ろ

これからだ。今までお前に追従して来た者は、みんな嘘の人間だ。今のような姿になったお前を見捨てないで、もう一遍これからお前を守り立てて行こうという人が、本当にお前の味方なのだ。①

築地小劇場の創立者土方与志は、伯爵土方久元を祖父とする。久元はかって土佐藩勤王の志士であり、文久三年三条実美らの七卿落ちを護衛。やがて坂本龍馬等とともに薩長連合を支援し、幕府を大政奉還へと追い詰めた。維新後彼は男爵に列せられ、第一次伊藤博文内閣では農商務大臣と宮内大臣を歴任する。② その孫与志は幼くして父を喪くし、二十歳若さで爵位を相続する。学習院中等科に在学の頃からイプセンなどの戯曲を読み始め、帝国劇場で『ジュリュアス・シーザー』の舞台にも接した。また、素人劇壇の友達座を同級生と組織し、みずからは舞台監督を担当する。以後帝国大学文学部に進学して、小石川の自邸に模型舞台研究所を設け、友達座によるメーテルリンク作『タンタジールの死』を渋谷福沢桃介邸の丸太小屋で披露。一九二〇年帝国劇場の公演記録には、ワグナーの楽劇『タンホイザー　星の歌巡礼の場』総指揮山田耕筰、合唱指揮近衛秀麿に加えて、演出土方与志と誌される。その翌年土方は山田耕筰の紹介で小山内薫を訪ね、弟子とされるよう懇請し、試練として明

① 小山内薫「新劇復興のために」『小山内薫演劇論集』未来社、一九六四年。第一巻、三五、三七ー三八頁。）

② 渡辺修二郎著『評伝　松方正義・土方久元』同文社、一八九六年。一七一ー一七五頁。

土方久元著『回天実記』東京通信社、一九〇〇年。四頁ー

治座にて市川左団次一座の『俊寛』に舞台装置を施した。①

人生の煩悶とヨーロッパ留学（土方与志「灰色の築地小劇場」）

一九二〇年私は職業的演出者となるために、小山内先生の助手として徒弟的な修行をつむことになった。そして先生の戯曲『第一の世界』に、初めて演出を担当することが出来て、とにかく劇団にデヴィューした。

この頃は私生活の上では、いわゆる栄爵と一緒に先代の遺していった三十余万円の借金の整理も一形つけ、其の結果数万円を浮かせ得たので、ほっとしたところだった。しかし、この時代にまきおこったデモクラシーの波は、私のようなものをいろいろ考えさせた。なお、周囲の特権階級の中にある横暴や虚偽や矛盾に対しても人並みの不満を感ぜずにはいられなかったし、まだ〈河原乞食〉などの観念があって、私の選んだ道には相当の石ころがあった、

特権階級の一員として、また有産者としての不安や事績や、一九一八年頃からの「演劇における理想主義者」としての、当時の劇団に対する不満や、特に小山内先生のすすめによって初めて知った平沢計七氏の指導していた労働劇団に対する異常な感激等で、どうにもならないあせりを感じていた。

私は息苦しくもあり、面倒臭くもあり、誰に何ともなく腹だたしくもあって、日本を離れようと考えた。

① 土方与志「自伝」（『土方与志演劇論集　演出者の道』未来社、一九六九年。三九五ー三九七、四〇一ー四〇二、四〇六ー四〇九ー頁。

その結果としてどこへというあてもなく、漠然と、しいて目的をつければ、優れた演劇を学ぶことの出来るヨーロッパのどこかの国に行こう、しかしいつまでということもはっきり考えずに、また出来たら家族も次第に呼び寄せて、移住してもいいつもりでさえいた。一九二二年私は一人で外遊の途に上った。・・・

パリについた。エトワール凱旋門の近くのオテル・パンションの北向きの屋根部屋におさまった。モスクワ芸術座のソヴィエト国外客演第一夜の『どん底』を見たのはその夜だった。私はこの夜の観劇およびその後毎夜芸術座の上演を見たことを今にして思えば、稀有の幸福であったと考えるが、またこの観劇は、ここに語ろうとする築地小劇場九年のためには決して幸福のものでなかったといわねばならない。私は『どん底』『桜の園』『ステパンチコフ村』『村の一日』等を連夜見つづけた。これら旧ロシアの生活を描いた作品は、もちろんロシア語のわからなかった私が深く内容を理解することは不可能であったが、私に激しい観劇を与えてはくれなかった。『どん底』の上演も、なにか完成美というようなものは感じたが、ひどく平板なものに感じられた。・・・

当時パリの劇壇は非常に盛んであった。国立劇場のほかに多くの小劇場も、それぞれの特長をもって存在を主張していた。私の最も多く訪れたのは、ジャック・コポーのヴィユウ・コロンヴィエ座と、北欧の近代劇を多く演じるリュネ・ポーの創作劇場であった。私は暮から正月にかけて率直にすべての観劇の印象を小山内先生に報告した。

一九二三年一月ベルリン大學に演劇科が開かれると聞いたので、ルール占領、そしてさらにヨーロッパ戦争の再発の噂をよそに、フォッシュ将軍の軍隊と一緒の汽車でベルリンに着いた。・・・当時ベルリンは表現主義演劇の最盛期であった。私はゲオルグ・カイザーの世相的戯曲の上演や、またエルンスト・トラー、

カール・チァペック等の作品に興味を感じた。革命的演劇運動はまだはっきりと現れていなかった。エルウイン・ピスカールなどは場末の劇場で、トルストイの『闇の力』などを上演していた。①

産業革命の進展と労働問題の深刻化のなかで、大正期には社会主義の影響を受けた劇団も誕生した。「新民衆劇の萌芽とも云うべき」と戯曲家中村吉蔵は大正十年の雑誌時評に下町の探訪を書く。「一風変わった芝居の催しを見た。場所は深川の錦糸堀から五の端へ出た市外大島町の五の橋館という寄席である。三、四百人位入れる小劇場程度の建物で、舞台は四、五間の幅しかないが、そこを利用して労働者出身の文筆である人が、労働問題を取扱った脚本を作り、旅廻りの少数の俳優を相手に、作者自身も登場してそれを上演した。付近は工場労働者が群居しているのだから、彼等は続々その寄席へつめかけて席は忽ち満員となって了う。舞台に展開する劇は、芸の巧拙は兎も角、直に観客たる労働者の心臓にまで高い鼓動を伝える題材なので、彼等は熱をもってそれに共鳴して行く。そこに他の劇場では見られない生きた光景があった。」②

平沢計七最初の戯曲『夢を追う女たちの群』は、鉄道院浜松工場に勤務する大正三年に発表された。上京後も戯曲と小説を書き続ける彼によって、江東地区に労働劇団が結成され、亀戸の五の橋館において、大正十年十二月九日から三日間と翌年二月から三日間、『失業』など平沢の脚本五つが上演された。蟄居中の小山内薫に推奨

① 土方与志「灰色の築地小劇場」(『土方与志演劇論集　演出者の道』一一一ー一一三頁。

② 中村吉蔵著『現代演劇論』豊国社、一九四二年。八六ー八七頁。

され、土方与志や中村吉蔵を感服させた舞台はこの企画である。つぎにその一端を示す作品『大衆の力』は、大地震の二ヵ月前に、プロレタリア運動の雑誌『新興文学』に掲載された。①

労働者の苦悩と争議（平沢計七の戯曲『大衆の力』）

舞台は初夏の夜の七時。舞台は職工の酒場。正面の壁にビールの広告絵、労働問題演説会の辻ビラ。酒肴である事と、酒一合十八銭、刺身御一人前二十銭等の定価表を読んでこの酒場が極く安直な酒場である事を知る。・・・

高井　俺もいつかの演説会で聞いたのだ。だがそれに違いない。俺達は資本主義にしっかり身体を縛られて、自分自身の生活が無いんだ。俺達が人間として活きるには、先ずこの俺達を縛っている資本主義の鉄の鎖をたたっきらなくっちゃいけないんだ。その為には労働運動しなくちゃならない。だから、俺達は労働運動するために活きているんだ。（昂奮する）だから今度の事はどいつが反対しようと、是非やっつけなくてはならない。

佐久間　（声を潜めて）それは先刻から云っている通り、旋盤工場じゃみんな賛成なんだよ。ねえ、豊田さん、あなたさえ承知すれば、直ぐにでも爆発するのだがね。

豊田　だから私も反対しません。しかし今はその時機でないと云っているんです。私は喧嘩を始めたなら

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝　平沢計七』恒文社、一九九六年。六一ー六七、一一五ー一一九頁。

ばどうしても、その喧嘩に勝たなくってはならないと思っている。ところが、今会社の全職工が気を揃えてたったとしても、私には勝算がないのです。誤解せずに聞いてください。私は理由なしに反対しようと云うのじゃない今起ったならば職工が負けるにきまっている。

高井　そんな事は知っているよ。（荒々しく）金と金とでの喧嘩ならばよ、労働者が負けるにきまっているんだから、負ける覚悟でやろうじゃありませんか。その代り資本家の一っぴきくらい眠らせるにゃ俺一人の力でもたくさんだ。なあに、いよいよとなれば、命を投げ出すだけの話さ。・・・

豊田　ま、そう怒らずに呉れたまえ。そのうちに良い時機が来るからね。

高井　わかったよ。工場を追い出されちゃ飯は食われないからね。ヘン、頼まねえ、俺達だけで、やら。矢はもう弓を離れているんだ。（佐久間に）なあおい。

佐久間　まあ待て、もう少し話して見よう。ねえ、豊田さん、ストライキって奴は、考えてやるようなものでなくて、考えるひまも何もあらしない。堪忍袋の緒の切れてやるんだからね。（卓を叩いて）会社がこの頃の横暴はどうだ。武田の馘首になったのも内山の転勤になったのも、仕事が無いからじゃないのだ。骨っ節のある奴を片付けけてから、こちとらの料理にかかろうって寸法だ。みんなの身体に火の粉がふりかかっているんですぜ。仕事は山程あるんだが、世間がひまだから高級者を追い出して、新規の職工を安く使おうと云うのだ。こんな時に黙っていちゃ労働者の恥だ。世間の奴等に笑われらあ。日本鉄造の職工は如何にも骨無しだってな。第一、くびになった武田に対しても義理が悪いや。

豊田　（静かに）それはよく知っています。①

① 平沢計七「大衆の力」（『平沢計七先駆作品集＝一人と千三百人／二人の中尉』講談社、二〇二〇年。二八三－二八五頁。

第二節　新劇の勃興と震災前夜における新劇人　その二

女優養成の嚆矢～自立への願い伊沢蘭奢～震災前の舞台水谷八重子～貧しき家庭山本安英～ロシア在住東山千栄子～十五歳の夏及川道子～土蔵劇場のパトロン相馬黒光

演劇革新の重要な要素である女優の養成は、明治四一年川上音二郎と川上貞奴により設けられた帝国女優養成所が嚆矢とされる。その開所式が芝の大庭理髪店二階で開かれ、列席した渋沢栄一は入学者に次のような式辞を述べた。「従来世間から賤しめられていたものが三つある。一つは私の様な商人で、女子と俳優だ。私はその賤しめられた素町人の立場から、大いに女子と役者に同情を表する。」① この養成所は三年後帝国劇場に付属技芸学校として受け継がれ、第一期の女優十一名が同劇場で河竹黙阿弥原作の『透写筆命毛』等に起用された。こうした女優の養成と起用の歴史的意義が、大地震三年前に刊行された『帝劇十年史』に記述され、演劇志望者への激励も付記される。

① 井上清三著『川上音二郎の生涯』葦書房、一九八五年。一〇七ー一〇九頁。
「女優養成所開所式」『渋沢栄一伝記資料』第二七巻、四三八頁。

「帝国劇場技芸学校」（杉浦善三著『帝劇十年史』）

炯眼なる川上（音二郎）氏は組織的に女優を養成する事の必要と利益なるを思い、ここに芝区桜田本郷町十七番地に帝国女優養成所なるものを設置し、妻女貞奴をしてこれにあたらしめ、一方帝劇の諒解を得て新女優志願者の募集を開始す。・・・（明治四二年七月）これを帝劇の直轄経営に移し、校舎として構内に新館六二坪の工を起し、学則その他を東京府庁に申達して認可を稟請し、十七日を以て時の府知事阿部浩氏よりその指令を受く。・・・

四三年三月二六日帝国劇場株式会社取締役会長・男爵渋沢栄一氏、付属技芸学校総長に就任し、技芸学校はここに内容外形共に具わりて其存在を明かにし、同年九月十六日第一期卒業生十一名を出せり。・・・顧れば、付属技芸学校開校以来入学せるもの合計五五名、此中完全に業を卒えたる者三六名、現在生徒十二名、落伍者通計七名也。而して三六名の卒業者中、現に帝劇に出演しつつあるは十九名にして、他は廃業者若しくは他座に転じたるものなり。

案じるに吾女優界は未だ過渡時代に属し、かのエレン・テリーの如き、サラ・ベルナールの如き、エレオノラ・ドゥーゼの如き、若しくはモウド・アダムスの如き一代の名優を出して、劇壇を風靡する事難しといえども、そもそも吾国劇が出雲の阿国なる一女性によって創始せられ、爾来幾百年の繁栄を持続し来りしは、つとに諸賢の知る所なるべし。ただ吾邦における女優の発達は、徳川幕府の風俗取締政策によって阻止せられ、ここに一頓挫を来たせり。かくて今日の女優はかえって教えを男優に乞うに至れるは、やむを得ざる理

数ならんや。然れども言うを休めよ、女優は男優を凌ぐ能わず、と。吾国劇の揺籃を揺り動かせるはものは女優にあらずや。要は研究努力の如何にあり。彼等にして他日若し出雲阿国が一世を風靡したるに倣うを得ば、ひとり彼等の為のみならず、演劇界全体の為に慶すべきの事たり。いささか付言して女優諸嬢の奮起を要望す。①

昭和二年帝国劇場の檜舞台で美事主役を果たし、新たな大女優と注目された伊沢蘭奢（三浦シゲ）は、森鴎外の故郷津和野で製紙業の娘として育った。十九歳の春叔父や媒酌人の勧めに従って製薬業の子息伊藤治輔と結婚し、翌年長男の佐喜雄を出産。しかし、事業の不振と大家族の因習が夫との軋轢を募らせ、やがて六歳のわが子を残して婚家を離れた。彼女が女優への道を志して上京し、近代劇協会上山草人のもとへ入門したのは、大正七年二九歳のときである。こうした果敢な決意の動機は、松井須磨子主演『人形の家』を観劇した感銘や、同郷たる徳川夢声と中村吉蔵からの啓発を含むとされる。②

女優への志願と訓練（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

① 杉浦善三著『帝劇十年史』玄文社、一九二〇年。一一九－一二〇、一二三－一三一頁。
〔参照〕「帝国劇場付属技芸学校」『渋沢栄一伝記資料』第四七巻、四一五－四二三頁。

② 伊沢蘭奢著『素裸な自画像－伊沢蘭奢遺稿』世界社、一九二九年。二三－五三頁。

わたしは二二、三の頃から女優になりたいと思っておりました。もとより明確な芸術的意識というむづかしい考えもなく、ただ漠然と女優になってみたいと思う念願が胸一杯でありました。・・・わたしが二九になった年の三月は、丁度女優志願の鳳仙花の実が、はじき出た時でありました。従来の日本の女優さん達はみんな若くて美しい。いろんな遊芸の心得もある。それにまた平素都会情調というような進歩した空気にひたって、一種のカルカチュアを味わっている。けれども私はちっとも屈託しませんでした。だが、ひとつのプライドとして固く握りしめているものがありました。それは三十年に近い実生活の体験を舞台に移して、観衆と一緒に同じ雰囲気の中に呼吸し、同じ人生観、世界観を理解し合う境地を演出してみようという考えでした。わたしの経験は日々毛穴から吸い取ったものの結晶である、稽古場でばかり概念的につぎこまれた浅薄な知識ではないという自負心を持っているのでした。・・・

とにかくわたしは沢山の夢をのせて、新しい世界を展望しながら東京に出て来ました。女優として師事する人をあれかこれかと考えました。その頃新劇歌劇の方面で盛んにやっていたものは、須磨子の芸術座、草人氏の近代劇協会、それにロシー一座などでした。その三つの内どれかにしようと思いました。・・・

一刻も早く志を得たいと思って焦っているわたしは、ある日だれの紹介もなく、突然上山草人氏を訪ねていったのでありました。芝口の平民食堂と対峙して、入口の硝子戸には〈浦路まゆずみ〉の一杯墨で無雑作にかきつけてある（化粧品店。）〈かがしや〉なる近代劇協会は、わたしの予想を裏切ってあまりにも貧弱なものでありました。・・・見るからに精力を偲ばせる光りのある大きな眼玉、ハッキリした曲線に顎髯のある三四、五の洋服姿が現れて、莞爾として迎えてくれました。それが上山先生であったのでした。

わたしは丁寧に来意を告げた後、何等の素養もなく田舎から出て来たばかりのものですが、是非先生のお

教えを受けたいと述べました。K先生はわたしがどういう動機からこの方面に志を立てたのかということを聴かれました。・・・K先生はわたしの話を熱心に聴いて、いろいろと御自分が今まで女優を養成して来た回顧を語られました。そうして俳優というものは外から見てるように楽の職業でないこと、虚栄心があるようでは根本的に不適当であること、貧乏に堪え努力してゆかねばならぬこと、舞台人は自分自身の体だと思ってはならぬこと、団体生活には忍従心が必要であること、そうしてまた平素の修養を怠るものは、その人の個性がそのまま舞台に現れて醜いものだから、そのに注意せねばならぬことなど、いずれも未知の世界に乗り出そうとする私の将来に尊い玉条ともまる話を親切にして下さいました。

その瞬間わたしの頭の中にはまた、約十年間の自分の変転がいなづまもような速さで一巡しました。。今までのわたしにとっては全く畑違いのこのような職業世界とは、一生交際なしにあの山陰道の小さな田舎町に、もの堅い商家の主婦として死んでしまうのだとまで悲観し切っていたわたしが、遂になんの苦もなくここまで踏み出して来て、希望の峰に登りつめたような気持は、ほとんど夢のように感ぜられました。・・・

K先生は奥さんの浦路さんや妹の珊瑚さんを遇するといなじように、心から良き女優の養成に心を尽し、なにごとにもかけ隔てのない態度を示してくださいました。さていよいよこの道に入ってみると、凡て今までの生活とは違っているので、わたしは国訛を一つ直すだけでもなかなか容易の苦労ではありませんでした。シェークスピア、イプセンその他翻訳劇の数々、それを銘々が台本から書き抜いて、幾千人の人の耳にも透るような大きな声で、本意気の稽古を毎日続けるのでした。空き切ったお腹をかかえて、協会の向いにあった平民食堂へ研究生の人達とぞろぞろくり込んでいくのでした。そうして一食十銭の丼飯に誰もが不平を感

ずる様子もなく、ぽくつきました。①

新派の中軸、初代水谷八重子（松野八重子）も、新劇勃興の流れに浴して成長した。彼女の初舞台は八歳のとき、島村抱月と松井須磨子による芸術座結成の時点にまで遡る。時計商の次女として生まれ八重子は、父の逝去により五歳にして母とともに姉夫妻のもとに身を寄せた。義兄の水谷竹紫は雑誌の編集に従事する一方、やがて芸術座の活動に参加し、八歳の八重子をもここへ導く。

新劇における舞台経歴（水谷八重子著『女優一代』）

文芸協会を脱退した島村先生はその年（大正二年）の五月、先生を慕う作家や同調者の支持をうけて劇団を創立されました。それが芸術座です。義兄の水谷竹紫もこれに参加いたしました。この芸術座の創立で早稲田系の作家や評論家は、坪内派・島村派に二分された形になりました。義兄は経営部長として参加したのです。陣容の整った芸術座はその年の九月、丸の内の有楽座で旗上げ公演を行いました。だしものはメーテルリンクの『内部』と『モンナ・ヴァンナ』の二本で、この『内部』が意外にも私の舞台出演のキッカケとなり、そして今日に続いているわけです。

『内部』は舞台の正面に窓を飾りつけ、外の群衆の動きや表情で、部屋の中の出来事を見せるという洒落

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』五四―六一頁。

た芝居でしたが、私はその群衆の子役をやらされたのです。・・・二、三度お稽古に連れて行かれるうちに、どうしても私にセリフをいわせて、舞台の効果を出そうとしたらしく、初日の舞台があく前になって、「みえないから、どいてよ！」というセリフを大声でいうよう申し渡されました。恥ずかしかったせいもありましょうが、子供心にもそれでは約束が違うといって、とうとう千秋楽の日までセリフをいいませんでした。今になって考えてみますと、当時から相当の強情っぱりだったようです。私の初舞台は大正五年十二月帝劇で『アンナ・カレーニナ』のセルジをやったことになっていますが、実際はこの『内部』でした。

この芝居で松井須磨子さんや沢田正二郎さんに初めてお目にかかりましたが、お二人とも毎日奪い合うようにして幼い私の顔のこしらえをして下さったものです。また、群衆の一人として秋田雨雀先生がご出演になったのを記憶しております。秋田先生はこの芝居の翻訳者で、文芸部に籍をおいておられましたが、人手が足りないため出演されたのだそうです。小柄で、みるからに優しそうな方でした。・・・

（大正五年）の七月には稽古場である牛込の芸術倶楽部で（芸術座は）トルストイの『闇の力』の試演会を開きました。芸術倶楽部というのは牛込の横寺町にありまして、芸術座所有の稽古場だったのです。この試演会に私もアニュートカで出演することがきまりました。ちょうど学校も休みだったので、義兄から出演話をもちかけられても、ダダをこねるようなこともなく、素直に出演を承知しました。

演出はもちろん島村先生で、一か月近く激しい稽古が続けられました。『復活』や『サロメ』で「新劇の堕落」などと叩かれたあとだけに、全員の意気込みも悲壮ながただよっておりました。その甲斐があって、小山内先生からも「演出、演技とも芸術座の生涯で最良」との讃辞を頂き、、私のアニュートカも「子役のもつ嫌味がなく、非常に的確な演技」とお褒めにあずかりました。この好評による喜びが自然に私の方向を

切り拓いてくれ、引き続き十二月の帝劇公演『アンナ・カレーニナ』につながって行ったのです。・・・

その年の十二月『アンナ・カレーニナ』にセルジーの役で私の出演がきまりますと、島村先生が「いっそのこと、この際八重ちゃんの初舞台として披露しては」と薦めて下さいました。この時までは本気で私を女優にする気のなかった義兄も姉も、先生の言葉に応じました。

このことをお聞きになった脚色家の松居松葉先生は「八重ちゃんが初舞台の披露をするなら一幕書き足してやろうね」と、母のアンナに別れたセルジーが淋しく老婢と遊んでいりところへ、アンナがそっと訪ねて来て、肉親の愛情に泣く場面を加筆して下さいました。この松居先生が加筆して下さった須磨子さんのアンナと私のセルジーの再会の場が評判になって、まずは上々の首尾でした。・・・

大正九年二月私はもう双葉高等女学校の二年生になっておりました。その時有楽座でメーテルリンクの『青い鳥』が上演され、私がチルチルの大役に抜擢されて出演いたしました。この上演お話がもち上りましたのは、畑中蓼波先生が主宰しておられた新劇協会のプランによるものです。ただしこの公演は〔民衆座〕ち名付けられていました。

畑中先生は大正七年、十三年にわたる滞米生活から帰国され、あちらで学んだ演劇・映画の新知識をもって芸術座に参加したのですが、まもなく芸術座が解散したので、その残党の一部の俳優さんや伊沢蘭奢さん、上山珊瑚さんたちと新劇協会を結成された方です。そして前年の『伯父ワーニャ』に続き、第二回公演に選んだのが、この『青い鳥』なのです。

私がチルチルに抜擢されたのは、畑中先生と義兄が芸術座を通じて親交があったことによりますが、ミチルをおやりになった夏川静江も、お父さんの佐々木積さんにつながるご縁からだと聞いております。スタッ

フは演出・畑中蓼波、装置・岡本帰一、作詞・三木露風、振り付け・石井漠、そして作曲は最近お亡くなりになった山田耕筰と、いずれも錚々たる諸先生方でした。出演社はチルチルの私、ミチルの夏川静江さんのほかに塩見洋さん、伊沢蘭奢さん、上山珊瑚さん、まだ早稲田の学生だった友田恭助さんといった顔ぶれ。

その中に大佛次郎先生も奥様とご一緒に出ていらっしゃったように思います。奥様の芸名は東光子さんで、かがやくようにお美しい方でした。美しいものに憧れる私とシイちゃん（夏川）は、「今日はヒカリ（光子）さんに頭を撫でてもらったわ」などと無邪気に喜んだものでした。・・・

五か月にわたる厳しい稽古が実を結んだのでしょう。『青い鳥』は非常な好評でした。小山内先生が「近来これほどいい気持でみた芝居はない」と激賞して下さったのをはじめ、各新聞や雑誌でも一様に讃辞を頂戴しました。ちょうど芸術座解散から築地小劇場の演劇運動がはじまるまでの発酵期間にもあたっていたわけで、それだけに、波紋も大きかったのではないかと思います。

チルチルがどうして成功したか、自分ではわかりませんが、この役を通じて演技するよろこびを知り、勇気がわいて来たのは事実です。そして、この『青い鳥』が機縁となり、友田さんやシイちゃんとつくったわかもの座が私を招いていたのです。①

貧しい母子家庭で育った山本安英（山本千代）は、内職に追われる母を幼いときから気遣い、やがて東京の伯

① 水谷八重子著『女優一代』日本図書センター、一九九七年。一三―一四、一七―一八、二一―二三頁。

父母に預けられて女学校に通った。医家である伯父は謹厳であったが、伯母の好意で踊りや長唄を稽古し、月刊『演芸画報』の耽読を楽しみにする。新聞広告で知った市川左団次の俳優養成所に応募し、小山内薫の面接を受けた。大地震の二年前、大正十二年暮に彼女は、小山内の戯曲『第一の世界』に抜擢され、帝国劇場において初舞台を踏む。この師走興行には土方与志が演出に加わり、市川左団次や市川猿之助らの共演で好評を博した。①

帝劇初舞台まで（山本安英『新版　歩いてきた道』）

とりとめのない思い出は、もう私が小学校に通い始める頃、例の祖父はすでにいず、母と三人の弟と、やはり横浜の一隅に貧しい暮しの日々を送っている頃からはっきりとして来ます。共に寝起きする父というものが私にはありませんでした。父は時々気弱そうな美しい面だちに眼鏡をかけ、長髪に琴の糸で織った被布で私の家へ現れ、おみやげの牛肉を自分で料理して私たちに食べさせては、すぐまたどこかへ行ってしまうだけの人でした。谷文晁の流れを汲む絵師で、それから茶の湯や生花を教えていたというこの父が、母に対して使う「あなた」とか「そうです」とか、時には軽い調子ながら「ございます」というような言葉づかいを、子供心にも言葉がきれいというよりも何か遠慮勝ちなものに私が感じるのでした。

どうして別居しなければならなかったか、その複雑な入りわけを、いまだ私は母に聞くこともできずにいるのですが、父の方には私たちの生活を助けるだけのゆとりが全く無かったらしく、私の覚えている限り、

① 大山功著『近代日本戯曲史』近代戯曲史刊行会、一九六九年。第二巻（大正編）五五二―五五五頁。

母はいつも朝から晩まで四人の幼い子供のために、心臓の悪いからだを働きづめに働いていました。・・・ただ一つにすがりついていた「職業」というのは、父の紹介だったのでしょう、「はま」のえはがき屋で売っている外人向けの写真やガラス絵に彩色をする下請けの仕事でした。・・・それを私が幼いなりになんとか手伝いをしようと思って手を出すと、母はいつも厳しく私を叱りました。貧しくとも子供だけは卑屈にさせたくないというその母の気もちを察することができたのは、もちろんずっと後のことでしたが、その頃は叱られるのがわけもなく淋しくて、やっと願って私と一番上の弟とに許されたただ一つの仕事は、えのぐを洗って色のついたどんぶりの水を、日に何度か取りかえる仕事でした。・・・

小学校もだんだん上級になって来ると、母も少しずつ私に仕事をさせてくれるようになっていました。引っこみ思案のくせに負けん気だった私は、出来上った品ものをお店に届ける役を引きうけて、ふろしきを抱えては油の音のじゅうじゅうしている南京街を抜けてお店へ通いました。夕方などお腹をすかして、せまい南京街の裏通りのあちこちから流れて来る油の匂い、肉の匂いの中を、子供んがらもわびしい気持で歩いたものでした。・・・

芝居も幼い頃祖父や「ばあ」につれて行ってもらった以外は殆んど記憶がなく、ただうちの患者待合室におくため毎月とっていた『演芸画報』は、私の待ちきれない楽しみで、ずいぶんくりかえしよみふけったものでした。新しい劇というものは、まだ社会的にははっきりした地歩を持っていなかった時代ですし、思想的にも社会的にもものを見る見方が多くの人々の口に上るようになったのはそのしばらく後のことで、ですからこの頃私があこがれていた芝居の世界というものは、ただ漠然と「芝居の世界」として私の頭の中に画かれていたものにすぎませんでした。それともう一つは、前に書いたようにやはり私も何か職業をもって働

きたいという気もちを持っていました。そのときの私自身の境遇は、そういうことを必ずしも必要としていなかったわけですが、横浜でいまでも二人の小さい弟を抱えて細々暮らしている実母の事を考えると、たまらない気もちだったのです。私は毎朝あけ方にそっと家を抜け出して、赤坂の円通寺までお百度をふみに通いました。今考えると少々恥かしい気もちもしますが、ただただ何とかして自分の念願を通したいという一途なもので、別に何かを信仰するという気持ではむろんなかったのですが、それは自分でもかわいらしいと思う程ひた向きな気もちで、その折円通寺の尼さんから頂いたガラスの数珠を今でも大切に持っています。

何かの話にあるように、二一日目の満願の日、玄関を出ようとしたとたん、投げ込まれた新聞に私は、市川左団次さんが松竹をバックにして、現代劇女優養成所の生徒を募集する、という記事を発見しました。私は養母に無理をたのんで、父に内密でこの試験を受けたのです。

新富座の芝居茶屋〈猿屋〉の二階は、応募者で一ぱいになっていました。母親について行ってもらったのは私だけだったので、少々気まりの悪い思いもしましたが、この時の試験場で初めて小山内薫先生にお会いしたのです。そしていまだによく理由の判らないのですが、その中から選ばれた五名の一人に私は入る事ができました。・・・当時二四歳だった土方与志先生も、この養成所に関係されていて、実技を教えて下さいました。

初舞台は一九二一年十二月、帝劇で小山内先生作の『第一の世界』で、演出はーその頃は演出とよばずに舞台監督と言っていましたがー小山内、土方与志の共同になるものでした。当時まだ猿之助、長十郎さん方も一所だった左団次一座に、師走興行なので中車、小団次、松助、宗之助、寿三郎さん達も加わった大一座で、出しものは『増補信長記』『第一の世界』『奥州安達原』『鳥辺山心中』『拾遺太閤記』の順で五本立て

でした。私は左団次さんの娘役で台詞も沢山あり、先生方の御苦労は大へんだったろうと、今になってよく判る気がします。下廻りの役者さんから「あたしなど永年芝居をやっているけど、まだろくに舞台で旦那（左団次さんのこと）と口をきいた事がない、そんな役をふられたら、あしたしんでもいい」などとうらやましがられたものでしたが、左団次、松蔦さんを始め松助さんなど一座の方々は、本当によく面倒をみて下さいました。階級制度のきびしい歌舞伎の世界には珍しいことで、ここにもやはり一座の方々が、新しい芝居を開拓してゆこうとされた熱意がうかがわれる気がします。

この養成所はこの公演をやっただけで、どういう事情からか翌年の春までで終ってしまいました。それで私はまた家庭へかえることになり、稽古ごとをつづけながら、時々小山内先生のお宅などにもうかがいつつ、またその間にはライオン児童歯科医院に勤めたりもしましたが、そこに起ったのがあの関東大震災だったのです。①

関東大震災を契機に人生の劇的転換に向うのは、のちの国民的女優東山千栄子（渡辺せん）である。彼女の祖先は下総佐倉藩の家老であって、父渡辺暢は高等法院院長を務め、貴族院議員に勅選された。兄弟姉妹の多い東山は、小学三年のとき後継ぎのない叔父寺尾亨のもとへ養女として引き取られる。そこでは社交界に出るべく早くから育てられ、華族女学校に入学するとともに、雙葉学園でフランス語をも学んだ。法学博士の養父寺尾は謹

① 山本安英著『新版　歩いてきた道』未来社、一九八七年。八ー一〇、一五ー一八頁。

厳であって、花嫁となるべき娘に小説を読むことも、芝居を観ることも禁じたとされる。男女交際についても厳しく、花婿の候補者を養父母が選び、彼女は十八歳のとき、原合名会社モスクワ支店長の河野通久郎と結婚した。一時帰国した通久郎と京都での新婚旅行を済ませた後、明治四二年ウラジオストックを経て、シベリア鉄道で着任地へ到着する。折しもモスクワは帝政ロシアの末期、ロシア革命の前夜にあった。彼女の自伝には夫河野の演劇に対する深い理解やロシア革命による日本への退去も述べられる。①

モスクワでの生活と観劇（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

モスクワには主人がアパートを用意してくれました。五部屋ぐらいあり、六十歳になるフランスとポーランドの混血の家政婦のおばあさんと、若いロシア人の女中がおりました。おばあさんは主人から私を紹介されると、両手で私を抱き、両ほおとくちびるに、三つキスしました。はじめての経験なので、私はビックリしてしまいました。

こうしてモスクワでの私の生活ははじまり、八年間をここで暮らすことになったのでございます。そのころのモスクワはやっと数ヵ月まえに日本総領事館が設けられたばかりで、日本人はその方たちを含めても、八人ぐらいしかおりませんでした。女性はそれから三年あとまで私ひとりでした。・・・

主人は文学や音楽を愛好しておりましたので、私に小説を読んで人生を知ることを教え、またバレエやオ

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』産業能率短期大学出版部、一九七七年。四ー五、九ー一〇、一七ー二〇頁。

ペラやオペレッタに私を連れて行ってくれました。そのころにロシアは、帝政時代の爛熟期で、ましてモスクワは芸術の中心地でしたから、私は芸術に対する目をしだいに開かれて行きました。　ボリショイ劇場ではじめて『白鳥の湖』を見たときの驚きと喜びは、いまでもわすれることができません。舞台の広さ、百人以上の踊り子たち、舞台装置のすばらしさ、音楽のうつくしさ－明治の末期のころ、しかもお芝居やバレエなどをまったく知らない私だったのですから、私の驚きを想像していただけるでしょう。・・・

モスクワではじめて見たお芝居は『桜の園』でした。その夜は主人が旅行者のご婦人をご案内し、私もはじめて芸術座にまいりました。私はこの高名なお芝居に対して何の予備知識も持っておりませんでしたし、同行の方からそのころ日本で出版されていた瀬沼夏葉女史の翻訳本をみせられたのも、劇場へ行ってからのことで、それも幕間にただチラチラとページをめくったくらいだったのです。

しかしそういう私が、その『桜の園』にすっかり魅了されてしまったのです。脚本が傑出しているうえに、モスクワ芸術座の創立者のひとりであるコンスタンチン・スタニスラフスキーの演出でありますし、その演出者自身が兄ガーエフの役で出演、作者チェーホフの未亡人オリガ・クニッペルが女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮していたのですから、私ならずともそのすばらしい舞台から深い感銘を受けずにいられなかったことでしょう。

このとき私は、将来自分が俳優になるだろうとか、『桜の園』をやるだろうとかは夢想さえしていなかったのですが、それがこんなにひきつけられたというのは、あとになって考えてみると、後年私が俳優になる動機がこのときあったような気もしますし、しかもその私が、やがてラネーフスカヤ夫人の役を三百回前後も演ずるようになったことの、いわば因縁のようにさえ思われます。・・・

のちの築地小劇場の創立者のお一人、小山内薫先生にはじめてお目にかかったのは大正元年でした。先生はモスクワ芸術座見学のためにおいでになり、それからドイツ、イギリス、フランスとお回りになって、シーズン・オフに再びモスクワに戻られ、しばらく滞在なさいましたが、このときは私の家でお宿をいたしました。先生と私の主人とは、以前に日本でお知り合いになっていたのでした。

モスクワ芸術座では先生はちょうど画家が名画を模写するような敬虔な態度で、スタニスラフスキーの演出を克明にノートなさいました。先生はモスクワ芸術座で、まえにご自身が先代市川左団次さんたちと自由劇場で上演なさったことのあるゴーリキの『夜の宿』をはじめとして、チェーホフの『桜の園』『三人姉妹』『伯父ワーニャ』などをごらんになりましたが、それらについてのノートが、のちに築地小劇場で生かされたのです。

しかし、ここに書いたすべての演目に、やがて私が出演することになろうなどとは、よもや先生はお考えにならなかったでしょう－当時の私はまったく支店長夫人であり、人妻以外のなにものでもなかったのですから。また小山内先生はスタニスラフスキーの家庭に招かれ、一座に俳優さんたちと親しく遊んだりなさったことを、楽しそうに話していらっしゃいました。　①

ロシア革命とモスクワからの退去（東山千栄子著『新劇女優』）

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二二－二三、二六－二八頁。

ひとつ主人に最も感謝しなければならないことがあります。それは窮屈な生立ちをしたために全く閉じあれてしまっていた私の眼を、文学、音楽、演劇など、あらゆる芸術の世界へ開けてくれたことで、私の退屈であった人生は、どうやらそこから息づきはじめました。・・・河野はその文学好きのまま法科を卒業して海外貿易に入りましたが、これは当時の世界の経済事情に感ずると共に、困難であった生立ちの経験からも、経済力の確立が第一、何ごともその上でと考えたものでございましょう。原輸出商会に入って直きにリヨン支店詰めとなり、ずっと日本を離れて暮しました。それで日本の文学の動きが次第にわかりにくくなったのでしょうか、その代り小説類の原書の入手は思うままでしたし、音楽にしても演劇にしても、日本では思いも及ばぬ本舞台のものに接し、初めは手探りから次第に自分一個の鑑賞力を得て、殊にモスコーにいってからは、丁度爛熟期の露西亜芸術に心ゆくまで親しみました。・・・

やがてこの重苦しいまでの芸術的雰囲気にあったモスコーが、あの歴史上永遠に記録すべき革命の一撃によって破壊される時が来ました。私共はその革命前に何も知らず、暫くの休暇をいただいて日本へ旅立ちました。そうして東京に帰っていて現場に居合わさなかったのは幸か不幸かわかりませんが、私共の住居は丁度クレムリン宮殿と士官学校の間の処にございました。東京にいて号外で革命を知り、次の報道を待っても、今のようにラジオなどで迅速にわかる時代ではありません。重大な時に店を留守にしていたことですから、主人の心痛も一通りでなかった次第です。幸いに店の人達も無事に脱出して帰り、その話で、瞬間に打込まれた銃火に焼けた店や住居の様子もわかりましたが、その人達は言いました。「支店長夫妻がいなかったのは、幸いだった。もしあの場所にいたならば生命の危険はもとより、何かを取出そうとして火の中に飛込んだかも知れない。」そういわれて私共も黙する外ありませんでした。

勿論家庭のことで見ても、主人が独身の時代の七年に、私が行ってからの八年を加えて、十五年の間に自然と出来ていた物一切、モスコーにあるのが私共の全部でしたから、故国の空に旅着の着のみ着のまま、これで振出しの無一物に戻ったという有様でした。間もなく領事館の引き上げとなり、主人が十五年苦心のあとも全く水泡に帰しました。主人の落胆するのも道理、実に主人のモスコーにおける信用は、もう充分にその後の仕事の堅実な成功を保証してあまりあるものであったのです。そして主人の文学的気質が何処よりもよく合う露西亜であったのでした。 ①

十五歳で築地小劇場の舞台、『青い鳥』の主役に起用される及川道子は、敬虔で清貧な両親に育てられた。勝気で幼時から歌や芝居を好んだが、病弱な体質で小学校への入学も一年遅れる。青山でささやかな喫茶店、パーラー・オアシスを営む一家は、大地震の一ヵ月前道子の療養を兼ねて、避暑地への出店を引き受け、館山湾沿岸へしばらく移転していた。後年映画女優としても注目されつつ、二七歳で夭折した彼女の自叙伝を繙いてみる。

房総海岸　大正十二年夏（及川道子著『いばらの道』）

楽しい時、苦しい時、また喜びの時、悲しみの時、先ず父の口をついて出るものは讃美歌の一節でした。思えば父のこの讃美歌によって、励まされ、慰められたことの何と多かったことか！過去二十幾年の私の

① 東山千栄子著『新劇女優』学風書院、一九五八年。四七ー四八、五〇ー五一頁。

いばらの道で、唯一つの光明はこの父の讃美歌の他ありませんでした。・・・

父が讃美歌を連想させるように、母と云えば、私は童謡を思い出します。その最初の記憶は何でも私の四つか五つの頃だったと思います。その頃私はリンパ腺を腫らして、病院へレントゲンをかけに通っていました。それも遠い冬の寒い道を、弟をおんぶした母に手をひかれて、電車にも乗らず、とぼとぼ歩いたものでした。・・・そんなとき母いつも寝台の側で『ハトポッポ』や『トンボトンボシヲカラトンボ』等の童謡をうたって聞かせて、私の機嫌をとってくれました。それから学校に上りようになってからも、学校で教わるどの唱歌も、母はよく知っていて、家でいろいろ教えられました。・・・

十二、三になってから、お友達と遊ぶにもーその頃は唱歌会やお芝居ごっこが好きで、よく遊んだものですがーいつも自分が先生（所謂舞台監督）になって、自分よりも大きなお友達を犬にしたり、猿にしたり、お百姓さんにしたりして、自分の思う通りにして遊びました。・・・

体の弱い私は普通の人と同じに入学が出来ずに、九歳の時に始めて学校へ行きましたが、学校へ通うようになってからも、始終病気勝ちで、五年生になった頃には、肋膜が悪いと医師から注意を受けました。

医師から肋膜の注意を受けたその年の夏に、私たち一家は房州の北條へ行くことになったのです。それは避暑などいう贅沢なものではありません。ちょうどオアシス・パーラーと取引関係のあるカルピス会社で、北條の海岸へテント張りの売店を出すことになったので、それを引き受けて、言わば出稼ぎに行ったようなわけです。けれども私の両親が、進んでこの売店を引き受けたのは、たとえ暫くの間でも海岸で暮したならば、私の病気のためにどれだけの効果があるかもしれないーという尊い親心からであったでしょう。

オアシス・パラーを休業にして、北條へ行った私たちは、諏訪森の下にある新築したばかりの家を借りて、

そこを住居にいたしました。諏訪森の下から海岸までは、いくらも道程がありません。私たちは毎日海岸にあるテント張りの売店に出向いて働きました。私を真実の妹のように可愛がっていつも励まし導いてくださった佐々木さんが、一緒に北条へ来ておられたので、その佐々木さんと父が支配人兼コックさん、母が後見人で、私と強子とがお給仕さんです。

高等師範や早稲田大学の水泳部の方や、避暑に来ておられる人々などで、海岸はいつもお祭のようににぎやかでした。私たちの店も大繁昌の日が続きました。殊に夕方になると、きまったように高等師範の方々が大勢集まって来られて、丁度天幕の中は何かの倶楽部のようでした。私と強子とはよく『坊やのお裏の柿の木に』や『踊れ踊れ、風吹くままに』等、その頃流行った童謡をうたいながら踊って見せたものでした。するとこんどは、学生さん達が私達の知らない歌をうたって、教えて下さったり、面白い童話を聞かせて下さったりしました。そして、お店をしまった後は、帰途によく海岸を散歩しました。空には星が降るようにキラキラと美しく輝き、海ではそれと美を競うかのように夜光虫が綺麗に光っていました。・・・

こうした楽しい日々を送っているうちに、私もいくらか健康を回復して、顔色なども目立って丈夫そうになってまいりました。けれども、楽しい時が経っていくのはとりわけ早いもので、まもなく八月も終ろうとする頃には、水泳部の方や避暑客などもだんだん引き上げていく方が多くなって、一組減り二組経るというようにして、今まで賑かであっただけに、急に寂しさが海岸を襲って参りました。

夜中にふと目をさまして、静かな波の音に混って聞えて来る、近くの畑のトウキビの葉擦れを耳にした時など、もう秋が身近に迫っているのが、しみじみ感じられ、そして間もなく東京へ戻らねばならないことを、

今更のように考えさせられるのでした。 ①

自立と自由をめざして俳優への道へ進む女性が続出するとともに、新劇の振興を支援するパトロンも現れる。明治女学校で星野天知や島崎藤村の教えを受けた相馬黒光（星良）は、夫愛蔵とともに本郷の東大正門前でささやかなパン屋を開業し、やがて顧客の漸増で新宿に支店を設けた。新宿では隣家をアトリエに改造して、同郷の荻原碌山など画家の便宜に供し、インド独立の志士チャンドラ・ボースや盲目のロシア詩人ヴァスィリ・エロシェンコを庇護する。こうして相馬夫人黒光の主宰による〈中村屋サロン〉が形成され、新劇脚本に依拠する朗読会から〈土蔵劇場〉での公演へと進展した。

相馬黒光「土蔵劇場」『黙移』（『相馬愛蔵・黒光著作集』）

エロシェンコが私の家におります頃、私は盲目の彼のためによくいろいろの文学的作品を読んできかせました。エロシェンコはそれを非常によろこびましたが、、私はかねて脚本朗読に興味をもち、脚本は黙読するものではなく、朗読すべきもの、各登場人物の台詞をそれぞれ読みわけてこそ面白くもあり意味もあると考えておりました。そしてエロシェンコに読んできかせ、彼がそれをよろこんだのが動機となりまして、秋田雨雀氏を中心として、神近市子さん、上村露子さん、佐藤誠也、佐々木孝丸、早稲田出身の能島、法政の

佐賀その他の諸氏が集まり、中村屋の表二階（いま喫茶部になっているところ）を開放して脚本朗読会をはじめました。花柳はるみのようなこの道の本職も、ときどきは交って指導してくれるというふうで、脚本は中村吉蔵氏、仲本貞一氏、川村花菱氏、秋田雨雀氏の作品がおもなもので、翻訳劇ではストリンドベルグの『ペリカン』、ダヌンチオの『ジョコンダ』、ユーゴーの『鐘楼守』、ギリシャ悲劇のアンチゴーネ、ロシアものでチエホフの作などが、今でもはっきり記憶に残っております。・・

そのうちに一同もはや朗読では満足できなくなり、ぜひ試演をしてみたいと熱心な要求が出て、とうとう私共の新築したばかりの大広間を提供し、めいめいが俳優となって秋田さんの脚本をやってみました。何という題であったか忘れましたが、何でも薄暗い獄舎の中に囚人が幾人も座っているところでした。衣装や小道具はみな有り合わせのもので、巡査の制服制帽だけは本物をこっそり借りてきました。サーベルのカチャカチャするのにも実感があらわれ、初演にしては成功でした。・・・

この試演で会員はいやが上にも自信を高め、とうとう主人を説き落して，私どもが当時手に入れたばかりの麹町平河町の住居、といってもまだ移転していませんでしたので、それを利用し、三間に五間の二階建ての純日本風式の土蔵を舞台に改造してもらいました。同時にこれまでの朗読会をあらため、先駆座の名乗りをあげ、さらに川添利基氏や玄人の河原侃二氏などが加入して指導に当り、また上演することになりました。

その最初に上演されたのは秋田氏作『手投弾』と、ストリンドベルグ作の『火あそび』。ここで困りましたのは、男子の方々の意気盛んなのに反し、女子の方はほとんど影を没してしまって、女優になり手がないことでした。そこで私は千香子を説得して出場させ、なお千香子の級友のうちでまだ家庭に残っていたお嬢さん二人を勧誘し、そのお母様方の諒解を願って拝借することにいたしました。それに誰かの紹介で義太夫

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。一六、一九―二〇、三四、四三―五〇頁。

語りとして高座にも出た経験のある婦人の加わり、辛うじて入用だけの女優が揃いました。そして出て頂いたお嬢さん方は、当時早稲田大学生であった長男安雄がお家まで送りとどけ、あるいは予めおことわるしておいて宅にお泊めしたり、とにかく私が心を配りまして、二ヶ月くらいも稽古をいたしました。いよいよ四月二一、二二日に二日間開演することを発表し、会員のはげしい稽古は涙ぐましいばかりでした。

こういうふうに土蔵を改造した舞台であるとともに、また土蔵に立て籠っての研究で、誰いうともなく土蔵劇場の名が生まれたのでございます。土蔵の二階を舞台に改造するには、私どもの経済としてかなりの犠牲を払いました。芝居が終われば舞台は取りはずして押入にし、照明に用いた幾十の電球とスイッチは常にこの押入の中に入っていました。階段ふたつ、カーテンの仕掛け、見物席の設け、また母屋の各室は臨時女優の楽屋に、あるいは見物人の休憩所にあてるという史第でずいぶん熱中してやったものでございます。芝居が済み、掃除をして四月末日に私ども家族ははじめてここに住居を移し、新宿の家はその家全体を店として使用することになったのでございます。

多くの思い出を籠めたこの土蔵劇場も、あの大正十二年九月一日の大震災で、使用に堪えないほど破壊されてしまいました。そればかりか一時は座員も互いに安否を知る由なく、十二年も過ぎて翌年の春ようやくそちこちから出て来て顔が合い、玄関脇の狭い応接室で再び朗読会をはじめました。けれども土蔵は容易に修繕が出来ず、芝居はやれなくなりました。①

① 相馬黒光『黙移』(『相馬愛蔵・黒光著作集』郷土出版、一九八一年。第三巻、二五一―二五五頁。

土蔵劇場における先駆座の公演は大正十二年四月二一日および二二日に催され、それに先立って二十日には試演が行われた。客席がわずか五十であるため、観客は会員制と限定されるが、優先順十名の錚々たる名簿が次のように記録される。一番島崎藤村、二番有島武郎、三番長谷川如是閑、四番水谷竹紫、五番水谷八重子、六番藤森成吉、七番吉江喬松、八番大山郁夫、九番馬場孤蝶、十番石川三四郎。演出は川添利基、装置は柳瀬正夢が担当し、秋田雨雀の求めに応じて、島崎藤村と有島武郎が感想を述べたとされる。①

幸徳秋水ら社会主義者の演説に感銘をうけ、島村抱月からは創作の才能を認められた秋田雨雀は、吉井勇や谷崎潤一郎とともに新劇勃興を支援する作家群に加わった。封建主義を批判した彼の戯曲『第一の暁』は、明治四四年六月自由劇場の一環として有楽座にて上演される。雨雀が代表作『国境の夜』を発表したのは、わが国最初のメーデーが挙行され、神戸の川崎造船所で初めて労働者劇団が結成された大正九年である。やがて彼は〈中村屋サロン〉における朗読会に参与し、劇団先駆座を組織して土蔵劇場での上演を指導した。震災直前における彼の日記には土蔵劇場の模様とともに、有島武郎の情死や大杉栄との会合も記述される。

秋田雨雀「土蔵劇場での公演と有島武郎の死」(『秋田雨雀日記』第一巻)

① 曽田秀彦著『民衆劇場―もう一つの大正デモクラシー』象山社、一九九五年。二七六―二八五頁。

臼井吉見『安曇野』筑摩書房、一九七二年。第三部、四二二―四二三、四二九―四三三頁。

（大正十二年）四月二十日　土曜劇場のことで警視庁と麹町警察へ行く。麹町警察のわからないのには弱った。・・・招待日は三十名ほど来客があった。『手投弾』は三場ともよくいった。娘になる瀬尾君がよかった。佐藤君は一箇所とちった。二場の舞台照明もよかった。有島武郎君がきてくれた。中村屋の娘さんのわがままには弱る。いつかわかるだろう。（招待日は成功した）

四月二一日　麹町署で試演の許可をえた。先駆座という灯明台をつけたらいけないといった。役人の頭というものは妙に働くものだ。臨検にゆくと云っていた。・・・七時過ぎに開幕。きょう『手投弾』はすてきによくいった。いままでのうちで一番いい。『火あそび』も悪くない。ひげが落ちたので心配した。全体としてきょう一番よかった。黒光女史に手紙を出した。中村吉蔵君がきてくれた。夜柴原君と会食。（先駆座第一日）

四月二二日　七時半開演。『手投弾』の第二場じゃたいへんよくできた。金子君が喜んでくれた。三場の光線もよかった。梅田親子、中市君。矢部、青山、水谷八重ちゃん、運天、山田たづ子の諸君がきた。紅蓮さん、中市君と三人でおでんやで会食。（先駆座第二日。愉快な日）

五月二六日　身体がいくらか元気づいてきた。夜中村屋で先駆座の朗読があった。イプセンの『海の夫人』をやった。中村屋の娘はいくらか折れてきていた。・・・

五月二七日　墓参。鳴海、仁尾、中市の三君とすずらんにより、森飛雪君を訪い、名物屋で有島、前田河、佐藤、橋浦の諸君と会合。あとで有島武郎君を送っていって、一時間ばかりいた。蓄音機をかけてくれた。ブロンズの手。帰路おでんやによった。（有島武郎君との最後の会見）

七月七日　身体はまったくいいようだ。午後七時から中村屋の朗読会へゆく。運天姉妹もきた。『アス

パラガス』っと『犬』に決定した。夜二時『日々新聞』記者の自動車がぼくの家から帰るのといっしょになった。その記者の言葉によって、有島武郎君が信州で、ある女性と情死を遂げたということを知った。女は誰だろう?佐藤、佐々木二君と女のことを想像しあった。桜井夫人ではないか?（有島武郎君死す。）

七月八日　昨夜眠れなかった。朝『読売』の清水君がきた。明日の文芸欄に感想を話した。氏の潔癖性とニヒリステックな傾向について。有島家を訪い、名刺をさしだした。弔問客が多い。女の名と素性について。遺書公開。・・・有島君の対称は例の美人記者波多野あき子だ。

七月九日　有島武郎君告別式。雨のなかを新島英治がきょう葬式があるから、といって迎えにきたので、二人で有島家へゆく。玄関から布がひきつめて、祭壇のところまでいけるようにして、祭壇には故人の写真が飾ってあった。喪服をきた老母と三人の子供が眼についた。守田勘弥といっしょに焼香した。生馬君がぼくの手を握って、悲痛な顔をしていた。二階で足助君に遺書をみせてもらった。鉛筆で、こころもち乱れた書きかたをしている。涙がでる。午後二時自動車で青山へゆき、埋葬した。

七月二八日　暑い。散歩。墓地で日光浴をやった。夜パウリスタで大杉栄君の歓迎会があった。大杉君は若くなったような気がする。野枝君は洋装していたが、お腹が大きいのだそうだ。利部をスパイだといって、ある男がなぐりかかったので、みんなで止めた。カフェ新橋とロシアによった。①

① 『秋田雨雀日記』未来社、一九六九年。第一巻、三一一―三一二、三一七―三一八、三二〇頁。

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起ー小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣ー

第三節　大震災による新劇人の衝撃と覚醒　その一

激震の直撃市川左団次～新劇の震災と復興理念～絶望する小山内薫～帰国の決意土方与志～人生の劇的転換東山千栄子～震災の渦中で山本安英～家屋の下敷き及川道子～震災日記

秋田雨雀

関東大震災は首都の興行施設を壊滅させ、新劇に係わる人々やその留守宅をも直撃した。小山内薫とても自由劇場の公演を遂行し、新劇勃興を先導した市川左団次も、公演を前にして大地震に襲われ、自宅から上野、滝野川、東中野へと避難する。

大地震の衝撃と避難（市川左団次著『左団次芸談』）

（大正）十二年は六月の明治座を了えてから、九月は歌舞伎座に出演することとなった。

その九月一日である。午後一時から岡本綺堂氏作『鬼薊清吉』の本読があるので、まだ家にいると午前十一時五八分、関東一帯を襲ったあの大震災である。ー土蔵の瓦が一、二枚落ちて、塀が少し倒れたきりで、大したこともないので、落ちついていると、そのうち下町に異様な光を発する火の手が見えた。〈猫いらず〉

の本舗だと云う。間も無く猿楽町の方から火が上ってきたと云う騒ぎ。大丈夫だと思っていたものの、女達がいたので、とにかく立退くようにと云い渡して、弟子達に荷物を頼み、妻の姉の上野の家に引上げた。私の家の辺は被害が殆ど無かったので、近所の人はまだ立退く気配も無く、私の家の者が一番早かったようである。

すると二日の晩になって、上野の山に火が廻ってきたというので、山の上は大騒乱を極めた。これは避難の人で山が一杯なので、後からきた人達が仕方なく、日暮里の方に続々と行くのを、山から逃げて行くものと誤っての混乱と後になって知れたが、私達も線路を伝って、滝野川の知人の家に移った。するとまた、朝鮮人云々の噂が近隣を騒したので、その知人の妹の家が東中野にあって、田舎の物持の娘でそこならば米も豊富に得られると云うので、自動車を一台見つけて、東中野の某家に落着いた。ところが先方は夫婦暮し、こちらは同勢七、八人で、なかなか米が足りないらしいのが解ってきて、気の毒になったので、私の車夫に米を探させて買ってこさせなどしているうちに、牛乳配達が中野野方村に家を見つけてきてくれたので、七日にそこへ引移った。まだ建てたばかりの家で、障子も張ってなかったが、結局その方が涼しいと云って、一ヵ月もそこに起き伏しをしていた。

東京で芝居を演ることは、まだ一年位は覚つかないと思っていたので、当分はそこに籠るつもりでいたところへ、大阪から話があったが、それは断ると今度はたしか十月の二日に京都から話しがあったので、十一月には京都で演らうということになった。

ちょうど小山内君は大阪に引移るというので、一緒に行くことにして、東海道線はまだ復旧されていなかったので、上野から十月二一日に発った。汽車の中は大混雑で一睡も出来ず、おまけに親不知のあたりで、

夜二時頃に半時間近くも停車してしまったので、小山内君と車外に出て、名月の荒磯を歩きながら、灰燼と化した東京のことを語りあった。・・・

震災では貴重な書籍や書画骨董を灰にしてしまったが、立退く時には自分のものだけが焼けるので、また直ぐ集るという気がしていた。岡本綺堂氏も震災後一時麻布に住まわれていたが、その話をするとやはり同じような気持であったと語られた。中野に落着いてからは、ことによると蔵だけは残っていて、その中のものは無事かも知れぬという気もしていたが、十日程経って行ってみると、やはり跡形もなかった。 ①

帝国劇場における自由劇場の公演が杜絶したあとも、市川左団次は活躍を続け、大正九年には新富座で岡鬼太郎作『今様薩摩歌』を、また歌舞伎座で中村吉蔵作『井伊大老の死』に出演した。さらに大地震の前年京都南座での公演に先立って、十月一日洛東の知恩院山門前で野外劇、松居松葉作『織田信長』が演じられた。松竹大谷社長の後援により左団次が主役を演じ、祇園花街の少女五十余名が稚児姿で舞い、小山内薫も演出に参加した。無料で提供されたこの野外劇には観衆十万人が押し寄せたとされる。②

大地震の翌年六月に刊行された改造社編『大正大震災誌』には、演劇の分野に関して河竹繁俊の論稿「歌舞伎劇に及ぼせる影響」とともに、戯曲家中村吉蔵の執筆「破壊前後の新劇」が収録される。この寄稿において中村

① 市川左団次著『左団次芸談』一五六～一五九頁。

② 市川左団次著『左団次芸談』一五二～一五六頁。

は劇壇震災の大要を誌したあと、営利主義を排除した新劇復興の理念を提起している。まずは演劇の壊滅を要約する前半をつぎに示す。

中村吉蔵「破壊前後の新劇」（改造社『大正大震災誌』）

大正の大震災は帝都のあらゆる文化機関を片ッ端から破壊し去ったが、その中でも殆んど字義通り破壊し尽されたのは劇場である。劇場が直に演劇の成立に必要欠くべからざる条件であり、機関である以上は、それが破壊し尽されたといふ事は、演劇が一時的に滅亡した事になる。・・・さし当たり、震災前に漸く勃興して来て我が国の在来の歌舞伎劇に挑戦を試みつつあった新劇の過程と、今回の破壊に基づくその当面の影響とを一瞥しよう。

元来新劇とは旧劇、即ち徳川封建期の遺産たる在来の歌舞伎劇に対して、明治大正以後の新時代の精神を基調とし、西欧の近代劇の感化影響をその内容の上にも、又その形式の上にも著しく反応した新作戯曲の演出を意味するものであるのは云うまでもないが、西欧の近代劇の第一期が、主として自然主義乃至写実主義派の心理的解剖を重んずる傾向のものであって、従って小劇場形式の芸術であった如く、我国に起った新劇運動も亦多くはさうした趨勢を追うて、小劇場形式の芸術を打建てるための努力が続けられて行った。ところが在来の歌舞伎劇の大規模な芸術様式に適合すべく作られた所謂大劇場の、あの厖大な建築はこの種の新劇にあまり適合しているとは云へない。唯洋風建築のプロセニアム舞台を持った帝国劇場と、さらに西洋の中小劇場の建築様式をそのまま移植して来た有楽座とだけが、新劇の演出に最も適合していた。殊に有楽座

が独特の壇場だったと云ってもよく、事実に於ても新劇の発祥地となった記録を作っている。

この有楽座の建築せられたのは明治四一年十二月で、在来の興行師の企業欲から離れて、華族富豪の有志者が新しい演芸を起さうとする多少の理想的計画のもとに成立ったものである。この劇場に於て明治四二年十一月小山内薫と左団次の自由劇場が、森鴎外訳のイプセン劇『ボルクマン』を上演して、西洋近代劇を初めて我国の劇界に紹介し、従来の新劇のために第一の峰火を挙げたのは、当時の一センセイションであった。その後数回自由劇場はこの舞台を利用して数種の西洋近代劇を試演すると同時に、新進の劇作家、秋田雨雀、長田秀雄、吉井勇等の創作戯曲をも紹介した。・・・

有楽座に次いで、若しくは相並んで新劇の為に相当の功績を残したのは帝国劇場である。同座は明治四二年の創立でルネッサンスの建築様式に則り、白煉瓦の巨大な楼閣を外濠に近く聳立させて帝都の一大美観であったが、プロセニアム舞台を持っていただけに、他の日本式大劇場の、舞台の間口のムヤミにだだ広いのとは異ってその間口八間、奥行九間、プロセニアムの高さ四間、定員千六百三人であった。この舞台で文芸協会の『人形の家』が始めて公演せられ、松井須磨子が我が国最初の女優たる事を認められたのは明治四四年十一月である。・・・今回の大震災はそうした記念の舞台を焼尽したが、外郭はそのままに残ってゐて、近く再建される筈である。その意味では有楽座の喪失に比べれば、我々の遺憾の度は幸に少ないと云わねばならない。

又歌舞伎座は日本式大劇場の或意味で模範的のものであったが、震災の二年前に失火して全焼した。一、二の例外を除いて新劇には殆んど縁がないが、大劇場形式の新劇発生の一基点と見る時には、大正九年五月坪内逍遙の新史劇『名残の星月夜』を上演し、次いで七月に自分の創作した『井伊大老の死』を上演してい

るのは記憶すべきものであろう。新築中に起った震災の被害は比較的軽かったようであるが、こん度のは舞台間口十六間の設計と聞いては、今後の大劇場形式新劇場が果たしてそれに適合する可能性を持ち得るのか否かは相当の疑問である。猶この他に明治座、本郷座、市村座に浅草の公園劇場、三国座等の中には新劇運動と因縁があるものもあり、またそれぞれに新劇が旧劇若しくは通俗劇と雑居して、そこに多少の分布地図を描いていたが、震災のために悉く灰燼に帰し去った。これは一時的にも旧劇に対する大打撃であるが、同時に新劇に対しても亦相当の損害であるのは勿論である。・・・

我国に於ける新劇の第一期、即ち近代劇運動時代に於ては、ひたすら純芸術的な新劇の為めに途を拓かんとする熱意と期待とに燃えて、そこに全力的な戦いが戦われたのであるが、それが中途で所謂民衆化の傾向へ転回して行った為に、必然に商業主義化されて来て、やがて創作劇が普通の営利劇場へ迎えられて行くに都合の善い段取が付いたと同時に、創作劇そのものの半面には不純分子が鼠入する動機が醸されて、近代劇運動の当初の理想的な出発点とは距離があり過ぎるといふ批難が一部から加えられているが、それも強ち無稽の言として斥ける事はできない。・・・新劇がそうして普通興行に割込んで行った結果、帝劇や有楽座は暫く別として、日本式の大劇場の大舞台の上に、本来小劇場形式の新芸術が一時の間借り状態で、落着かない状態で雑居者の如く取扱われねばならなかったのは、敏感な鑑賞家の眼には一の醜態として映じたかも知れない。それだけならまだ宥されもするが、他の全く芸術のテンペラメントの異ってゐる歌舞伎劇などに混入して演出される点では、折角の新劇をして寄席興行の一余興扱いさせる遺憾がないとは云えなかった。その根源は即劇場の商業主義から来ていると云へば、それはたしかに誤りのない真理である。・・・

上演されつつあった新劇の内容、基調精神の問題に到ってはここで手軽に一掃的の論断は下されないが、

その多くは自然主義乃至写実主義の範囲に止まり、若しくは一種の唯美主義に低徊していたと云っても大過はない。勿論近代劇運動の主潮の一はそこに関っているが、今全世界の実生活の地盤を震撼しつつある最も現実的なブルジョア対プロレタリアの抗争から捲起された思想感情の激しい渦巻、その渦巻のためにやがて崩壊して行こうとする錯覚的現代文化の運命、原始的に更生せんとして苦悶しつつある人間の魂の呻めきーそうした世界大戦以後の煉獄に投ぜられた人間の実生活図は、我国の既出の創作劇にはまだよく現われていない。①

島根県で旅館の息子として生まれた中村吉蔵は、公証人の書生や為替貯金管理所の書記を勤めた。苦学しつつ彼は早くから数々の小説を雑誌に投稿し入選する。やがて上京して広津和郎のもとに寄寓し、早稲田大学に入学。その後欧米での留学と遍歴によって演劇への関心を深め、帰国後島村抱月の主宰する芸術座に参加する。大正三年から大正八年にかけて彼の戯曲、『飯』や『剃刀』が帝国劇場で松井須磨子を主役として公演された。②

大地震勃発のとき小山内薫は、家族とともに関西に滞在し、東京四谷の留守宅も被災を免れた。新劇再生の悲願をなお秘めて、ときを待つ小山内の心境を震災の惨禍は一層沈痛にした。演劇界の伝統と傾向に失望した小山

① 中村吉蔵「破壊前後の新劇」(『大正大震災誌』改造社、一九二四年。)一七六ー一八〇頁

② 大山功著『近代日本戯曲史』第二巻(大正編)四八〇ー四八一、四八五ー四九〇頁。

『新人物立志伝ー苦学力行』大日本雄弁会、一九二二年。五四ー六六頁。

内薫は、その後松竹キネマの研究所所長として招かれ、わが国初の劇映画『路上の霊魂』を軽井沢で撮影する。しかし、大正十二年の春松竹経営陣との紛糾もあって、すべての興行と劇団から離れ、書斎での演劇研究に専念していた。

大地震直後の苦衷(小山内薫「築地小劇場建設まで」)

私が昨年の三月、松竹と手を切った時ーそれは私が日本の営利的劇場の総てに対して望みを絶った時でした。私は再び日本に於ける営利的の劇場には如何なる関係に於いてもはいって行くまいと決意しました。当時の私にとって「前途」はありませんでした。目の前は闇でした。私は唯書いて、僅に生活し、僅に自分を慰めました。

その内に私の思想の上に或黎明が来ました。それは独逸へ行っている土方が帰って来たら、二人で演劇学校を興すことでした。勿論この考えは余程前から私にありました。営利的劇場と全く絶縁するに及んで、もうこれより外に自分の行くべき路はないと思うようになったのです。

物質上の根拠があったのでもありません。組織上の同志があったのでもありません。私は唯ぼんやりー併し強い希望を持ってー土方が帰って来たら、二人でそれを始めようと思っていたのです。そしてそれを楽しんでいました。その考えは誰にも知られずに私自身を慰め且つ励ましていました。

大地震が来ましたーその時、私は家族を挙げて地方にいましたー東京の殆んど総ての劇場は焼け亡びてしまいました。私の心の中で半年前に亡びてしまっていた総ての劇場は目に見ゆる形の上でも亡びてしまった

のです。

併し総ての劇場が亡びると共に私自身の希望も亡びてしまひました。演劇学校の建設などはもう当分思いもつかない事になってしまひました。少くとも十年のギャップが私の目の前に口を開いたのです。私にはもう自分の生きてゐる間に自分の進まうとする道が一歩でも歩けるか、それが疑わしくなって来ました。第二の絶望が来たのですーしかもその絶望は私にとって最後の絶望でした。

私はその儘地方にいました。その儘東京へ帰りませんでした。私の友人は私が東京を見捨てたと言って私を罵りました。だが私はその時東京を見捨てたのではありません。私が若し東京を見捨てたとすれば、もう半年前に見捨てていたのです。私はもう半年前に東京の劇団を離れてゐました。東京の劇団はもう半年前に私を追い出していたのです。東京の劇団はもう私を必要としていなかったのです。もう私は何処にいようと好い体になっていたのです。

私は何を罵られても黙ってじっとしていました。実際それについて一言の弁明もしませんでした。一言一句も書きませんでした。そして死よりも暗い絶望を抱きながら、黙って静に毀れた東京を見ていました。震災後の東京の劇壇ーすべてが亡びすべてが新しく生まれて来なければならない劇団ーそこから生まれて来たものは果してなんでしょう。

営利劇場の基礎もない競争的宣伝、劇場の全滅を好い事にして、そこここに首をもたげた忙しげな新劇団、バラック俳優、バラック演技、バラック興行師、

私はいよいよ絶望しました。もうどうにも救いようがないと思いました。ひねくれた自分の根性かも知れません。徒らな反抗的精神からかも知れません。私は唯読んで書こうと思ひました。書いて読もうと思いま

した。如何に叛かれても憎む事の出来ない演劇を、せまい書斎の内に、それよりも狭い自分自身の頭脳の内に作り上げようとしました。①

小山内薫はひととき帰宅して、彼は東京の惨禍を見詰め、大阪への転居を決意する。次男宏の嫁小山内富子による評伝では、留守宅の無事と大阪での暮らしも語られる。

大阪への小山内転居（小山内富子『小山内薫ー近代演劇を拓く』）

大震災のその夏、薫の三人の子供と登女子は、薫の大阪での仕事に便乗して夏季休暇の避暑地を神戸の六甲に選んでいた。四谷の留守宅には書生と女中と姉の礼子が残っていた。三男の喬は小学校の一年生で次男宏も、長男徹もまだ小学生であった。二学期は九月一日から始まる。東京へ帰る準備も整った前日の八月三一日、三男の喬が突然腹痛を訴えたので、帰京は延期されることになった。ここへ東京周辺は地震で阿鼻叫喚の巷と化したのであった。「あのとき喬の腹痛という偶然がなかったら、私たちもどうなっていたかわかりません」と登女子は災難を免れたそのときの幸運をよく私との話題にした。・・・

薫は家族をそのまま大阪に残して、単身東京へ戻った。一般人の上京は制限されていた。薫は新聞関係の報道員の身分証明書を持参しての一時帰郷であった。

① 小山内薫「築地小劇場建設まで」（『築地小劇場』一九二四年、創刊号。五九ー六一頁。）

四谷南町の留守宅は崩壊からも火災からも免れ、書籍類も無事であったし、病弱な姉礼子をはじめ書生や女中も無事だったことを薫は何より喜んだ。東京周辺は一面の焼け野が原で、冷静さを失った巷には流言飛語が飛び交い、治安も悪く騒然としていた。薫は家族を大阪に足止めさせておき、これを機会にいよいよ書斎に籠る決意を固め、家族も大阪へ引っ越させることにしたのだった。

天王寺悲殿院町の家への引越し、そこはプラトン社中山社長の持ち家で、明治情緒の漂う大きな洋館だった。部屋数もたくさんあったので、小山内家一家が広い二階に住み、階下には妹の岡田八千代と松竹の女優さん親子と、薫の仕事の助手をしていた若き日の川口松太郎が、一部屋ずつを占めて、四世帯が二か所の台所を使って暮らすことになった。①

土方与志の夫人梅子は大正初期の日銀総裁、三島弥太郎子爵の次女である。ヨーロッパに滞在する土方与志の留守宅は被災を免れるが、小石川林町の豪邸へは親族のみならず、近隣の住民百余名が避難した。のちに築地小劇場の運営にも尽力する梅子は、罹災者のため炊き出しや買いものに忙殺される。大地震から派生した危険、朝鮮人騒ぎや亀戸事件をも彼女は切実に感じた。

大地震の被災と救助（『土方梅子自伝』）

① 小山内富子著『小山内薫―近代演劇を拓く』慶応大学出版部、二〇〇五年。一八三―一八五頁。

与志が出発した翌年の秋に私は敬太を連れてフランスへ旅立つことになりました。母はまたあとから来る予定でした。九段の学校も夏休みまで仕事をやめ、船の切符も入手し、すべて準備を完了して九月十日の乗船を待つばかりになりました。しかし、突然この出発は中止せざるを得なくなりました。九月一日におこった関東大震災によって、東京一帯が大混乱に落ち入ったため渡欧どころではなくなったのです。

小石川の家は倒壊や火事の被害はありませんでしたが、その大きな地震は、ふるえ上がるようなこわさでした。家の中にいては、何時またゆりかえしが起って家がたおれるかもしれないので庭に難を避け、木と木の間に蚊帳を吊って、その中に入っておりました。満二歳の誕生日を間近かにひかえた敬太も、無事でほっとしましたが、家の中にあるおもちゃを欲しがって泣くのに閉口しました。第一のゆれは正午頃でしたが、夕方になるとあちこちで火の手の上るなかを、姑の実家加藤家や、叔母の嫁ぎ先の吉川家（もと長州岩国藩主）の人たちが、高台にある私たちの家を頼って逃げて来ました。近所の方々も庭の広い私の家へ避難して来られたので、日頃は家族数の少い土方の家も、この時は百人以上もの人たちで埋まりました。・・・

わが家では百人以上もの罹災者に、炊き出しをしなくてはなりません。主婦として私はその中止になって働きました。大急ぎで近所の米屋さんから俵のまま米をとりよせ、おにぎりを作るとともに、祖父母をはじめ、親戚の人たちのおかずも用意しなければなりません。人力車に乗って、本郷にあった当時としては珍しいカンヅメやハムなどを売っている食品店まで買い出しにでかけました。

しかし、その途中が大変でした。道路には焼け出された人たちがあふれ、人力車に乗っている私にかってどなります。「ばかやろう！」「車に乗りやがってなんだい」「コンチクショオ！着物着て、すますてやがる、非常時だぞ！」

道端のあちこちの家もこわれたり、焼けくすぶったりしています。引き返したいと思いましたが、主婦として大勢の避難して来た人たちの食事を用意しなければならない、今は自分にとってそれが一番大切な役目だと考え、決心して罵声を浴びながら小石川と本郷を往復しました。片腿をそのまま燻製にした大きなハムやカンヅメをたくさん買いこんで人力車に乗せ、小石川の家へたどりつきましたが、あの時のことを考えると、今でも苦しくなります。

地震や火災が一応収まったと思う間もなく、こんどは暴動が起るとの噂が立ちました。社会主義者や労働者、朝鮮人が火を放つとか、井戸に毒を投げ入れるとか云われ、軍隊がでたり、町の人たちが組織した自警団や、右翼団体が鉄砲や刃物、竹槍などを持って警戒にあたり、ものものしい状態になりました。

大きい家に住んでいる者はうらまれて、暴徒に襲撃されるとの噂も立ちました。私どもの家は爆弾をしかけられるかもしれないと注意され、緊張しました。しかし、これは結局デマで、実際に殺されたのは、労働者や朝鮮人、社会主義者でした。・・・与志はこの時、大切な演劇上の先輩を失ってしまいました。ヨーロッパに旅立つ前に、強い感動を受けた〈労働劇団〉の主宰者平沢計七氏はこの時、白色テロルのために殺されてしまったのです。大震災の時、平沢さんは純労働者組合の組合長でしたが、組合事務所のあった大島町で自衛団をつくり夜警をしていました。三日夜の十時頃、事務所へ帰ったところを制服巡査にとらえられ、亀戸署へ連行されて、そのまま消息が絶えました。

多くの社会主義者、労働者、朝鮮人が警察や軍隊を中心とするテロルや自警団の暴力に殺されましたが、当時は真相を知らされませんでした。平沢さんもその夜亀戸署内で習志野第十三連隊の兵隊によって銃殺されたと、後にあきらかにされております。平沢計七氏と与志は直接の交際はないままに、平沢氏の虐殺とな

ってしまったのですが、与志の演劇の道にとって平沢氏は忘れ得ない足跡を残した方で、その方を警察や軍のテロルに奪われたことは、与志のその後の人生にも影響を与えたように思います。 ①

他方ベルリンに留学中の土方与志は、九月二日新聞報道で大地震を知った。その一ヵ月後復興しつつある祖国への復帰を決意し、モスクワを経てシベリア鉄道で大陸を横断する。途上ロシア革命七年後の首都では、新たなソビエト演劇にも接した。小山内薫と約束した劇団創立の構想を練り始めるのは、この旅路においてである。

大地震直後の祖国復帰（土方与志『演出者の道』）

一九二三年九月二日朝早くベルリンのホテルの一室に眠っていた私は、一枚の新聞を持って入って来たボーイに起こされた。ボーイは同情というよりもお悔みに近い表情をして、持って来た新聞を渡した。いうまでもなくそこには前日の関東大震災のニュースが紙面をうずめていた。そこでは日本という島が太平洋に沈んでしまったかのように大げさに報ぜられていた。半年以上ヨーロッパ各地を演劇巡礼していた私はまず途方にくれた。

ちょうど一ヵ月目に、このまま勉強を続けようかどうしようか思いなやんでいる私のところへ、二通の手紙が舞い込んだ。その一つは親戚の一人からので、震災によって東京の劇場がほとんど潰滅してしまった。

① 土方梅子著『土方梅子自伝』早川書房、一九七六年。七六ー七九頁。

だからそれ等の復興がなるまで、ゆっくりそっちで勉強していろ、と書いてあった。他の一通は数年来左団次一座で親交を結んでいた河原崎長十郎からの手紙だった。彼はくわしく東京の劇場や劇団の消息を報告してくれた。「歌舞伎座の鉄骨、灼けて飴の如く」等という名文もまざっていた。そして最後には、一日も早く帰って来て、東京の復興をいっしょにやろうというような事で結んであった。そこで私は、この二つの手紙を前に置いて迷ったが、結局河原崎の手紙に従って故郷ー東京の演劇の復興に参加しようと決意した。

もうその時は日本の新聞等も手に入れる事が出来て、沢田正二郎氏が日比谷公園で野外劇を演じ、荒廃の中の市民の圧倒的な喜びとなったというような事も知ったし、また今まで色々な法律や条令で窮屈に縛られていた劇場建築に対する制約が緩和されて、バラック建ての劇場も許可される事も知った。そこで私がヨーロッパに出発する時に、小山内薫先生と帰国後は演劇研究機関を二人で作ろうという約束を思い出し、それをさらに拡大して、まず劇場を持った演劇・劇団活動を始めようと考えた。

まだ国交も開けていなかったソビエト同盟政府の、大震災をうけた日本の国民への同情と好意によって、幸い在外の日本人を最も帰国のための近道であるシベリア鉄道通過を特別に許可するという措置が取られた。私もこの特典を帰国の方法として選んだ。

第一次世界大戦終結、十月革命からわずかに数年後であり、近道といってもベルリンから日本まで一ヵ月もかかった。その途中シベリア鉄道に乗りつぐためには一週間もモスクワに滞在しなければならなかった。これはしかし、私にとってたいへん有難い事で、その間新しいソビエトの演劇に、また社会やソビエト人の生活に接する事が出来た。

この一ヵ月の旅行中、私はバラック劇場の設計や劇場の座組等に関して様々な想像を楽しみ、一応成案を

作った。十二月の終わりに私はようやく神戸に着いた。その翌日すぐに大阪に住んでおられた小山内先生を尋ね、帰国決意以来の私の構想を話した。①

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手で文房具店を開く。その商売を実際には安英が担い、仕入れのため高円寺から浅草の問屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場最初の女優となるのはその翌年である。

大地震直後の家業専念（山本安英『新版　歩いてきた道』）

大正という時代も末近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとっても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのでした。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は幸い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりませんでした。

① 土方与志著『演出者の道ー土方与志演劇論集』未来社、一九六九年。一二一ー一二二頁。

母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すようになりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたような気もちになって、一所けんめいに頭をしぼって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしました。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせい一ぱい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の宰領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのでした。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりすましていたこともあったようです。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

東山千栄子の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。革命の余波によりロシアから撤退したあとも同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦労の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸べながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨禍に直面して、三三歳の彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、こ

の世で生きる意義を懸命に考え始めた。

① 山本安英著『新版　歩いてきた道』一九―二〇頁。

帰国後の生活と日々の無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシヤ革命の大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六，七年間何をしていたかということになりますが、実はこの六，七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇とでもいいましょうか、何事もなくて大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行って学生の中に交って講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけっして退屈することなく、従って時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書斎人的な風格がありましたが、そういう理解の中にありながら何故か私は、なすことのなくて日を暮らしているが気にしていました。・・・

モスコーで全部を失ったといっても、日本に帰って住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を砕くのでもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行って暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかっただろうと思われます。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理に一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつのり、原因という程のもの

はなくていて、どちらも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっていますが、二人が一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのでした。

こんな風で表面は一応調うた生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされました。①

震災の衝撃と人生の転換　（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方はもう外国生活がいやになり、日本の留守宅に残って、当時の流行語でいう有閑夫人の毎日を送っておりました。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいこごとをしてみました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも奥様芸以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があっけなく奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいましたが、その悲惨な現実に直面して、私は人間とはなんとはかないものだろうということを、つくづく感じさせられました。そして、自分を省みたときに、愕然としました。

私はいったい何だったのでしょう？　ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったのです。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果すこともできません。河野の家の両親もにすでに夜を去っていて、お世話をしてあげる人もおりません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私がはじまるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにものかをつかまなければならないと決意したのでした。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によって娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおし仔細に語られる。

① 東山千栄子著『新劇女優』五二―五四頁。

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

房総で倒壊する家屋の下に（及川道子著『いばらの道』）

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があって、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたらい一杯のお洗濯に忙しそうでした。父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩していられました。和夫と冬生は奥の間で佐々木さんを相手に何かおもちゃをいじって遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取って遊んでいたのでしたが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク！という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していまいました。

私はとっさの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となって、畳にうつ伏してしがみついていました。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのでした。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思って、三人一緒に二、三歩歩みかかった時、ああ何という恐

ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲って来たと思う間もなく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさって来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに抑え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になって、何も見えなくなっていまいました。・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手に合わず、と云って隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝って貰うことも出来ず、気ばかりあせって弱り抜いておられるとき、折良くいらっした高等師範の方々に手伝って貰って、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を圧しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしぼって「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合わすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添ってホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴ーこれこそ全くこの世の終りかと思われました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とこうした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮べながら悲壮な声を張り上げて、「主よ　みもとに近づかん　のぼるみちは　十字架にありとも　など悲しむべきや　主よ　みもとに近づかん」と讃美歌を歌い出しました。そして、歌い終る

と一同深いお祈りをいたしました。

このとっさの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までが、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するとどこからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷ける、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうといている赤い夕陽にてらされて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと偲ばれるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけもっと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやっと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繃帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔を

しかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそる手を触れて見ますと、いつの間にか繃帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かれていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繃帯した怪我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾッとしていまいました。

その日のうちに、海岸にあったパーラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは収容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのでした。①

自由劇場第四回公演の一つとして戯曲『河内屋余兵衛』を抜擢された吉井勇は、本来『明星』にも寄稿した歌人であって、大正十年最初の歌集『酒ほがひ』を世に問うた。震災第二年の六月大阪プラトン社により上梓された『夜の心』には震災を詠じた「業火余燼」二六首が収録される。なお、大地震の翌月刊行された雑誌『文章倶楽部』特別号（凶災の印象・東京の回想）には、白鳥省吾の詩「灰燼の中から」等とともに、「業火余燼」のうち十首が掲載される。

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。四四―五二頁。

吉井勇「業火余燼」『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻）

何ごとの瞋(いか)りかしらぬ地震ひぬ　天意え解かずをののきて居り
人死にぬ修羅道のごと人死にぬ　かなしいかなや人の死ぬこと
うち日さす都もほろぶ時来ぬと　業火のまへにをののきて居り
地獄絵をまざまざと見て思へらく　現身はいとあはれなるかな
いまもなおほ目に残れるは焼あとの　芝香が墓の寒きまぼろし

人を焼く煙とともに雨は来ぬ　冬まだ来ぬに寒き雨かな
怖ろしき幾夜を重ね生きながら　地獄の道をたどらむとする
空遠く飛行機見えて天日は　ものすさまじく落ちむとするも
夜もすがら絶えず聴こゆる地の声に　ふるへをののくわが心かな
吾子(あこ)は寝ぬわれは眠らで夜を守らむ　この怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬楽と見たる月に似し　月はあれどもすさまじき夜やめ
大地の瞋りとすればこころよし地震(なゐ)も畏れでかく云うや誰
生きながら黄泉(よみ)のすがたをみることが　いかに悲しきものとかは知る
酒甕の覆るさま目に見ゆと　無頼のこころ地震にほほ笑む

そのかみの別れに君と聴きしごと　地震の絶間に鳴ける虫かな

馬楽忌の酒に更けたるかへり路に　見し浅草の月に似る月
すさまじき夜ながら空にかかれるは　黄楊の櫛にも似たる月かな
大空の月いと細し夜ごとの　心細さに月も痩せけむ
ありし日の銀座思ひて涙落つ　世に亡き人をしのぶここちに
華やげる人の末路を見るごとき　あはれさ覚ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ　寂しかなしと云う人も見ぬ
馬楽の忌小せんの忌など思ひつつ　われ浅草の焼あとをゆく
浅草も焦土となれば焼あとの公孫樹(いてふ)も寒き秋なりしかな
源治店の路次もいまなし　ありし日の人のおもかげいかにもとめむ
江戸名所図絵もほろびぬ　わが夢も消えて空しと嘆けるや誰
うち日さす都のなかをたもとほり　しみじみと知る現身の秋

①

① 吉井勇著『夜の心』（『定本吉井勇全集』第一巻、四一二―四一三頁。）

〔参照〕吉井勇「業火余燼」『文章倶楽部』大正十二年十月特別号（凶災の印象・東京の回想）、三三頁。

大地震の五ヵ月前土蔵劇場での公演を無事果たした秋田雨雀は、七月初め有島武郎の葬儀に列したあと、月末東北への講演旅行に出発した。東京での大震火災を知るのは九月二日青森においてである。丹念な『秋田雨雀日記』に八月二九日から九月一日までの執筆は欠如するが、以後数年間の絶えざる震災日誌はとくに貴重である。

震災日誌（『秋田雨雀日記』大正十二年）

九月二日　朝驚くべき報道に接した。大震と火災のために東京市全滅の報に接した。一日正午正十二時ごろ上下、水平の振動起り、大建築崩壊。十二階、ニコライ、三越、松坂屋なぞ焼失。火は全市をなめつくしかかっている。ー第一報をきき、老農社へ遊びにいく。ー宿屋へ帰ると、第二報、第三報がきていたー戒厳令発布の報ー自動車で魁へいき、回報をみて、栃内農学士の宅により、帰路再び魁に寄り、食糧略奪、抜剣の報を受け、自動車で土崎へ帰った。今夜こそ怖るべき夜だ。今夜は怖るべき夜になりはしないか？

九月三日　暴動化はしないか？東京の家族も心配になるので、足助君とわかれて、黒石へかえった。黒石では電報をみて、東京へ出発したものと思っていた。明日東京へ向って出発の用意をする。小坂、北岡、鳴海の諸君来訪。東京の模様について語った。

九月四日　東京市の八分まで全滅らしい。きょう黒石を出発。出発前に朝鮮の鄭凰吉君が訪問してきたので、警察ではだいぶ問題にしているらしい。刑事が朝からつききりでいる。午後一時の汽車で出発。川部でそばをたべた。淡谷君の家へより、それから盛を訪ねた、水筒を淡谷家から借り、食糧をととのえて夜の急

行に乗る。上京客で立錐の余地もない。宇都宮の参謀大尉と同乗。朝鮮人の流説の調査をきいて皆で笑った。しかし国民の軽率には驚く。沿道は戦闘気分だ。汽車が遅れて、赤羽に二時ごろついたので、小学校へ一泊。

九月五日　赤羽の小学校では教師が救護につとめていた。親切に応対してくれた。同行十人ほどテイブルの上に眠った。夜なかに一回地震があったので驚いてとびだして、時計のガラスを破った。はじめて大震後の東京へはいるしたくをした。自分の家のことなぞ心配しながら、池袋行の汽車に乗った。まるで戦争だ。

九月六日　午前中に雑司谷へつく。家は安全！食糧はいくぶん給与されていたが、全体として食糧欠乏、避難民は全部給与。比較的よく手廻しができていた。戒厳令ー自警なぞでものものしい。朝鮮人虐殺は問題になるらしい。今日では反対宣伝をしているが、むずかしい問題になるらしい。妻も田中君も赤ん坊もみんな元気でいるので安心した。しかし、驚くべき損失は直接間接にぼくらに影響してくるだろう。・・・

九月十一日　朝鮮人問題につづいて社会主義者の検束の話がでている。小川君とぼくは検束されていることになっているのだそうだ。小川、藤森、生方の三君を誘い、前田河広一郎君の検束の話をきいた。自警団だ密告したらしい。藤森、小川君なぞが弁解して、取り返してきたそうだ。夜警。（大門会）・・・

九月二六日　高木、松田の諸君が写真を撮ってくれた。（大杉君はリーブクネヒトと同じ運命にあった。）戒厳司令官福田大将交代。憲兵隊長罷免、甘粕憲兵大尉軍法会議廻附の事が理由不明のまま問題になっていたが、きょうはじめて発表された。甘粕憲兵大尉は平素社会主義に反感をもっていたが、大震後無秩序の状態に際し無政府主義の巨頭大杉らが不穏の行為にいずるを恐れて、大杉ほか二名を某所に連出して、銃殺したという犯罪分明にされたので、軍法会議の附せられることになったのだそうだ。大震に比較すべきほどの

大事件だ！国民の無智は怖るべきことだ！清藤君大鰐から来た。（大杉君銃殺の報〈大いなる損失〉）①

十一月十三日　『解放』の戯曲着想。二つほどえた。一、震災にヒントをえた、避難民を主材としたもの、一，牢獄と二つの窓。表現主義ふうのもの。このいずれかを創作してみよう。ずっと主観的なものでいい。暁民会の川崎悦行君が市ヶ谷監獄で病死したという通知をうけた。立派な青年だった。仏教から生まれた社会思想家だ。二四才。不穏文書の件。午後高田保君に会い、ふたりで運天女史を中野に訪い、牛込でた。中野のカフェ・アザミによった。夜大門会にごたごたがあったのを仲裁した。・・・

十一月二十日　松本弘二君がきて『解放』が三月に延びたということをいっていった。戯曲は月末に脱稿することにした。『女性改造』の短い感想「わが子の行末を見守りて」のために短いものを送る。「子供は自然の子」とした。

十一月二三日　かなりな強震。いいあたたかい日。茅野家から死んだ娘さんのくやみの返しがきた。佐藤君がきたのでふたりで墓地のほうへ歩いていった。酔って憲兵隊につれていかれた話をしていた。おもしろい男だ。夜千代子をつれて東洋大学へいく。記念会で『国境の夜』をやっていた。校庭での屋台舞台。月光に照されて五、六百人の人が見物していたのはおもしろい感じをあたえた。舞台装置は丸太小屋なのがよか

①『秋田雨雀日記』第一巻、三二二ー三二四頁。

った。グレゴリーの『月の出』もやった。千代子と二，三のカフェによって帰った。①

大地震の翌月雨雀も雑誌『文章倶楽部』に詩編「死の都」を掲載し、十一月には戯曲の執筆を再開した。②着想されたのは青森へ逃れた被災者の苦境で、救護先における朝鮮人騒ぎを含み、表現主義による錯乱場面がフィナーレをなす。翌年『演劇新潮』に発表された脚本『骸骨の舞跳』をここに抜粋する。

避難先での不穏（秋田雨雀脚本『骸骨の舞跳』）

人物＝青年、老人、看護婦、医長、〇〇人、自警団員（後に骸骨）、貴婦人、避難民男女、其他

場所＝救護班のテント（立体派風の舞台装置を可とする。所謂マヴォ式の試みも面白いであろう）

老人　じき夜が明けましょうか？

青年　夜の明けるまではまだ二時間もありましょう。

老人　そうですか・・ああ何んてことでしょうね・・こんな年になってこんな目に逢うなんて・・あれは何んの音でしょう？

青年　何でもありません、汽車の音です。あなたは何時ここへ降りたんですか？

①『秋田雨雀日記』第一巻、三二二ー三二四、三三〇ー三三一頁。

②『文章倶楽部』大正十二年十月特号。三七頁。

老人　ゆうべです・・ゆうべ遅くです・・一体何んて話でしょうね・・こんなばかな話があるものでしょうか？

青年　東京でやっぱりひどい目にお逢いでしたか？お互に飛んでもない眼に逢いましたね。

老人　ひどい眼位じゃありません・・私は娘と孫に死なれてしまいました・・それに私は病身でして、そんな事をして旅なぞ出来る身体じゃないんですけれども・・

青年　然うですか、お気毒ですね・・そして娘さん達や孫さん達は何処で失くなったんですか？本所ですか？

老人　いえ、向島です・・私共は三十年向島に住んでいましたから・・何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土手に逃げていたのを、人に押されて大川へ落っこってしまったんだそうです・・

青年　それはお気の毒なことをしましたね。あすこでは随分そんな人があったそうですね。あなたはそれでよく逃げられましたね・・

老人　一層死んだ方がよかったんでしょう・・娘や孫に死なれて何が楽しみで生きて行かれますか？

青年　そうお思いになるのも無理はありません・・でも世の中は生きていさえすれば、また何とかなりましょう・・いや実は僕自身もいまのところ何の光明もないんですが・・然し生きている間は生きていなければならないんです・・

〔中略〕

看護婦　気分のお悪い方はありませんか？

避難者　看護婦さん、先生を呼んでくださいな・・お腹が痛んで仕方がないんです・・

避難者　看護婦さん，私に水を一杯ください・・

避難者　看護婦さん、この身体で船に乗れましょうか？・・

避難者　看護婦さん　この切符で只で船へ乗れましょうか？

看護婦　皆さん、静かにしてください。そう一度におしゃっちゃ何うすることもできません・・（老人に）あなたは今夜船にお乗りになれなすか？

老人　私はそれをあなたにお尋ねしたいんです・・もう少しここへ置いていただく訳に行かないでしょうか？・・何うも身体が痛んで仕方がないんです・・

看護婦　そうですか？今先生がいらっしますから診察していただいたらよろしいでしょう。

〔中略〕

そのとき一団の自警団員がテントの中に入り込んで来る。甲冑を着て抜刀をした者に統率され、在郷軍人の服装をした者、陣羽織を着た者、鉢巻きをした者、学生服を着た者、各々手に槍刀剣類を携えている。

甲冑　看護婦さん・実は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていただきます・・

看護婦　そんなに入って来ちゃ困りますね。患者が寝ているんです。

鉢巻　一々断る必要ねえじゃねえか・・さあ勝手に入って探そう・・

看護婦　（唇をふるわせて）いけません・・入っちゃいけません・・

甲冑　看護婦さん、実はこのテントのなかに○○○○○○○・・現に汽車から降りるのを見た男がいます。・・○○○○○○

陣羽織　○○○○○○・・市民の安寧のためです・・鉢巻

在郷軍人　そうだ、市民の安寧のためだ

鉢巻　ぐずぐず言ってないで早く探そう・・なんでもやっつけちまえ・・

自警団員は提灯を振り廻して避難民の中を歩き廻る。看護婦は蒼白な顔をして一団の後を追うて行く。自警団員の一人は、老人と青年の背後に子犬のようにしゃがんでいる一人の男の周囲に立つ。

鉢巻　こいつだ！・・こいつだ！・・提灯を出せ・・皆なこの顔付きを見ろよ・・

ある男　（二四、五歳の労働者風の男）僕は何もしないんです・・

学生　（真似をする）私はなにもしないんです・・

陣羽織　やっつけちまえ・・やっつけちまい！

甲冑　乱暴なことをするな・・己れが今調べて見るからな・・おい、〇〇〇〇?嘘を言っちゃ為にならないぞ・・

ある男　僕は日本人です・・皆さんはなにをするんです？　①

① 秋田雨雀著『骸骨の舞跳』叢文閣、一九二五年。三―二三頁。

〔参照〕「秋田雨雀と表現主義―秋田雨雀と関東大震災の戯曲」（大笹吉雄著『ドラマの精神史』新水社、一九八三年。）

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣―

第四節　大震災による新劇人の衝撃と覚醒　その二

平沢計七への迫害～大震災における思想弾圧～柳瀬正夢の拘束と改心～千田是也と朝鮮人騒ぎ～演劇への遍歴薄田研二～女優への道田村秋子～大地震の年水谷八重子～留置場における激震沢田正二郎～　歌舞伎一家の被災沢村貞子～　浅草六区の興行壊滅

新劇人に係わる多くの震災記録のなかで、とくに悲惨なのは小山内薫の師弟平沢計七の運命である。鉄鋼所の工員であった平沢は、大島・亀戸における労働組合活動家であるとともに、プロレタリア演劇の先駆たる〈労働劇団〉を組織していた。大地震翌々日の夜半、平沢は数名の警官に呼び出され、大島町の自宅より警察署へと連行された。同じ頃亀戸では南葛労働会の活動家六名が検束され、いずれも生死不明となる。十月十日警視庁は亀戸警察署における彼らの殺害を認め、新聞各紙でも報じられた。①

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝平沢計七』恒文社、一六八―一七五頁。

拙稿『紡績工場の労資と女工の被災記録―産業革命先端への震災直撃（続）』三七―四一、九五―九九頁。online.

平沢計七が命を断たれた一連の弾圧は、関東大震災に派生した亀戸事件としていまに伝えられる。まもなく労働総同盟友愛会の依頼により、弁護士山崎今朝弥らの自由法曹団が事件の調査に着手した。犠牲者の家族や周囲の人たちを対象に、かくして作成された聴取書二四件の第一は、平沢の遭難をめぐる知人八島の陳述である。

平沢計七の検束と殺害（『自由法曹団聴取書』）

聴取書第一

府下大島町三丁目二百二三番地
八島京一　二九才

一、自分は一日の地震の日に焼出され小松川の方面に逃げましたが、二日に雨が降り野宿が出来ませんので大島の方へ行きたる処、途中で平沢君の細君に逢いました処、自分の家に来て居れと云われたので平沢君の処へ行きました。此時は午后三時頃でした。而して平沢君は翌日正岡君の処へ倒潰家屋片付の手伝に行き、夕方帰って暫くすると夜警に行くと云い出て行き九時か十時頃と思う頃帰って来ました。暫く休んで居ると正服巡査が五六人来て平沢君に、まことに済まんが警察まで一寸来て呉れと云い、平沢君も「はい」と云いおとなしく出て行きました。

そして夫れ切り帰りませんから細君が心配するし、自分も心配だから五日の正午頃手拭紙等を持ち警察署へ差入に行きました。而して亀戸署の高木高等係に逢い差入れを托したる処、平沢君は三日晩に帰したと云いますから自分はその時平沢君はもう殺されたものと思って帰って来ました。

二、その訳は、四日の朝三四人の巡査が荷車に石油と薪を積み引き行くに逢い、その中の一人の顔馴染の某正一と云う巡査にその薪及石油は何にするかとききたる処、外国人が亀戸管内に視察に来るので、その死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した、朝鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。夫れで平沢君も居るのではないかと、巡査にきいた方面の場所へ行き見たる処、朝鮮人支那人等二、三百人位の人間が殺して山に積でありました。その近辺に平沢君の靴と思わるる靴が置いてありましたからです。

三、私の考では平沢君は自警団へも進で出ており、極めて親切な要領の好い人ですから、殊に彼の場合演説をしたり、革命歌を唱えたり、又警察内で騒ぐ様な無謀な行動を採る様な人で無いと深く信じて疑いません。

四、尚私の考えでは平沢君は三日に連れて行かれると、その夜の中に殺されたものと考えられます。

右の通り相違ありません。

大正十二年十月十六日午后十時

東京市芝区新桜田町十九番地　松谷法律事務所ニ於テ

八島宗一

聴取人弁護士　松谷与二郎

立会人　〃　山崎今朝弥　①

① 『亀戸労働者殺害事件調書一』（『二村一夫著作集』別巻二。online.）

平沢計七の活動については、土方与志や鈴木文治による回想もあるが、山内みなの自叙伝には震災直前の面影が親しく描かれる。紡績女工であった山内は、やがて労働運動に専念し、下中弥三郎設立の労働週報社に勤めた。労働者向けの雑誌で平沢計七を編集長とするものの、ここに属したスタッフは他に彼女ひとりであった。

山内みな「平沢計七さん」（『山内みな自伝』）

『労働週報』の編集発行名義人が平沢計七さんに変わったのは、大正十一年の十一月七日発行の第二二号からですが、平沢さんは純粋の労働者出身の労働運動家で、大正初期からの友愛会の中心人物のひとりでした。・・・

『労働週報』の事務所で仕事をしているときの平沢計七は、いつも陽気で、黙っているということがありませんでした。私を相手に労働歌を歌ったり、自分の書いた小説を暗唱したり、時によっては芝居を始めたりしました。私ははじめは、気違いかと思いました。そうかと思うと「これは売れない雑誌であり、もうからない仕事だ。むだじゃな」と独言を言ったりしました。

小説家の菊池寛が事務所にたずねてきて、「平沢に会いたい」と案内をたのみました。そのようすが、モサッとしていて背が低いので、私は毎朝読んでいた新聞の連載小説を書いている小説家の菊池寛だとは思いませんでした。さぞ美男子だと思っていたから、ピンとこなかったのです。平沢が「ここです。ここです。」と言ってでてきて、芸術論をやりだす。菊池寛が帰ってから私がきくと「おお、あれが有名な菊池寛だよ」

と言って何かブツブツ言っていました。「何ですか」と私がきくと、「あれはブルジョア階級の小説で労働者階級の小説ではない。面白いだけが小説ではない」ときびしい声で言うのです。私は「わかりました」とこたえましたが、ながながとプロレタリア芸術論を話しだすので、そのあとはこっちは聞いていませんでした。次ぎに菊池寛がたずねてきたとき、私が応接間をつかったら、と言ったのですが、「つくろうことはない。労働者は労働者だ」といって、狭い事務所の中で芸術論をやりだすのです。私はふきだしてしまいました。①

前衛的なポスター、装幀、油絵で知られる柳瀬正夢は、田端や本郷でボヘミアン的な年月を送りつつ、十五歳で院展に入選した。雑誌『我等』を創刊したばかりの長谷川如是閑と大山郁夫に個展を機縁として知り合い、大正デモクラシーを唱導する両知識人から保護と影響を受ける。同時に村山知義らと新興美術の一派マヴォを組み、『読売新聞』に時事漫画を書き続けた。大正十二年八月大山の静養に付き添って房総海岸に滞在し、一足先に帰京した彼は、大山の留守宅で大地震に驚愕。下宿に戻って、深夜検束されるのはその二日後である。綴られた柳瀬の自叙伝は数頁にすぎぬが、なかでは震災における検束と新生への改心が中心的に記述される。②

① 『山内みな自伝』新宿書房、一九七五年。一一一ー一一三頁。

② 柳瀬信明『柳瀬正夢を語る』『〈ねじ釘の画家〉柳瀬正夢展』ムサシノ出版、一九九〇年。二三ー二七頁。

検束の艱苦と新生への改心（柳瀬正夢「自叙伝」）

彼が自叙伝を書くという。僭越の至りである。だが恐らく彼はこれを最初にして最後のものとするであろう。来順番好機不可逸。この機会にでも彼ひとつ生活過程を整理し、同時に即刻彼のこの過去帳を埋葬せねばならない。ぼやけた彼の記憶よ、やすらかに成仏しろ！

彼の生年？　大正十二年。　月日は？　九月一日。

全く真面目で言っているのである。彼はぐうだらでありし過去の襤褸をば、此の日きれいさっぱりと棄てたから。関東大震災の焼土の中に。

そして彼の更生使命は？　組織的無産階級解放運動。・・・

大正十二年九月一日の関東の大震災は、私の終始した観念的ニヒリズムを根こそぎ持って行ってくれた。何の馬鹿々々しいと思ひ乍らも、此の災変を限界に更生したことが今頃になって意識されてきた。避暑の房州から皆より二日先に帰京して、大山さんの戸塚の邸の留守番をしていたことが禍因となった。

その夜たしか震災三日目であったと思ふ。十二時過の下宿の二階の夜警から帰って余震に揺れる蝋燭の灯に、漫画日記をつけていた時突然私は襲はれた。後で家宅捜索に取散された部屋一杯の乱雑さと、夜具の上などに残っていた土足の跡などを数えて、私は当夜の物々しさに改めて驚いたが、それは私が街路へ引出されて下宿に背を向け、懐手のまま直立不動を強いられている間に行はれたものとみえる。予審判事達の自動車二台が暗の中に棄ててあるのを見た。私は軍隊の銃剣包囲の中で、中尉に命令された夜空の一方をみつめてゐた。やられるものと覚悟していたが、その瞬間の落ちついた英雄的な気持を今辱かしく思っている。私

は馬鹿だった。

親しかった近処の人達は私の敵にと一変した。罵言、弓張、日本刀、鳶口、竹槍、石ころ、銃剣、そして暗、里程、護送中の軍隊、その他の乱暴さ愚昧さをいま詳述する自由と暇を持たないが、自警団の名によって表されたおろかな民衆の姿を見た。警察の狂乱。

私は戒厳令下の仮設中隊本部から淀橋署に引渡されて、留置場にたたきこまれた。隣檻に五年振の友達が居たりなどした。格好な其処は私の天国だった。

五日間ののち私は此の安全地帯から放り出され、長谷川さんの忠告に従い一ヵ月許り門司に帰った。私は彼等の宣伝のあらゆる仮面を見た。じっとしてはいなかった。私は行動を引ずった。①

大山郁夫は当時早稲田大学の政治経済学部で政治学の講義を担当していた。大震災の三ヵ月前、六月四日に治安当局の検事一団は、佐野・猪俣両講師を捜索するとして、早稲田大学構内に立ち入る。彼らは恩賜館研究室なる大山教授の机上をも点検し、風呂敷包一個と紙包一個の書類等を押収した。これに対して同月二六日神田のキリスト教生年会館で抗議集会が開かれ、三宅雪嶺の講演に続いて大山は、落涙しつつ学問の自由と大學の自治を訴えた。大地震の翌日戸塚の留守宅が捜索され、自邸に戻った彼は九月七日、多数の武装兵士によって憲兵隊臨

① 「自叙伝」（『柳瀬正夢全集』三人社、二〇一三年。第一巻、二〇、二七－二八頁。

時駐屯所に連行され監禁される。① 柳瀬正夢の検束と収監はみずから推断するとおり、大山への弾圧に起因したであろう。

大山郁夫に師事し、のちに彼を党首とする労働農民党に参じる田部井健次は、大震災の第七日恩師の消息を心配し、戸塚の大山邸を訪ねた。房総から帰宅した夫妻は無事で、田部井も朝食を共にする。その間に数十人が邸宅を包囲して、政治学者大山を検束し、これに応対する田部井もみずから望んで憲兵隊屯所に監禁された。かねて陸軍では大山郁夫襲撃の計画がなされていた。田部井による小冊子『大山郁夫』には、震災に乗じた思想弾圧の一端が痛切に語られる。

憲兵隊による大山郁夫の拘禁（田部井健次著『大山郁夫』）

私が戸塚の先生のお宅へ着いたのは、朝の九時ころでしたが、内玄関の戸を開けると、直ぐその突き当りのところにある食堂から先生と奥さんのにぎやかな笑い声が聞えて来ました。ははあ、もう帰って居られるな、と思って私は直ぐに上へあがり、大急ぎで食堂の戸を開けると、先生と奥さんは食事をしておられました。私も直ぐに朝めしを御馳走になることにし、一緒にめしを喰べながら、当時の東京の情況を先生に詳しく報告しました。大杉さんのことは私はまだ何も知って居りませんでしたが、堺利彦老人を中心とする数名の人々が獄中で殺されたらしい、というようなことや、江東方面でだいぶ多くの同志が殺されたらしいという噂など、私の聞き知って居た限りのことを報告し、最後に私は「先生！我々も東京にいては危いです。も一度田舎へ逃げ出すことにしませんか」ということを提案しました。

と、丁度そのときです。当時大山先生のところに書生さんをしておったS君があわてふためいて食堂の戸を開け、「大変です！いま兵士たちが剣つき鉄砲を持って玄関のところへ押し寄せて来ています！」というのです。・・・玄関のそとにいたのは約二十人ほどでしたが、なお垣根のところにも二間に一人くらいの割合で兵隊が配置されているのがちらりと見えました。多分家の周囲全体をぐるりと取りかこんでいるのでしょう。全部で五十人くらいの兵隊が動員されてきているらしいのです。・・・

僕は若い将校との談判を終えるや否や、直ちに奥へ取ってかえし、先生にこう言いました。「先生！とうとうやって来ましたよ、憲兵隊本部の命令で先生をつれに来たのです。家の周囲はもう兵隊に取りかこまれて了いましたから、逃げようとしてもとても不可能です。僕も一緒に行きますが、これが最後になるかも知れませんから、その覚悟で行くことにしましょう」と。・・・

やがて支度が出来たので、今度は先生と僕と二人で玄関へ出て行きました。そこには例の若い将校が相変わらずいかめしい顔をして控えていました。彼は最初の論判があってからは、敢えて上へあがろうとせず、じっとそこに待っていたのでした。先生はその若い将校に向かっていかにも静かに、「ごくろう様です」という丁寧な挨拶をなさいました。その将校も黙って目礼し、我々はそのままどやどやと玄関の外へ出ました。先生と僕とを中にして、前方には約二十人くらいの、後方には約三十人くらい兵隊が、四列縦隊に整列しました。そのとき表の方を見ると、垣根のそとに約百三十人位の人たちが、群がり集って何かがやがやと話し合っています。多分近所の人たちが噂をききつけて集まって来たのだと思います・・・

① 『早稲田大学百年史』、早稲田大学出版部、一九九七年。第三巻 三四〇―三五二頁。

やがて私たちは約一時間ほど歩いて、落合の憲兵隊屯所へ着きました。そこは普通の住宅を臨時に憲兵隊屯所にあてたものでしたが、相当に広い家で、その家の庭には多数の兵隊があちらこちらに屯していました。その家の八畳ほどの広さの板敷きの応接室でした。時間は十一時少し前だったと思います。私はその部屋へ入れられるや否や、とっさにまどのところ行って外の様子を見ましたが、そのまどの直ぐ下には十数人の兵隊が屯しているので、いざとなってもそこから逃げ出す可能性は全く無さそうです。・・・

我々ふたりは相変わらず応接室に監禁されたままです。そとはもうすっかり暗くなり、やがて八時近くなのですが、まだ何の音沙汰もありません。「どうするつもりなのだろうか、殺すなり、帰すなり、さっさと片づけたらいいではないか！」と僕は腹の中で少々いらいらしながら考えました。が、やがて四、五人の将校がどやどやと部屋の中へ入って来ました。そしてその中の大将株の男が、「どうもいろいろ御迷惑をかけましたが、もう帰っても宜しいです。御留守中にお宅の家宅捜索をやりましたが、どうぞ悪からず」という挨拶をしました。・・・

かくして先生と僕とはその晩の九時近くに無事に家へ帰って来ました。しかし、僕が憲兵隊屯所でかえりがけに「別段用事も無いのに、我々をこんなところにひっぱって来て云々、」と言ったのは、実は全く僕の誤解でした。彼らにはやはり「重大な用事」があったのでした。後で判ったのですが、彼らは最初から暗殺の目的で、先生を憲兵隊屯所へひっぱったのだそうです。

あの大地震があって数年後労働農民党の支部が全国各地に確立され、華々しい闘争を展開し始めた頃のことです。四国の或る町の町長で、極めて熱心に労農党を支持していたひとりの老人がありました。その人が或る時労農党の数人の党員にこんなことを話したそうです。

「諸君は何も知らないだろうが、君たちの党首の大山さんは、大震災の時に危く殺されかかたんだよ。陸軍の或る秘密本部の方針で、大山さんを、あのどさくさまぎれに暗殺することになり、憲兵隊が大山さんを自宅から落合の屯所へ引っぱったのだが、その引っぱり方が余り大げさだった為に、付近の民衆が騒ぎ出し、それをまた新聞社が嗅ぎつけ、四方八方へ電話をかけて大山さんの行方を探したものだから、憲兵隊でもとうとうおおやまさんを殺すわけにはいかなくなって了ったのさ。大山さんという人は運のいい人さ！」と。

この話を聞いて党員たちは、その老人が何故そんなことを知っているのか、その話に疑問を持ち、直ぐにそれを質問すると、その老人は大声で笑いながら、「実はわしはそのときの憲兵隊の参謀だったのさ」と、自分の前身を正直に告白したというのです。①

大正十二年の一月ドイツから帰国した村山は、柳瀬正夢らと前衛的な美術団体をマヴォを結成し、同年七月浅草公園の伝通院本木堂で第一回展覧会を開いた。大震災を利した官憲の弾圧は彼にも余波が及ぶ。

大地震による取締りと復興への画業（村山知義著『演劇的自叙伝２』）

その年の九月一日の正午に関東地方の大震災があった。あわてて庭へ跳び出したら、三角の屋根の一番突んがった所が下の部分と逆の方向へユラユラと揺れていた。揺り返しが多いので、内へは入れない、家は幸

① 田部井健次著『大山郁夫』進路社、一九四七年。一一ー一二、一四ー一七、二六ー二九頁。

い少し壁が落ちた程度だ。そのうち下町の方が大火事だという噂がつたわり、望見すると東南の空が煙で黒くなっている。夕方になって、私は山の手の線路伝いに新宿の方へ歩いてみた。むろん電車は動いていない。新宿に近づくにつれて、下町からの避難民が疲れ切った顔で、延々として郊外へ郊外へと歩いて行く。これは大変なことになったと思った。火事はますます拡がって、空は真紅になり、それがだんだんと、こちらの方へも押し寄せてくる。私は始めてこれは大変なことになったと、身体がガクガクしてきた。・・・

四日目だったか、私の家のグリーンの扉をビューンと開けて七、八人の剣突鉄砲を構えた兵士が血相変えて現れた。私は例のルパシカ姿で、どうしたわけか、手にゴム毬を持って応対に出た。・・・「お前は何だ？何をしているんだ？」などと問いかける。私があまりニコニコしているので、やがて去ってしまった。私はまだ社会主義者ではなく、従ってブラック・リストに載っていなかったが、近所の人が、あの家は怪しい者が出入りする怪しい家だ、と告げ口したに違いない。

やがて、その日の早朝近所に住んでいた柳瀬正夢と平林たい子が、同じく銃剣を持った兵士に追い立てられて、戸塚署へつれて行かれた、という知らせがあった。数日後柳瀬は放免されて、その時のことを語ってくれた。彼は私の家からちょっと小滝橋寄りの車屋の二階に間借りしていた。車屋というのは人力車を持って、それを曳いて商売している車夫のことだ。その家の娘さんと恋愛して結婚することになるのだが、それは後の話。・・・

震災後の復旧が進むにつれて、マヴォにショーウィンドーの装飾や看板や建物の外装や壁面装飾や、ついには建築設計までも頼んでくるところが増えてきた。震災後の混乱した人心や、復興への意気込みやらを反映してのことだ。まず手始めが文房堂の筋向かいに本屋をやっていた、開成中学の同級生芳賀丈夫君の店の

看板だった。私の描いたプランに従って、看板屋に形を造らせ、私たち自身でペンキを塗った。新橋、日本橋、神田等の目抜きの場所にカフェ、食堂、文房具店などの珍奇な外装の建物がたくさんに出来た。私たちは、バウハウスの人たちがマグデブルグを町ぐるみ表現主義化したのにならう意気込みで、朝から梯子やペンキの缶をかついで走り回った。それはわれわれの糧道ともなった。 ①

新劇の代表的な男優千田是也は、銀座服部時計店を設計した建築家伊藤為吉の六男である。早稲田大學の独文科に聴講生として在学中の大正十二年、千田は兄熹朔とともに人形芝居に熱中していた。動く人形で『セヴィリアの理髪師』などを演じるため、夏休み末に麻生材木町の小さな家を借り、模型舞台の装置を運び入れた。大部な自叙伝で縷々語られるのは、大地震における市街への脱出と一家の対応である。朝鮮人騒ぎの余波を浴びた千田是也の受難、〈千駄ヶ谷のコリアン〉との誤認はよく知られる。

大地震の襲来と朝鮮人騒ぎの受難（千田是也著『もうひとつの新劇史』）

そこへ越した翌日の午ちかく、熹朔はなにかの買い物に出かけ、私と川村君とは鴨居にずらりとぶらさげた人形の糸の具合を調べていた。すると急に家が上下、左右にものすごく揺れだし、例の大正十二年九月一日の関東大震災がやってきた。廂から瓦がガラガラ落ちてくるので、うっかり外へも出られず、二人とも

① 村山知義著『演劇的自叙伝2』東邦出版社、一九七一年。一七九、一八三、一八九、一九五頁。

縁側の柱につかまって、いつ崩れるかと天井をにらんでいた。

そのうちにだいぶ揺れが納まって来たようなので、ともかく近所の様子を見てこようと、あいかわらず悲劇的な顔をしながらブランブラン揺れている人形たちを袋に入れて押入れにしまい、細い路地をまっしぐらに走り抜けて材木町の大通りに出た。すると六本木のほうから熹朔が息せききってやって来て立ちどまりながら、「おれ、平河町へ行かなけりゃならいから、家のほうを頼むよ」というと、またスタコラ引きかえしていった。

よしきたと私は勇みたち、余震のたびに墓石がゴロゴロ倒れている青山墓地を駈けぬけ、白い雲だか煙だかが、モクモクしている四谷から赤坂へかけての空をはすに見上げ、これはただごとではないぞとあわてながら、青山練兵場を千駄ヶ谷に抜け、やっと家にたどりついた。

さいわいこの辺は大した被害はなく、わが家も塀が倒れたり、瓦が落ちたりしただけで、みんな無事に裏の空地に避難していた。「熹朔はいったいなにをしているのよ」と母はだいぶ不服そうだったが、私は熹朔のさっきの済まなそうな顔を思い浮かべて「だってあっちは彼女と女中だけだし、仕方ねえよ」と弁解した。

その晩から私はやたらに忙しくなった。おやじの二号さんや三号さんや近い親類の安否を尋ねてあちこちを駈けまわされたり、その途中で罹災者の大八車を後押しをしたり、主人にはぐれてウロウロしているどこかの婆やさんらしいのを、佐々木たつもこんなことになっているのかなあと、つい日本橋から宮城前までおぶって行ったり、見つかった親類の家へリヤカーで食料をはこばされたり、夜警に引っぱりだされたり一日頃は細工物や本にへばりついている私でも、さてこういう事態のなかで駈けまわるのは、やはりうちでは一番うってつけの年齢だったわけであろう。

センダ・コレヤという私の芸名の由来であるあの事件が起きたのは、この大震災のたしか二日目である。

個々の炎が夜空を真っ赤にそめ、ときどきガソリンや火薬の爆発する不気味な音がきこえ、余震がくりかえされ、通りには怪我人たちをのせた担架や荷車をかこむ疲れはてた人たちの行列がつづくあの状況の中できくと、朝鮮人が日頃のうらみで大挙して日本人を襲撃してくるとか、無政府主義者や共産主義者が井戸に劇薬を投げこんでいるとか、道ばたで避難民に毒饅頭をくばっているとかいう馬鹿馬鹿しいデマまでが、なんとなくほんとうに思えてくるらしい。おまけに鉄衛がそのころ近衛の聯隊長をしていた古荘のところへ見舞いにいって姉からきいてきた情報によれば、軍は多摩川べりに散開して、神奈川方面より大挙北上中の〈不逞鮮人集団〉と目下交戦中だという。

そこで私もじっとしていられなくなり二階の押入れにいれてあった長持の底から先祖伝来の短刀を持ちだして、いつでも外から取れるように便所の掃き出し口の小窓のかげにかくすと、登山杖をもって、お向いの勝ちゃんの従兄の大学生といっしょに、家のまえの警備についた。

そのうちに夜も更け、便々と待っているのも気がきかぬような気かしはじめ、敵情偵察というわけで、千駄ヶ谷の駅にちかい線路の土手にのぼっていくと、うしろのほうで「鮮人だ、鮮人だ！」という叫びがきこえた。ふりかえると、明治神宮の、当時はまだ原っぱだった外苑道路の闇の中をいくつもの提灯がちかづいてくるのが見えた。それをてっきり〈不逞鮮人〉をこっちへ追って来るものと思いこみ、はさみ撃ちにしてやろうと走って行くと、いきなり腰のあたりを後からガーンとやられた。おどろいて向きなおると、雲つくばかりの大男がステッキをふりかざして、「イタア、イタア！」と叫んでいる。

登山杖をかまえて後じさりしながら、「違う、違います！」といくら弁解しても、相手はいっかな聞きい

れず、「センジンダア、センジンダア！」とステッキをふりまわしながら喚ぎつづける。そのうち提灯たちが集まってきて、ぐるりと私をとり巻いた。みると、喚いている大男は千駄ヶ谷駅のまえに住む白糸ロシア人の羅紗売りだった。そっちは朝鮮人でないことは一目瞭然だが、こっちはそうはいかない。その証拠に棍棒だの木剣だの竹槍だの薪割りだのをてんでに携えた、これまた朝鮮人だか日本人だか見分けのつけにくい連中が、「畜生、白状しろ」「ふてえ野郎だ、本籍を言え」「嘘をぬかすと、叩っころすぞ」と私をこづきまわすのである。

「いえ日本人です。ついこのさきに住んでいるイトウ・クニヤという、このとおり早稲田の学生です」と、学生証まで見せたがいっこう聞きいれず、薪割りや木剣を私の頭のうえに振りかざして「アイウエオ」を言ってみろの、「教育勅語」を暗誦しろのという。・・・ありがたや、だれかが後ろのほうから、「なあんだ、伊藤さんのお坊ちゃんじゃねえか。大丈夫だ、この人なら知っています」と言ってくれた。近所の酒屋の若い衆である。するともう一人、「そうだ、伊藤君だ」と、青年団の服を着た青年が前に出て来た。これは千駄ヶ谷教会の日曜学校に通っていた頃の友達だった。・・・

いま思えば、ナチスのユダヤ人狩りと同じように、あれは震災で焼け出され傷つき裸にされた大衆の支配層に対する不満や怒りを、民族的な敵対感情にすりかえようとした政府や軍部の謀略だったのであろう。

そんなエピソードをも含めて、あっとという間に東京の三分の二以上を焼け野原にしてしまったこの大地震は、私にいい薬になった。〈救世軍の芝居〉から『その妹』を経て、これが私の見た第三のリアルなドラマということになるわけだが、これはむしろ〈救世軍の芝居〉にちかく、だがもっとも大きく、もっとすさまじかった。言ってみれば、人間対人間のドラマもあり、人間対自然のドラマもあり、おまけにその両方が

きびしく巨大で、芸術青年の私はすっかり圧倒された。①

同じく築地小劇場の男優薄田研二は福岡の酒造家で生まれた。子どもの頃彼は郷土芸能〈博多にわか〉は熱中し、しばしば店先で黒板を背景に自演も披露する。富裕で芝居好きの父親が、評判の尾上松之助を招いて興行を支援し、宿として自宅を提供することもあった。やがて絵画の修行を始めた賢治は、入院を機縁に児島善三郎や倉田百三と知り合い、ついに大正九年倉田を慕って上京し牛込に下宿する。おりしも白樺派の文人たちが倉田の戯曲『俊寛』の上演を企画し、大森池上の料亭に設けられた舞台で彼は俊寛の役を演じた。②

演劇への志望と自宅の震災（薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』）

どうやら生活も落ち着いたころ、みやこ新聞の学芸記者をしていた上泉秀信さんから手紙がきて、村田実が地球座という劇団をつくって浅草で旗揚げ公演の準備をしている、行ってみたらどうかと、すすめてまいりました。白樺の人たち、武者小路先生、有島武郎先生、長与善郎先生なども、私のことについてはいろいろと心配して下さっており、またそういう関係で上泉さんも骨折ってくれているわけです。しかし私の内心は実はまだ絵のほうへ未練があって、なかなか決心がつかずにいたのですが、妻の晴子も画家としてより俳

① 千田是也著『もうひとつの新劇史ー千田是也自伝』筑摩書房、一九七五年。五六ー五八頁。

② 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』東峰書院、一九六〇年。二九ー三七頁。

優としてのほうが大成すると思う、と強くすすめることもあって、やっと芝居に入る決心がつき、じゃあ行ってみようかと、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらときました。大正十二（一九二三）年九月一日、死者九万一千名余、五二万戸の被害家屋を出した関東大震災の第一震です。

東京では地震直後一四五ヵ所から火災がおこり、水道管破壊のためほとんど消火が行なわれず、火は風をよび、風はまた火をよんで、下町一帯をなめつくしました。・・・この混乱のなかで、一時的におこった無政府状態を利して、為政者みずからが放った流言ー不逞朝鮮人の暴動、社会主義者の蜂起ーによって、ただでさえ冷静を失った民心に不安と動揺を与え、自警団を組織させ、朝鮮人と思えば撲殺し、軍隊、警察も内乱鎮圧の演習として直接手を下し、朝鮮人、社会主義者を犠牲にしたことは、永久に忘れることのできない恨事でした。・・・

さて私の家ははじめの一震でペチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。しかし、何が幸いするかわかりません。若いころ病気勝ちだった体をきたえるために、から手を稽古したことがありましたが、針金を胸に撒いてプツリと切るぐらいのことは当時でもできましたが、そのから手の呼吸でどうにか危地を脱することはできました。しかし、東京は壊滅です。芝居や絵どころではなくなりました。家がつぶれたので行くところがない。倉田先生のお家は幸いつぶれずにすみましたから、あとのことを頼んでひとまず東京を引きあげることにしました。・・・

東京を離れるに際して私は倉田先生から、大阪におられる小山内薫先生に会って身の振り方を相談するようにという紹介状を頂きました。当時小山内先生は大阪のプラトン社という出版社の編集顧問をしておられ、月に一度ずつ下阪することにしていて、家族連れで関西に来ていて震災を知り、大阪定住を決意しておられた。私は伊丹に腰を落ち着けるとさっそく大阪へ先生を訪ねましたが、先生の頼みとする有楽座、明治座、市村座など都心部の劇場はみな焼け亡び、東京の再起はむずかしいのではないか、と悲観的で腰をあげる様子はみられませんでした。

私は仕方なく伊丹で再び絵をかきはじめました。地三の手を引き、つま子を乳母車にのせ、自分はカンパスと絵具、それに酒をつめた魔法ビンとをかついで、尻端折りをして毎日絵を描きに出かけましたが、煙草は両切では面倒なので、葉巻にしましたから、伊丹のような田舎ではたちまち名物おとこになってしまいました。①

築地小劇場の明星となる田村秋子の父は、新聞記者を兼ねた戯曲家田村西男であって、花柳界を題材とする作品は帝国劇場や新橋演舞場でも上演される。大地震のとき秋子は、神田の自宅で祖父母を昼食中であった。丸の内中央新聞社に勤務していた西尾を徒歩で急ぎ帰宅し、上野山下へ避難した。② その数ヵ月前女学校を卒業した秋子は、親睦会の素人芝居で初めて舞台に立っていた。出しものはプーシュキン原作の『大尉の娘』であり、父の縁故で新派の名優、花柳章太郎と井上正夫から事前に指導を受ける。彼女の経歴については聞き書き『ひとりの女優の歩んだ道』および同『友田恭助のこと』に詳しい。

① 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』四二ー四五頁。
② 田村秋子・伴田英司共著『友田恭助』三四ー三七頁。

素人芝居の経験（田村秋子・小山裕士共著『ひとりの女優の歩んだ道』）

あたしは小劇場に入る前の年に、父に勧められて初めて父たちのやっていた通話会の舞台に出て、生まれて初めて芝居というものをしたんです。神田女学校を卒業した年でしたわ。通話会というのは文士劇ともいっていましたが、あたしがでた頃は他の職業の方たちも多く、同好の士の集まりとでも申しましょうか、坂本猿冠者、鳥居清忠、三宅孤軒といった方々がスターでした。出た動機は自分が舞台をやりたいっていうじゃなくて、「人の前で芝居みたいなことをするのはずいぶん面白いよ。いちど経験してごらん」という父の無責任な進め方にのって、引っぱり出されたんですよ。・・・

『大尉の娘』の初公演というのは花柳（章太郎）さんと井上（正夫）さんが初めて二人でおやりになって、前の月にたいへんな評判だったんです。通話会で『大尉の娘』をやろうということになったのも、先月のその舞台装置がそのまま同じ明治座に残っているので、それを使えばいいっていうんで、選んだ出しものだったんです。で、あたしがとにかく一応やったら、井上さんはじっつと黙って見ていらっしゃったんですが、何もおっしゃらないで、仏頂づらをして、いきなり羽織をお脱ぎになったんです。そして「これから私がお父さんの役をやってあげるからやってごらんなさい」とおっしゃって、素人の女の子を相手に、そりゃもう本気でやって下さるんです。井上さんて偉い役者だと思いましたわ。・・・とにかく夢中で汗だくで、その芝居であたし、芝居っていうものが忘れられなくなりましたし、芝居っていうものの魅力にとっつかれたかも知れないんです。それ以前は芝居をしたいっていうような気持ちは毛頭なかったんですけど、その芝居が

すんでラクになって、この芝居の役にさようならかと思うと、たまらなくなりましたね。・・・

通話会の素人芝居に出たのは、それ一回きりなんです。それから震災にあったのですから。あたしのそんな気持ちが父親にもわかったのでしょうね。「君ね、芝居したいだろう」と言ったんですよ。地震の最中に、ほうぼう避難して歩いてる最中に。で、あたしは言ったんです。「芝居したいわ。でも、あたしのような者は役者になれない。」それよりも地震で焼けだされたあたしは、どこかに職をさがしてお金をとることを考えてたんですよ。ところが父はこういうんです。「どうせ何か仕事をするんなら雑誌の仕事をしろ。小山内さんがプラトン社にいるから、もしかすると、そこの女書生に使ってくれるかもしれないよ」って。そして大阪に行ってらっしゃる小山内先生に父が手紙でお願いしたら、先生、「僕たちの小劇場が近い将来に出来る。そのとき研究生として入れるからそれまで東京にいて待て」とおしゃって下すったんです。「ああ、あたしはまたまた芝居が出来る」ーあたしはすっかりうれしくなっちゃいましてね。①

芸術座の解散後水谷八重子は友田恭助らとわかもの座を結成するとともに、汐見洋らの研究座に参加して有楽座でイプセン作『野鴨』の主役を演じた。通話会を通じて田村一家とも交誼を結ぶ。彼女が激震に襲われたのは、浅草の御国座に出演してほどなく、急病の療養中であった。

① 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』白水社、一九六二年。一二-一三、一五ー一七頁。

新劇の諸公演と震災の衝撃（水谷八重子著『女優一代』）

わかもの座は大正九年の十二月第一回の試演会を開きました。野外劇で場所は小石川の関口台町にあった友田さんのうちの地所です。ここはただの原っぱだったので、舞台をつくるのがたいへんな仕事でした。出演者全員で二日か三日かかって草ぼうぼうの空地を地ならしし、舞台用築山をつくるため、なれぬ手つきでシャベルを使い、モッコをかついだりしたものです。・・・この試演会で私の役は『路傍に眠っている男』の令嬢役、友田さんの相手役でした。

わかもの座は『青い鳥』の公演で親しくなった友田さんやシイちゃん（夏川静江）と一緒につくったもので座名も最初は十二月の誕生ということで師走座とつけました。初めのうちは脚本朗読とか戯曲研究を目的にしていたのですが、折角みんなが集まったのだから、ひとつ自分たちの力で芝居をやってみようじゃないか、ということから出来上がったのでした。そして、指導者には『青い鳥』で演技を指導して頂いた青山杉作先生にお願いすることになりました。・・・

第二回の試演会も野外劇で、大正十年の四月場所は前回と同じ小石川の関口台町、そしてこの回からわかもの座を名乗りました。だしものはシュメット・ボンの『ジオゲネスの誘惑』とビョルンソンの『森の処女』で、どちらも青山先生の演出でした。・・・

三回目は同じ年の十月、今度は丸の内の鉄道協会の講堂でした。だしものはダンセニイの『アラビア人の天幕』で、演出を土方与志先生にお願いしました。と申しますのは、茅ヶ崎にありました土方先生の別荘と友田さんの別荘が隣合わせで、先生と友田さんは幼いころからのお近づきだったというわけなのです。その

ころ土方先生は伊藤熹朔さんたちと舞台研究会を作って、舞台装置の研究をされるとともに、先代左団次さんの七草会、花柳章太郎さんらの新派若手の新劇会、猿之助さんお春秋座などの公演を手伝っていらっしゃいました。・・・

『アラビア人の天幕』公演がすむと、友田さんが兵隊に行かれました。そのためわかもの座は一時中断しましたが、一年後に友田さんが除隊されますと、早速みんなで集まり、十一月再び鉄道協会の講堂で第四回の試演会を開きました。だしものはイプセンの『幽霊』で青山杉作先生の演出でした。・・・

わかもの座で『幽霊』をやって間もないころ、井上正夫先生のところからお使いがまいりました。私に（大正十二年）正月の浅草御国座でユーゴーの『ああ無情』をやるから、コゼットの役で出ないかというとです。その年の春はもう雙葉を卒業していましたので、なんの制約もうけず、友田さんたちとお芝居の勉強をしていたころだったので、よろこんで出させていただくことになりました。・・・

この公演がおわりましたあと、わかもの座の試演を縫い、通話会という文士劇に出演したことがあります。たしか五月末の明治座だったようにおぼえています。この文士劇は田村西男さん、坂本猿冠者さんが中心で、『盛綱陣屋』、新作の時代劇『金鍔』、それに中内蝶二作『大尉の娘』の三本でした。私は『金鍔』のなんとかいう娘をやりましたが、『大尉の娘』の艶子は田村秋子さんで、すぐに仲が良くなって『盛綱陣屋』では二人で雑兵の役をかってでたりしました。歌舞伎の雑兵が着る筒袖では引き立たないからといって、鎧をつけて出たのをおぼえております。田村さんとはこれがご縁で、震災後芸術座再興の公演にも出演していただくようになったのです。

この『大尉の娘』は井上正夫先生が演技指導されたのですが、私に「露子を田村君に教えるから、きみも

よくみておき給え」とおっしゃって下さったのです。それで舞台稽古も初日もみたのですが、単に見ただけというところでした。ところが翌月半ばに過ぎになって、急に井上先生から七月の御国座へでるようにとお誘いを受けました。そして、私に『大尉の娘』の露子をやらせて下さるということ、もちろん躍りあがってよろこびました。・・・

こうして毎日井上先生に褒めていただこうと思いながら、露子をやっておりましたが、いよいよ明日が（御園座）の千秋楽だという夜になりまして、強烈に盲腸が痛みはじめました。それまでも痛みはありましたが、千秋楽まではと頑張って来たのです。舞台の無理がたたって、盲腸が悪化し、母や姉はお医者の指図通り、夜を徹して冷やしてくれましたが、お医者さまからは当分の絶体安静を申し渡されました。久しい間病気らしい病気もしなかった私だけに、母や姉の心配は一通りではなかったようです。その心配をよそに、お見舞いに来てくれた友田さんや夏川さんと楽しくおしゃべりをしたり、義兄の蔵書を手当たり次第に持ち出して読んでみたり、気楽な療養生活でした。

八月いっぱいを療養生活に送り、九月一日になりました。空は晴れていましたが、ヘンに暑苦しい朝でした。裏庭に近い墓地で鳴いている蝉の声をぼんやりきいていますと、いきなり地の底から突き上げられるような衝撃をおぼえ、やがてはげしくガラガラと屋鳴りがして上下に震動するのです。とっさに布団を頭からかぶりましたが、まるで船の難破を思わせるように、激しく揺れ動くのです。

あまりの怖さに「お母さーん」「アー（姉）ちゃま」と叫んでとび起き、柱や障子につかまりながら、やっとの思いで台所から裏庭に逃げ出すことが出来ました。そして寝間着のまま墓地のそばにちじこまっているところへ、母と姉が「よく起き上がれたね」といいながら、青い顔をして駆けつけてくれました。二人と

もおびえながらも、私をかばうようにして、呆然とした表情でつった立っておりました。

このわずかな時間がどんなに長く感じられましたことか。そして、本当にこの世の最後の阿修羅場かと思われました。幸いに私の家は無事でしたが、墓地の墓石のほとんどは倒れ、どこかの土蔵でもこわれたのでしょうか、おそろしい土煙が空をおおっていました。こうした騒ぎのなかを、友田さんがご自分の小石川のお家が焼けたにもかかわらず、お見舞いに来てくださいました。その時のうれしさが今なお忘れ得ません。・・・その夜義兄（水谷竹紫）はこわがる私をひきずるようにして近くの牛込会館の屋上に連れて行きました。眼下に見える東京の街、それが見渡すかぎり火の手があがっていて、真昼のような明るさです。

義兄はそれを指して「東京はどうなるんだ、日本はどうなるんだ」と涙ぐんでいましたが、やがて激情に酔ったように「八重子、しっかりするんだよ。なあに、この会館が残っている限りは芝居はやれるさ」と繰り返し口走っていました。そうした義兄の昂奮とは反対に、私は妙に落ち着きを取り戻せるような気がしていました。一面の火の海の中に、ポツリポツリと焼け残った家の群れが点在しているのを知り、ホッとした気持になってゆきました。①

大正二年芸術座の創立に参加した沢田正二郎は、三年後帝劇でトルストイ作『アンナ・カレーニナ』に出演したのち離脱した。歌舞伎と新劇の中間を占める大衆演劇をめざして、倉橋仙太郎らと劇団新国劇を結成したので

① 水谷八重子著『水谷八重子―女優一代』二四―二七、三五―四一頁。

ある。やがて明治座で供された中里介山作・沢村主演『大菩薩峠』が、連日札止めの大盛況となった。しかし、大正十二年の八月末本拠の浅草公園劇場において、車座で会食中の団員が官憲の立ち入りで賭博と誤認され、沢田を含む四六名が検束された。彼らが大地震の襲われるのは、丸の内なる警視庁の留置場である。①

「大震災直面記」（沢田正二郎著『苦闘の跡』）

私は思いがけなく、しかも他動的に突発した事件のために、忌まわしい嫌疑をうけて、けれどもまた感謝したいほどの得難い体験をなめつつ、冷たい、暗い三日間の日を過ごしていた。・・・私たちは正しい裁きを受けるために、裁判所へ送られる分時を一刻千秋の思いでまつのであった。

丁度その時である。私たちの生涯において二度と味会わうことのできないような、大きな力が襲いかかって来たのは。一度！二度！踏みしめた大地までが、私たちをこの地上に真直ぐには立たせておかないのかと思わせるように震動した。九月一日の大地震！それは私たちの上に降りかかった突発事件が、本当に思いがけないことであったように、人々にはまったく思いがけない大災厄だったにちがいない。

「死ねばもろともだ。狼狽ててはならぬぞ！」私は他の四六名の者にむかってこう叫んだ。気の毒な座員たちは私の体を庇うように取り囲むのである。神は我ら正しき者を守らせ給うたものか、幸いひとりの怪我人もなかった。数分の後にはその職に親切な人々に守られ、まず初め帝劇の横の広場に避難させられた。想

えば、かってはこの白亜の中で幾千の観客を前に、拍手に迎えられながら、ステージに立ったこともあるものを。哀れや今は、南側入口前のたたきのうえに蹲っていなければならぬとは。・・・

家族安かれ、私の劇を愛してくれる人々安かれと念じ祈りつつ、私たちはまだそこに蹲っている。火の手がだんだん掩いかぶさって来た。彼方此方で「熱ッ熱ッ」という声が聞える。危険と見てか、係の警官は私たちを宮城前の広ツ場に連れて行ってくれた。・・・

あの火は大蔵省だ。その向こうは神田だ。こちらのは芝だ。あれが京橋だ。ーその火煙の囲みのなかに、帝劇の焼けているのが、花のしべのように美しく見える。学生時代に三等切符を買いながら眺めていたあの屋上の翁の像が、今で善美を誇っていた帝劇の運命を負うているかの如くに、見ている間に倒れ落ちてしまった。開館式に呼ばれて行ったあの宏壮な建物、友が結婚の披露をしたあの東京會舘の銅骨が、うつろのように抉られているのが悲惨さを物語っている。・・・

やがて私はこの職を司どる上の人に呼び出された。一同の顔にはある輝きの色が漲った。しかしてそれは事実となってあらわれた。もとより白日の身の、国法に正しき限り自分たちの行為に罪なきを信じていた私たちは、進んで法の裁きを受けることを希望していたのであるから、命じられずとも「明日午後五時までにふたたび集まって出頭しましょう」と約して、一同兎に角放還されることになった。それはもう四時に近いころだった。情知る人々の見送りを受けながら、丸の内から一歩を外に踏み出してみて、初めて私は世の中のただならぬ様に驚愕した。人は火から逃れんとしてすべての財物を捨てて逃げていく。なんという悲惨の様であろう。・・・忠臣蔵にでもあるように、四七名の座員は「天」「下」の合言葉を便りに隊列を作り、車に重い荷を積んで苦しんでいる人を見ては、それを後押ししてやったり、道端に倒れている力弱い婦女子

① 新国劇編『新国劇五十年』中林出版、一九六七年。一八ー一九、四一ー四二、四六ー五四頁。

のあるのを見ては、これをいたわり救けながら、ひた走りに走って本石町の角まで来た時、私はさらに二度めの大きな驚きを感じた。「世界の絶滅とはこのことか」こんどは私からこう叫びたいような気がした。

烈風に煽られた猛火はさながら私たちを襲うて来るかのようである。裏の細道を駈ける人、も一度震れたらきっと崩れ落ちるに違いない危険な屋根、しかも焔に吹きつけられて燃えしきっているその軒下を走っていく人、そうしたガードをくぐくいり抜け、喉が乾けば消防のホースにかじりついて泥水で口をいやしたり、路傍に落ちころがっている角砂糖を見つけてかじったりしながら、またひた走りに須田町の方へ走っていった。・・・

異様に赤黒く焦げた、未だに忘れることの出来ない天のそらよ！この恐ろしい姿の幕は、はや夜のとばりに覆われんとしている。あらゆる電光は滅しても、燃え拡がる火光によって、路面は昼のような明るさである。道々座員の家を訪おうとはしてみるけれど、どこもここもすでに猛火の中に包まれてしまって手の施しようもあればこそ。その紅い火の光りに照らされた顔一つ、それは私の家の安否を私に知らしむべく、すぐ警視庁まで駆けつけてくれて果さず、いま雷門まで引き返してきたという文芸部の俵藤君であった。この混乱の巷に於て奇しくも俵藤君に巡り遭うことの出来た不思議さよ。・・・三日間ついに逢うこと出来なかった公園劇場関係者たちの無事な顔をも見ることが出来た。そして、近隣の人々の温かい恵みの握飯に餓えをしのいで、しばし休らう暇もなく、火はいまこそここを襲わんとする勢いである。・・・

私は真暗い公園劇場の楽屋から座布団のごときものを少しずつ持ち出させ、新国劇の提灯を列の前後に押し立て、燃え盛る火の手を側面に見ながら、二時間前に歩いた電車通を上野の山へ向かったのである。よう

やく上野台に辿りついて振りかえれば、まず胸をつまらせるものは、下町一帯の火焔である。①

料理の達人としても著名な女優沢村貞子は、歌舞伎作者の娘として浅草で生まれた。同家の息子たちは子役としてはやくから舞台に立ち、兄は四代目沢村国太郎、弟は映画俳優加東大介として大成する。男女平等を旨とする第一高等女学校で学んだ長女貞子は、女優として立てる新劇の道を志し、まずは築地小劇場の山本安英に相談の手紙を送った。彼女が大地震に襲われたのはその数年前、女学校三年のときである。大火によって浅草猿若町の自宅は焼尽し、父と母がひとときの行方不明となった。衝撃を受けたのはまさに台所で昼食を用意するさなか。気丈な母親は娘らへさきに避難するよう命じ、みずから脱出したあとは浅草寺の炎上防止を人々に督励した。

歌舞伎一家の震災体験（沢村貞子著『貝のうた』）

大正十二年九月一日の関東大震災は、私が女学校の三年の二学期、始業式の日に起こった。学校から帰った私は、昼ご飯の仕度をしていた。父母も弟も芝居へ出かける直前だった。兄はひいきの客に連れられて、箱根へ行っていて留守だった。毎月朔日、十五日には小豆ご飯を炊くのが、芝居ものの習慣である。でき上がったご飯をお櫃に移し、お豆腐のおつゆの味をみようと小皿に口をもって行ったとき、突然ゴーッというなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は、足がもつれて尻餅をついた。まわ

① 「大震災直面記」（沢田正二郎著『苦闘の跡』）柳蛙書房、一九二八年。一五〇―一五八頁。

りじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。
二階で掃除をしていた母が、階段から転げ落ちながら叫んだ。「早く火を！ガスを消して！」また激しくゆれて、やっとガスの元栓をしめた私の足元に、鍋が引っくりかえった。新聞をよんでいた父は、敷いていた座ぶとんを頭にのせて「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と口の中でブツブツ唱えるばかりだった。そのまま動かないのは腰が抜けたらしい。
案外柱がしっかりしていたのか、わが家はひどくゆがんだだけで、つぶれなった。丁度昼飯時だったせいもあって、あっという間に八方から火の手が上がった。みょうにシンとした異様な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。
「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちはとにかくさきへ逃げなさい。」母は急いで小豆ご飯のはいったお櫃と三本の鰹節を私にわたしながら言った。弟にはお湯のはいったままの鉄瓶をもたせた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束しているところへ、父の妹ひさ伯母とその養女で私たちの姉せい子が、着のみ着のままで転げながらたどりついた。ほんの一町と離れていないのに、ここまで来るのが命がけだったと、叔母はあおい顔でオロオロ泣くばかりだった。母の姉とみ叔母もかけこんできた。
「とにかくこの子といっしょに先にお逃げなさい」母は私の腰にずっしりと重い袋を結びつけた。五銭白銅ばかりはいった、うこんの財布である。そのころの芝居の当たり祝、大入り袋の中身は五銭の白銅玉だった。これが好景気時代の、母のただ一つのへそくりだった。
結局私たちは母と約束した向島へ行けなかった。吾妻橋の上で向島から逃げて来る人波に押し返されてしまった。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていた。やっと上野の山へたどりついて、その夜をすごした。西郷さんの銅像の傍へやっと座れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが夜ふけとともにものを言わなくなった。不気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこだました。上野の森から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。仮借なく人間たちを焼き殺す地獄の火が、どうしてあんなに美しく見えたのだろうか。・・・
母はきっと生きている。そして父を守っているにちがいない。私はそう信じていた。夜の明けるのを待って、私はその付近の貸家をさがした。庇が落ちて、ひどく汚いけれど、安い家が見つかった。屋根さえあればそれでいい。大家さんの米屋の主人に一生懸命たのみこんだ。やっと承知してくれた米屋さんは、畳の上に五銭白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。お米に味噌、鍋とふとんの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚か残った。
二人の叔母と弟をそこに残して、私と姉は父母をさがしに浅草へ向かった。道々まだ何べんも自警団にとめられて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂はますます拡がっていた。焼けたあとはまだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋をしめさなければ歩けなかった。地熱で足の裏がやけどしそうだった。
そこだけがたった一ヵ所焼けのこった浅草観音堂へたどりついたのは、夕方近かった。境内には運よく命びろいをした人たちがいっぱいだった。「加藤伝太郎さーん。加藤マツさーん」姉と私は声をからしてよび歩いた。本堂の前の大銀杏の根もとに張ったボロ切れのテントから、「ここだよ！ここにいるよ！」母が這いだしてきた。つづいて父も「おい、無事だったか」と涙を浮かべてすがりついた。自慢の高い鼻が、すり

むけて赤くなっていた。

「あら、貞ちゃん」近所の半玉のうさぎちゃんも、どろんこのアッパッパで顔をだした。長唄のお友達である。まっ黒に煤けた顔にサンバラ神ーどうみても浅草きっての売れっ子の雛妓とはおもえなかった。うさぎちゃんは「お貞ちゃんとこのおばさんのおかげで助かったのよ。たのもしかったわ。おばさんは、ほんとうに、」と溜息をついた。

その話によると、母は命からがらここへ逃げこんだ人たちを叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせいだという。そしてどうやら火が消えて、やっと落ちつくと、味噌屋の焼けあとからは焼け味噌を、肉屋の店からは焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしのがせたそうである。・・・

私たちが家を逃げ出すと間もなく、三方から火の手がせまり、さすが気丈な母もつづら一個をを背負って逃げるのがやっとだった。・・・すぐ目と鼻の瓢箪池にはまだ死体が浮かび、本所の被服廠あとでは、逃げこんだ人たちの持ち込んだ荷物に火がつき、三万人あまりが焼け死んだとまわりの人が声をひそめて話していた。・・・

年も押しつまって、浅草の焼けあとにバラックができた。大工の叔父が「はやくお貞ちゃんを引きとってやらなければ、」と、一生けんめいに奔走くれたおかげである。一時しのぎのお粗末なものだが、私には御殿のように見えた。東京っ子の復興の努力はめざましかった。近所の人たちも、その年のうちにあらかた帰

ってきた。①

沢村貞子が育った芝居街浅草猿若町は、水野忠邦による天保の改革に起源を有する。町人の暮らしを取り締まり、奢侈・遊興を禁じる水野は、城下より離れた浅草にのみ、芝居小屋の建設を許した。そのため浅草寺北方が猿若町と改称され、市村座、中村座、河原崎座の三座が鼎立して、芝居茶屋が並び芝居関係者もここに移住する。以以後「猿若町にのみ演劇の隆盛を誇るに至」り、「劇道の発達とともに江戸の好事をここに蒐め、為に櫓聳え旗幟翻るに至」った。市村座では幕末に河竹黙阿弥の『三人吉三』が初演され、大正に入るや五代目尾上菊五郎と初代中村吉右衛門による黄金の菊吉時代を呼び寄せた。②

明治十九年浅草公園において瓢箪池の開削がなされ、四年後には千束町に十二階建ての凌雲閣が完成した。これを中心として周囲の浅草六区には興行街が発達し、浅草寺詣でや吉原通いの途上にも寄る盛り場ともなる。島村抱月による芸術座の消滅、さらには小山内薫による自由劇場の活動停止によって帝国劇場が不振に陥ったため、伊庭孝や石井漠など丸の内新劇の落武者は、六区の日本館、金竜館、観音劇場に活路を求めた。大衆的な浅草では音楽と舞踊が主体であって、新劇はオペラに挟まれてわずかに上演される。③ こうして大正六年頃から浅草

① 沢村貞子著『貝のうた』新潮社、一九八三年。四五ー四七、四九ー五一、五五頁。
② 新実武編『浅草猿若町』新実商店、一九七三年。四七ー五〇、八九ー九〇、一〇三頁。
③ 松本克平著『日本新劇史ー新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。三二五ー三二七頁。

オペラは最盛期を迎え、日本館における東京歌劇団の『天国と地獄』や金竜館における根岸大歌劇団の『釈迦』が人気を集めた。しかし、関東大震災は猿若町の芝居小屋をすべて焼き尽すとともに、六区の興行街をも焦土と一変させた。

大震火災と浅草興行街（内山惣十郎著『浅草オペラの生活』）

九月一日午前十一時五八分。突如として襲った関東大震災に、歓楽街浅草公園は一瞬にして猛火に襲われ、生地獄となった。金竜館の舞台ではその時佐々紅華作のお伽歌劇『カチカチ山』を、杉寛のタヌキ、高井ルビのウサギで熱演の真最中、天地が崩れるばかりの大動揺に、木造作りの楽屋は大波のように揺れ、道をへだてた公園劇場とハチ合せをせんばかりの凄まじさに、女優連中は悲鳴をあげて、狭い階段を転がるように表へ飛び出した。

六区は各館から溢れ出た観客が、猛火と煙の中を逃げまどい、杉寛はタヌキの縫いぐるみを着たままで、群衆を押し分け掻き分け、無我夢中で瓢箪池の中の島までやっとたどりついた時、一大音響を立てて十二階が真ん中から折れて崩れ落ちた。歌劇の殿堂金竜館も日本館も、いや浅草公園は観音堂が奇蹟的に残っただけで、あたり一面荒涼たる焦土と化してしまった。

本城を失った歌劇人は、再建の日までと、東京を後に地方巡業に出たものの、楽譜は焼け衣装は焼け、満足な興行は出来なかった。それでもふたたび六区復興の日、オペラ再興の日を夢見て、北に南に旅巡りを続けて露命をつないだが、さて復興の浅草は、地方から入りこんだ大工、左官の職人たちの天下で、オペラフ

ァンの学生、サラリーマンは姿を消し、観客層はガラリと変っていた。

翌十三年四月浅草劇場にオペラ残党の役者をかき集めて森歌劇団を結成。だが、スリルとスピードとエロチシズムをもつ剣劇と安木節が六区興行街を風靡し、さしも全盛を誇った浅草オペラは、ついに再びその華やかな幕を開くことなく、関東大震災と共にフィナーレとなってしまったのである。①

① 内山惣十郎著『浅草オペラの生活』雄山閣出版、一九六七年。一一九ー一二〇頁。

第五節　震災からの復興と各種劇団の復活

演劇復活の概況～帝国劇場の復活～舞台への復帰中村翫右衛門～大野外劇への決意
沢田正二郎～復興公演と劇団結成水谷八重子～さらなる自立へ伊沢蘭奢～先駆座の再開
秋田雨雀

大地震発生の三ヵ月後に刊行された『時事新報』の付録『大正大震災記』には、震火災の詳細とともに政府における帝都復興院の発足と復興計画の大要が記録される。これに続いて同誌では歌舞伎、新劇、音曲など芸能界の被災と復活についても数頁にわたり報道された。

「復活の光に恵まれた芸界」（時事新報『大正大震災記』）

文化の精粋を誇った帝国劇場の絢爛目を愕かす壮麗な建築も、また海鼠壁に櫓の昔を偲ぶ純歌舞伎式の新富座の構造も、みな一瞬の間に灰燼に帰して、ここに帝都の劇場並びに各種の演芸界は無惨にも全滅の運命に陥ってしまった。

時あたかも初秋の劇団を飾る各座の九月狂言は既に準備整うて、さきがけをなす帝劇は、吉例によって一

日がその初日であった。幸四郎松助補導の外に寿美蔵亀蔵も参加しての女優劇狂言は『阿漕』と金子洋文作『投棄てられた指輪』と太郎冠者作『賢き馬鹿』で開け、新富座は左団次一派に中車のほか宗十郎加入の顔合わせ、狂言は岡本綺堂作『鬼坊主清吉』と『鎌倉三代記』と松居松葉作『政子と頼朝』と大森痴雪作『里見伊助』で開演と極り、市村座は菊五郎、友右衛門、男女蔵、栄三郎、彦三郎の座付一座、狂言は黙阿弥作『嶋ちどり月の白浪』と長尾豊作『物草太郎』と『伊勢音頭』、また明治座は伊井一派の新通俗劇で開場、狂言は清見陸郎作『宮古路豊後椽』と『仇し仇浪』と伯山口述瀬戸栄一脚色『夕立勘五郎』と据り、本郷座は河合と猿之助の合同劇に源之助が加わり、『敵討以上』と『秋の夜』と『鷺』と『今戸心中』とがそれぞれ上演されることになっていた。

このほか浅草公園六区を中心としてそこにある御国座、観音劇場や常盤座、金竜館、十二階劇場帝京座（公演劇場は沢正一座の賭博事件で休場中）、宮戸座、御園座などの各劇場を始め、三友館、富士館、帝国館、松竹館、日本館、電機館、満盛館、キネマ倶楽部等の各活動写真館ならびに花屋敷、昆虫館、江川玉乗り等の各興行物に至るまで、朔日という物日を書入れで、いづこも平日よりは開場準備を早め、出盛る人を待っていた際の震災とて、場所柄大騒ぎを演じた。・・・

こうして、以前の火災のため復活工事半ばであった歌舞伎座を始め、新富、明治、本郷の五大劇場を持ち松竹の損害額総高は実に一千万円に及び、帝劇は有楽座を加えて時価の惨害額六百万円、また市村座は百万円、浅草常盤座、公園劇場等をもつ常盤興行部は百万円の損害ということである。

そして帝劇はすでに復活工事に着手し、来春四月頃までには竣成の予定であり、歌舞伎座もその頃に落成の見込みで、新富座、明治、本郷各座は少し後れて五、六月頃仮設工事を終り、市村座も四月頃竣工の上、

菊五郎一座の本興行は六月に花々しく開演する予定である。

代々木にある歌右衛門吉右衛門の邸宅は火災を免れたが、梅幸は住居を焼かれて蔵が助かり、その他左団次、幸四郎、宗十郎、友右衛門、松助、猿之助、八百蔵、亀蔵、鶴蔵、左升、、新十郎、芝鶴、長十郎、権十郎、三升、新之助、羽左衛門、仁左衛門および水野好美、石川新水、福嶋清、花柳章太郎、藤井六輔、小森誠等は皆焼け出されて、着のみ着のままという惨めな姿になったのが少なくない。・・・

かくてそれらの舞台を失った東京の俳優は、生活のために、いきおい他に稼ぎ所を求めねばならなくなってきた。そこで仕打側からも発案して、まず大阪で興行を目論んだが、感情やらいろいろの事情で一寸行き悩んだが、過半は十一月頃から繰出し、歌右衛門、羽左衛門、梅幸、菊五郎等はいずれも年内一杯はどこへも出稼ぎせず、休むこととなった。

地方興行の先発隊としては、勘弥一派に浪子、房子が加わって新潟方面へ出かけたのが筆始めである。それから震災後東京での一番槍は、十月十七日を初日に五日間牛込会館で、花柳、藤村、小堀、石川等の新派の新進連は旗揚げした復興劇で、『大尉の娘』と『ドモ又の死』と『夕顔の巻』とが上り、罹災民慰安の野外劇には同じ十七日から三日間日比谷音楽堂で試みた沢正一派の『地蔵経由来』と『勧進帳』と『高田の馬場』の公演で、それらが東京の劇団に兎にも角にも復興の峰火を揚げた第一声である。①

① 『大正大震災記』（『時事新報』第一四五〇四号付録）六二ー六三頁。

帝国劇場は三越などとともに文明開化の極致でもあった。「日本国の華をあつめたる東京市は滅びた」とキリスト者内村鑑三は震災直後に書く。「帝国劇場は滅びた。三越呉服店は滅びた。白木屋、松屋、伊藤呉服店は滅びた。御木本の真珠店が滅びた。」災害は奢侈と遊惰に浸る人々に対する神の懲罰なのである。「私は帝国劇場が一ヶ年以内にふたたび開場するとの事を聞きました。東京市はそんな事では真個の復興を期することはできません。」①

内村を慨嘆させた帝国劇場の、「悔悟なき早過ぎる復活」を辿ってみる。同劇場による被災後最初の興行は十一月九日から三日間、帝国ホテルの演芸場を借りたヤッシャ・ハイフェッツのヴァイオリン演奏会であった。イシダ・アクロンのピアノ伴奏で人々を慰めたのは、シューベルトの「アベマリア」やヴィニヤーフスキーの「ヴァイオリン協奏曲」とされる。同じ仮舞台で同月松旭斉天勝の一座の奇術、翌月には舞台協会により山本有三の戯曲『生命の冠』などが演じられた。②

震災後の帝劇興行（『帝劇の五十年』）

九月一日の大震災当時、ハイフェッツはバンクーバーにあって、既に日本へ渡る船の船室も約定ずみであり、出帆の日も目前に迫っていたので、やむなく彼は予定通りの極東旅行に出発して、まず上海に直行し、

① 「天災と天罰と天命」『内村鑑三著作集』第四巻、三六五、三六七頁。

② 『帝劇の五十年』東宝株式会社、一九六六年。一一八ー一一九、一八二ー一八三頁。

同地から帝劇と連絡をとって、演奏会の日取りを十一月九日から三日間と変更した。劇場も帝劇が焼けてしまったので、帝国ホテルのささやかな演芸場で行なうことを承諾してくれたという。・・・

焦土と化した災害都市のどまん中で、この世界一流の提琴家のリサイタルは、最高十円の入場料で開かれたが、その前売成績が全く意外というほどの盛況だったので、ハイフェッツ氏も気をよくして、自分も東京市民のために義捐演奏会を開きたいと申し出た。ハイフェッツ、ストローク氏、山本専務の三者主催による義捐演奏会が入場料一円均一で日比谷音楽堂に催されたのは、十一月十二日。もちろんこの日も大入満員で、主催者は純益金三千円を当時の震災救護事業に寄付することが出来た。・・・

麻布の南座でも随時東京公演を行うこととし、・・・十三年二月昼夜二部制、しかも月中より狂言を変えて二の替りを出しているが、勘弥に森律子、村田嘉子らの女優陣、それに佐々木積という顔ぶれで、歌舞伎では『一条大蔵譚』『妹背山の道行』『新皿屋敷』、書き物では松葉作の『秀吉と淀君』武者小路作の『桃源にて』それに太郎冠者の『クレプトメーニア』と『執心の鬼』などが上演されていた。が、つまるところ災害都市の多くに受けたのは、たっぷり笑いあり涙ありの太郎冠者の二作品だったという。・・・

改築成った〈大正帝劇〉は十三年十月二五日に幸田露伴加筆、平山晋吉作『神風』を第一の狂言として幕をあけている。出演俳優は梅幸、幸四郎、宗十郎、勘弥、松助などに再来の梅蘭芳。梅蘭芳は『神風』その他の歌舞伎芝居の終ったあとで、相変わらず大受けであった。二五日から翌十一月四日までの短期公演でこれは終わっているが、連日開幕前に主なる専属男女優が舞台に並んで、帝劇再開場の御挨拶を観客に述べた。・・・開場の年でかなりの話題になったのは、十一月の第二回の歌舞伎興行に『二人道成寺』が出、福助（五世）の白拍子花子、栄三郎の同じく桜子という配役で、当時の好敵手だった若女形同士の張り合った競演が、

東都の福助ファン、栄三郎ファンを大いにキャアキャアいわせたことであろう。・・・

大正十三年四月帝劇が復興中だったので、宗之助はかわれて四谷・大国座に出演、『壺坂』のお里その他に妙技を見せていたが、七日目の舞台で動脈硬化症のため突如として倒れ、お里役の扮装のまま三六の若さであの世に去った。帝劇が受けた最初の技芸面の損失だったといっていい。①

市村座の有望な若手であった沢村宗之助は、新劇勃興にも熱意を抱き、自由劇場第一回公演では左団次の相手役に抜擢された。明治四四年歌舞伎座からの尾上梅幸に呼応して、彼は明治座から帝国劇場へ移籍したのである。復興公演大国座における宗之助の急死は、同家の家庭教師であった沢村貞子の自叙伝にも言及される。宗之助の次男雄之助、のちの個性的な映画俳優伊藤雄之助が、このとき五歳の初舞台であって、父親の悲運な最期に居合せた。

「名優の悲劇的な死」（沢村貞子著『貝のうた』）

帝劇の大幹部、初代沢村宗之助さんのところから、こどもたちの家庭教師にきてほしいという話があったのは、ちょうどそのころだった。宗之助さんは頭のいい近代的な俳優で、立役、女形ともにこなし、「これからの役者は学問をしなければならない。新しい風を入れなければ、やがて、歌舞伎はほろびていくだろう」

① 『帝劇の五十年』一八二―一八六頁。

というのが持論だったという。・・・一週二回、長女文恵、長男恵之助、次男雄之助、三男敞之助さんたち四人の予習復習のために、私は学校の帰りに上野桜木町の沢村家へ寄った。月謝は四人で二十円、夕食のほかに交通費五円を支給された。いちばん勉強熱心だったのは次男雄之助さんだった。どんなことでも納得のいくまで質問した。・・・

私が沢村家へ通いはじめて何ヵ月かたったある日、宗之助さんは突然、四谷の大国座の舞台で倒れた。『壺坂霊験記』のお里に扮して、幕切れ近く谷底へとびこんだまま、二度と立ち上がれなかったという。死因は高血圧だった。

まだ若いこの名優の悲劇的な死は、すべての歌舞伎関係者とその愛好者たちから痛惜された。役者というものは、その死とともにすべてが失われる。書いた本も描いた絵も残らない。そのからだ一つが資本であり、会社も工場もその肉体のなかにあるのだから、子孫にゆずりわたす何ものもない。未亡人とそのこどもたちが、今後の歌舞伎界で生きる道はけわしく、きびしいに違いない。葬儀ははなやかだった。飾りきれないほどのたくさんの花輪、荘重な読経、参列する有名な歌舞伎役者を一目みようとむらがる町の人たちを眺めながら、私は役者の一生というものをぼんやり考えていた。

美しく賢い未亡人は、亡夫の遺志をついで、こどもたちを教育したいということで、私はその後も、私の学生生活の終わるまで、この家族の引越す先きざきへ家庭教師として通った。毎週二回、ほとんど休まなか

った。①

歌舞伎座は二年前の火災で壊滅し、再建半ばで大地震に襲われた。「（大正）十年十月三十日の朝」と梨園の長老、第七代市川中車は誌す。「突然電気室の天井から漏電発火して、さしも日本一を誇った檜舞台の大劇場が、なんとわずか四十分の間に灰になってしまった」。松竹ではただちに再建を構想して一年以内の落成を期し、中車らは関西の劇場へも出勤する。「悪い時には悪いことが重なるもので、」「あの大震災のために、すでにその半ば以上も出来上が」り、「場内に積み込まれてあった榎材の全部を焼き尽くし、竜骨の梁は飴のように曲がってしまって、大損害を蒙った」。② こうした歌舞伎座の様相が、河原崎長十郎の書簡によって、ドイツ留学中の土方与志に伝えられたことは、前述のとおりである。。

のちに長十郎と前衛的な劇団「前進座」を結成する中村翫右衛門は、自宅で昼食に大地震に襲われた。人形町、日比谷、日暮里、さらに那須へと脱出する被災記録は詳細であるが、ここでは演劇の復活に努める部分を参照する。

① 沢村貞子著『貝のうた』五六ー五八頁。

② 市川中車著『中車芸談』（『日本人の自伝二〇ー市川中車・中村鴈治郎・市川左団次』平凡社、一八九一年。一二一ー一二二頁。

震災の苦悶と演劇の復活（『人生の半分ー中村翫右衛門自伝』

劇場はほとんど焼けて、麻布の末広座が残っているだけと知れた。麻布で中車氏・片市氏がはじめて芝居をやったのは、十月はじめか、九月末かはっきりしないが、なんでも市民は熱狂して迎えて、大満員だった。これまで、もうこの焼野が原では芝居なぞ見るものはないし、劇場はないし、不景気は襲うだろうし、地方でもそれぞれこの負担を背負うから、当分見込みはないと、気の早いものは廃業したものさえある。人心が芝居どころでない。こんなときに芝居なぞやったらなぐられる。こう一般に考えられていた。こう一般に考えられていた。もちろん私もそう思った。ところが事態は反対だった。

動揺し、混乱し、不安定な人心にとって、心の糧は絶対に必要だった。もう芝居なぞ見られないだろう、この有様で、どうして復興し、どうして生活していけるか。こういう暗い人心に、焼野が原でも芝居はやれる、見られる、ということは、今後の生活のゆくてに大きな確信を与えることだった。

もう一つはすさんでくる人心をやわらげ、人間生活の楽しさを回想し、人に対する愛情を取戻す力となった。食糧を得ることが第一だが、それといっしょに心の食糧も困難なときほど求めているものだとはじめて知った。この場合には映画とちがって、機械の必要もなく、人間が出ていってすぐ演じることのできる演劇は、大きな力を発揮した。野天でもやれることも知った。・・・

十月になって帝国ホテルの舞台で慰安会を催すことになり、歌右衛門はあいさつをし、出し物は板東三津五郎・福助師の舞踊、二人猩々と決まり、私は酒売りの役を演じることになった。衣装、かつらはつけずに、黒の紋付き、袴でつまり袴躍りの形式でやることになり、私は躍りの振りを三津五郎氏や三津之丞氏にならった。私としては破格の大役なのだ。震災後はじめて舞台に立った私は、胸のとどろきを感じるのだ、それはよろこびなのだ。

観客は場所柄だけ固定していたが、その雰囲気は温かく、観客自身が焼跡のなかのはじめての舞踊として感激的な気分にひたっているのだった。私は舞台に立って、精神傾けてつとめた。私も焼跡のなかでこんあにも早く舞台に立てたという感激にひたっているのだった。この催しは大成功だった。・・・

大正十三年一月は麻布末広座が明治座と改称して大劇場としてスタートをきった。大劇場は全部焼けてしまったのだから、大幹部の出演する劇場がないのだ。浅草の松竹座がそれから後に開場されたのだが、まずこの山の手の明治座に歌右衛門一座が出演することになった。・・・

今年は恐ろしい震災の記憶をとり去ろうと、人々は復興、復興！という声で名実ともに塗りつぶそうと努力した。復興事業は急がれ、焼跡にバラックが建てはじまり、内部に抱いている社会矛盾が解決されないまま、その上を人々は生活をたてるために血眼になってかけまわっていた。この自分すいとん屋のバラック店が多くできた。終戦後中華そばが多くできたようなものだ。

劇場建設はとくにスピードで行われた。一月末には四谷の大国座が開場された。帝劇の人々が出演した。宗十郎・宗之助・勘弥というメンバーだった。三月には観音劇場と本郷本郷座、赤坂演技座、五月には浅草常盤座、下谷市村座、七月には本所寿座、人形町には日本劇場初開場、丸の内の邦楽座、十月には丸の内帝国帝国劇場、すさまじい勢いで劇場が復興した。これは人心安定の政策と、国民が復興に従い慰安を求める現れだと見られる。

三月、四月は同じ麻布明治座で猿之助一座と帝劇の女優連との合同劇の公演だったと思う。私も参加した。

桐一葉、初瀬浪子の淀君、森律子のかげろう、猿之助の銀之丞、村田嘉久子の乳母、私は茶道珍伯、・・・

また、浅草松竹座へ歌右衛門・吉右衛門一座で出演した。歌右衛門の浅草進出はこれが初めの終りだった。

岡本綺堂作勾当侍だでて、私は足利方の源内とかいう敵役をつとめた。①

公園劇場へ辛うじて戻った新国劇団員は、避難した上野でも危険が迫り、警視庁での再度拘留は免除されながら、震災第一夜は本郷の路上で、第二夜は小石川の広馬場で仮寝する。数日間転々とするなかで、食物を提供したり、日用品を届けてくれる知己や友人もあった。被災者をあるいは哀悼し、あるいは慰藉しながら、まもなく彼らは復興への民心を激励すべく、野外劇実施の準備に着手する。

復興公演決行の壮図（沢田正二郎著『苦闘の跡』）

六日目にまた私たちは、焼けずに残った一高前の俵藤君の家へ引きかえしていった。秋の朗らかな日が続いて、帝都の焼跡には早くも復興気分が漲って来た。人はバラックを建てて、自己の職業にいそしむべく急ぎだした。・・・ある人はここにバラックを建てて住むようにと私に勧めた。けれども私は考えねばならなかった。ー自分はいま、住むべき家のことを考えるときではない。不自由ながら友の家のささやかな二階の一室に雨風を凌いでいる。食うものも腹をへらさない程度には食っている。ー私には私のバラックを建てる前に、まず自分の天職について考えなければならない義務があった。・・・

① 中村翫右衛門著『人生の半分ー中村翫右衛門自伝』筑摩書房、一九五九年。下巻、八九ー九〇、九八頁。

私は俵藤君と僅かな花束を携えて、焦土の巷を終日歩き続けた。人が面を掩うて去る屍の山に、黄色い煙に煤けた痛ましい屍の山に跪いて、いつまでもいつまでも礼拝した。この人々の断末魔の苦しみを自分の身にひしと味わって、この人々がこの世に残した思い事の幾分でも果たそうと誓い祈るのだった。この日々の勤めは、私たちのこれからの演劇の生命に、どんな大きな覚悟を与えただろう。そんなら私たちはこの難に際してまず最初に何を為すべきであるか。

世の中の生業の中に、演劇ほど社会生活、人間生存の上に密接なる関係をもっているものはないであろう。私はこの演劇を鑑賞する人々の豊かな心持に抱かれて、今日まで生長して来たのである。今も私には安住の前に奉仕がなければならぬ。私たちは一日も早くこの荒れに荒れたる帝都に、演劇の楽園を築かねばならないことを知ったのだ。あらゆる支障を排し、あらゆる困難をくぐり、私の怨みも仇も打ち忘れて、朗らかな秋の日に帝都幾万の人々に心の安けさを与うべく、働かなければならぬ義務を感じたのだ。この企てのためにはいかなる苦痛、いかなる恥をも忍ばなければならないと思い立った。

こうして富まざる身も心の富に補われ、また疲れた体も心の輝きに励まされて、雨の日も濡れそぼちながら、晴れたる日にはその濡れを乾かしながら、街から街を飛び廻った。私と同じ心をもった人々は、この貴い企てのために特志を捧げて、あるいは遠くから馳せ参じてくれる人も数多かった。しかして、この涙ぐましいほどの努力は、あらゆる人々の諒解を取得して、在帝都の各新聞社後援、劇作家協会賛助、国民文芸会主催の名のもとに、十月十七、八、九日、三日間の野外劇となって現れた。そしてこの催しはいとも晴れやかなる秋の日に、晴れやかなる数万の人々を迎えて、なんの故障もなく、目出度く震災後第一声の晴れやか

なる終りを告げたのであった。①

帝都復興を祈る大野外劇（新国劇編『新国劇五十年』）

向島の沢田の家も焼けたが、東京の劇場もほとんどが焼けてしまった。本拠の公園劇場も帝劇も歌舞伎座の、新富座も明治座も本郷座も市村座も、みんな跡方もなく消えてしまって、演劇人はみな茫然自失の状態に陥っていた。

沢田は一面焼土と化した帝都の野に立って「そうだ野外劇をやろう」と肚を決めた。新国劇を愛し、育ててくれた東京市民への謝恩と慰安のための芝居をやろうと。この事は、沢田は生きてゐる、新国劇は健在である、という報告にもなり、象潟署事件の潔白の証拠にもなることだった。場所は結局、日比谷公園の新音楽堂を舞台に利用することに決まった。・・・

演し物はいろいろと検討した結果、久米正雄作『地蔵経由来』、歌舞伎十八番『勧進帳』、長田秀雄作『高田の馬場』と決まった。衣装や小道具は、大阪へ疎開していた浜田たち一部の座員が関西で整え、担いで持ってきたりして準備は着々と進んだ。

ところが、今度は『勧進帳』の狂言のことで一部から、故団十郎の十八番物を冒涜するものだと横槍が入った。しかし、沢田は「今回の興行は勿論入場は無料で、期日は三日間。それも震災で働く意欲を失った人

① 沢田正二郎著『苦闘の跡』）一六三ー一六五頁。

達に、明日への希望と心の糧を与える為で、一個人の利得の為に行うのではないから、必ずや故人（団十郎）も地下で私の行動を喜んで下さるに違いない。だからたとえあなた方が許されぬといわれても私はやります」と、遺族の人達の前できっぱりいいきった。彼は芝居道の封建社会のなかに棲息していり、なんの理由もなく傲然と他の俳優を見下すその考え方に、思わず反発したのだ。・・・

今回の計画を知って主催、後援、賛助をかって出てくれた国民文芸会、在都の各新聞社、劇作家協会の連中が、湯浅警視総監やその他の当局者に懇請してこの運動を盛り上げた。その甲斐あって、さしも難行に難行を重ねた野外劇は世論の力でついに許可を得ることが出来た。

あとは公演期日の決まった十月十七、十八、十九の三日間をなんとか好天気で終わらせたいということだけであった。それと不思議なことに、歌舞伎の立唄、立三味線、鳴物として聞こえた長唄界一流の人々が、大勢参加を申入れて来たことだ。その数は無慮百余名に達したので、一日では到底並びきらず、三日間にわかれて出演して貰うことになった。この一事をもってしても、一部の反対などはますます無意味なものとなったわけだった。

さて日本演劇史上燦然と輝く、日比谷公園音楽堂に於ける大野外劇は、絶好の秋晴れのもとに正午の号砲を合図にその幕を開けたのであった。日比谷公園へは早朝から人が詰めかけ、開演数時間前から数万の観衆を迎えて、たちまち満員となってしまった。①

① 新国劇編『新国劇五十年』六三ー六六頁。

病後の身で震災の惨禍に直面して水谷八重子は、義兄水谷竹紫に導かれ、新派の花柳章太郎や小堀誠とともに神楽坂の復興公演に参加した。沢田正二郎の野外劇とともにこの企画は、演劇復活の先駆と称讃される。これに自信を得て竹紫は島村抱月と松井須磨子に因む第二芸術座の結成に着手し、十九歳の八重子を中心に、青山杉作や友田恭助を団員に迎えた。かくして震災第二年の二月と四月牛込会館で第二芸術座の公演が挙行され、この時期には小山内薫による築地小劇場創設の準備も進みつつあった。

復興公演から第二芸術座へ（水谷八重子著『女優一代』）

やがて焦土の東京が「帝都復興ええぞ、ええぞ」という歌声とともに、ノミの音、槌の音とともに起き上がった十月のはじめ、義兄は牛込会館を本城に〈演劇復興〉の狼火をあげることを私に打ち明けてくれました。私の健康も震災を境にめっきり恢復していたのです。

それから義兄は文字通り東奔西走、十月の十七日から一週間の公演の日取りを決めました。出演は花柳章太郎、小堀誠、石川新水、藤村秀夫さんなど新派の新劇座の方たちが中心になり、その中に私も加えていただいたのです。ちょうどそのころ日比谷の音楽堂で沢田正二郎さんの新国劇が、十五日から三日間『勧進帳』のページェント公演を敢行され、はからずも二か所で演劇復興の狼火があがることになりました。

牛込会館は神楽坂の中程にあり、舞台の間口が三間半、奥行きが二間くらいの、ちょうど寄席をひとまわり大きくした程度の小屋でしたが、なにしろ震災後最初の芝居ということで、横浜や千葉、埼玉あたりから

駆けつけて下さったお客さんもあって、大変な盛況でした。

だしものは『大尉の娘』『ドモ又の死』のほか瀬戸栄一さんの『夕顔の巻』の三つ。私は『ドモ又の死』と『夕顔の巻』の雛妓に出演いたしました。衣装や小道具はなに一つ揃わないので、私や義兄の着物はもちろん、神楽坂の芸者さんからも着物、帯、持ちものまでお借りするという状態でした。楽屋で顔を化粧しながら、ふと窓の外を眺めますと、お客さまが入り口から遙か神楽坂の肴町停留所近くまで延々と行列をつくって、開場を待っておられるのです。開場後も、入場出来なかった方のなかには「横浜から歩いて来たんだからみせてよ」と入り口で嘆願している女性もあり、いまさら芝居とお客さんの結びつきの強さを感じさせられました。

一方この公演の成功で自信を得た義兄は、私を中心に芸術座再興を決意、着々とその準備を進めて行ったのです。しかし、いまにして思いますのに、この芝居の成功が今日の私を形づくったのだということです。それは、その後青山先生や友田さん、田村さんが築地小劇場の創立に参加したとき、私も義兄の反対を押し切って、参加できなかったわけではありませんでしたが、この芝居に出ている間に、私の気持に変化が起きてきたからです。

震災という大きな逆境にもかかわらず、ひたすら芝居を愛して下さるお客さん方の、切実な感情とジカにふれあった感激、それが強く身体にしみこんで、私はもっと幅の広いお客さんと芝居を創っていきたいと願う気持でいっぱいになったからです。・・・

そのころ島村先生の遺族の方から「八重子さんも成長したのだし、劇団をつくるなら芸術座を名乗っては」というおすすめもあったので、義兄は汐見洋さん、友田恭助さん、田村秋子さんに応援を求めて、芸術座を

再興することになりました。

もちろん中村吉蔵先生、楠山正雄先生をはじめ、義兄の知己の方々は、まだ二十そこそこのこの私を看板にしては荷が重いと忠告や反対をされ、小山内薫先生、土方与志先生先生の築地小劇場建設も軌道にのり、いずれは私も参加するものとみられていただけに、もっと先にした方がいいのではないかという声もあったようです。しかし、義兄の決意は堅く、ついに翌十三年二月牛込会館で旗揚げをいたしました。

その時のだしものは、有島先生の『ドモ又の死』、イプセンの『人形の家』、小寺融吉先生の『真間の手古奈』で、出演者は汐見さん、友田さん、田村さんのほかに室町歌江、松井きよみさんが参加して下さいました。私は『ドモ又の死』で友田さんの画家の恋人、『人形の家』のノラ、『真間の手古奈』で手古奈をやりましたが、いずれも好評でうれしいスタートをきりました。・・・

第二回目の公演は四月に再び牛込会館であけました。だしものはアンドレーフの『なぐられる彼奴』。第三回がショオの『武器と人』、長谷川如是閑先生の『喰違い』の二本で、出演者は前回と同じメンバーでした。・・・

しかし、この公演を最後に、青山先生、友田さん、田村さん、汐見さん、東屋さんは築地の創立に参加してしまわれ、私は独りぼっちになって、随分と淋しい思いをいたしました。①

① 水谷八重子著『水谷八重子ー女優一代』四一ー四五頁。

上山草人の近代劇協会へ大正七年入門した伊沢蘭奢は、四ヵ月後に『ヴェニスの商人』で初舞台を踏み、その後も有楽座での公演で経験を重ねる。翌年上山は渡米してハリウッド入りを果し、近代劇協会は解散した。この間蘭奢は生活の資を得るため、内藤民治の総合雑誌『中外』の新聞記者としても努めた。彼の紹介によって彼女は新劇協会の畑中蓼坡に紹介されて、その第一回公演に花柳はるみら等と共演し、松竹の蒲田撮影所にて映画十三本に出演する。

大正デモクラシーを背景に女性の自由と自立を求める気運が高まるなかで、厨川白村著『近代の恋愛観』で称揚される恋愛至上主義や、雑誌『青踏』に掲載されるエレン・ケイの自由恋愛論が、家族制度の因習に縛られる多くの人達を惹きつけた。婚家を離れた伊沢蘭奢と病妻を支える内藤民治はやがて恋仲となり、大森の借家に愛の巣を営む。大地震の日被災を逃れて蘭奢は芝に転居したが、三ヵ月後身辺に予期せぬ事態が生じた。

かねて内藤は進展する政治情勢の渦中にあった。大正八年米騒動のあと彼は吉野作造等と黎明会を結成し、発刊した『中外』には山川均、堺利彦、伊藤野枝などが寄稿する。その翌年革命を成就したソビエトロシアの承認を推進し、東京市長後藤新平と使節アドリフ・ヨッフェとの会談を支援した。ヨッフェ夫妻を送る送別会には、病床の内藤夫人に代えて、伊沢蘭奢が出席したとされる。震災後内務大臣に就任した後藤新平は、北洋漁業のを正常化のためソビエト政府との交渉を決断し、日魯漁業の社長たる内藤にもモスクワへの出向を突如要請した。

相愛の男女を切り離す危機が、蘭奢をして恋愛の自由からさらなる自立への決意に向わせる。①

自立への決意と復興公演（伊沢蘭奢著『素裸な自画像』）

わたしたちは最初からお互いに自由な、解放された独立人としてお互いを拘束するようなことなく、二人の間に生れ出た一つの愛をもり育て、不完全なお互いの個性をつきあわせて、一つの完全な人格をつくり出そうという考えまで持っていました。・・・Nは青年時代に偉人後藤象二郎の同志であり、追随者であった諸橋田龍という人の門に入って、漢籍、詩歌をを学んだとかで、文学に深い趣味があり、志士的気分を多量に持っていました。彼は二十歳の頃アメリカに渡って十年あまりの苦学をつづけ、あちらの大學を終えた後、ニューヨークの某新聞の全欧特派員として数ヵ年欧州各国を旅行していたくたいでしたから、酸いも辛いも嘗めつくした苦労人でした。・・・

わたしたちの関係はどこまでも〈自由の心〉を基調としておりましたが、わたしにとってのNは、それよりもっともっと深い、複雑した心情の対象でありました。彼はわたしの愛人であると同時に兄であり、親であり、師でありました。Nは世間にまま見受けるように、圧制的に尊大な態度で臨むようなことはなく、あらゆる場合に自ら反省し、よく自己を解剖し、批判しました。反対にわたしがあり来たりの女性の因習に囚

われたり、粗笨な判断に流れるような場合には、必ずわたしの自覚を呼び起し、彼みずからをたしなめるのでした。・・・

それは暮れの二七、二八日の頃のことでした。身の毛のよだつような怖ろしい震災のどさくさも、いつとはなしに鎮まって来て、生き残ったわたし共もまずまず無事で年越しが出来ようと、不足勝ちな中にも〈生き延びた喜び〉をお正月に期待していました。ところが突然「ロシアへ行く、それも明日早速出発する」とNが言い出しましたので、わたしはびっくりしてしまいました。・・・

Nは、国体の相違は兎に角国際政局の上からも観ても、日本の経済立国の上から考えても、シベリアの広い土地と富源を包蔵するロシアと提携しなければならぬと言う見解を持っておりまして、真に国を愛する政治家や、ロシアに理解あるお歴々たちと日露××協会を組織していました。そして、国民外交の舞台に上って盛んに活動しておりました。・・・

その晩わたし達は、丁度田舎から出て来ていたわたしの母と三人で、青山の〈いろは〉で簡単な晩餐をしたためながら、しばしの別れを惜んだり、留守中の相談をしたりしました。猪口をいくつか重ねたNは、ほんのり上気した目元に元気の好い光りを湛えながら、抱負を語ったり、国交回復に対する確信を述べたりして、不安がるわたしや母を慰め励ますのでした。

〈いろは〉を出たわたしは、冷え冷えする冷気に思わず頸を襟巻きに埋めました。露地を出ると、小さな片割れ月が皎々と青山墓地の森の上空に凍りついていました。わたしは思わず、「まだ無政府状態だ」ととりどり噂されるシベリアの長い鉄路や、雪に鎖されたモスコーの空を連想したりしました。・・・

鮮人騒ぎや暴動の噂が納って、帝都再建の勇ましい合言葉がバラック造りの槌の響と調和して、市民の胸

① 「内藤民治回想録」『論争』一九六二年十二月号、論争社。一八一―一八八。
〈参照〉夏樹静子著『女優X―伊沢蘭奢の生涯』文芸春秋社、一九九六年。

に安堵と希望を与えていたとは言え、・・・一人ぼっちで残されたわたしは謎の国、スフィンクスの世界に吸い込まれていったNの後姿を、寂しさに誘いこまれるままに想い浮べては、生別が死別になるのではないかと妄想するのでした。寂しいうちにもお正月のおもちを祝ったわたしは、新劇協会が一月十日から仙台座で『西の人気者』その他を上演することになりましたので、舞台稽古やなんかで寂しさを紛わすことができました。

壊滅の後を受けた帝都は、夜を日についで建設を急いでおりました。閑暇の産物だと言われる芸術なぞはほとんど眼にもくれなかったのですが、心ある人々の中には芸術の建設的意義や、生活と不可分の本質を説き始めておりましたので、わたしなどもそれに共鳴して、こんな時こそ芸術本来の使命を発揮しなければならぬと、ひそかに心懸けたのでした。それだけにまた励みが出て、Nが国家のため一命を捧げるならば、私もまた今度こそ芸術のために献身しようと決意しました。・・・

Nの手紙にはモスコウでの情況が手に取るように描かれていました。「一週間前から要路の大官を歴訪して、それぞれ専門的に交渉を進めている。チチエリン外相と会見した最初の時は夜の十一時半であった。他の国が百年かかることを、一年で仕上げる意気込みだ。（中略）僕等は国賓として待遇されている。日露交渉は北京において××公使とカラハン氏の間に再び開かれるまで予備交渉を終わったのである。日露××会が近く外務省の斡旋で、別に支部を開設することになっている。文部大臣ルナチャルスキーも非常に好意をもって迎えてくれた。彼は昨夜ボルショイ・テアトルに『ファウスト』を案内してくれた。革命の混乱期に、こう砲撃せんと、よく芸術が毀損されずに保有されたかと想うほど、立派に整理されてある、赤衛軍がモスコーの攻略に際して、クレムリンを包囲した時、ロシア人の憧憬からモスコーが消え去っていまうことを力

説して、レーニン、トロッキーの間を往来し、芸術的殿堂の保存に努めたのもル氏であった。」・・・

Nが事業が第一だという心理こそ、男の本当の気持でしょう。いいえ、そうした大きな社会的の生活に較べれば、恋愛なぞはごくごく社会性の狭い、むしろエゴイズムの結晶にすぎないーとNの持説を肯定する気持と一緒に、劇団人としての自分の天職を持ちながら、恋愛中心に泥み勝ちな自分の薄志を自嘲する気持が起きてきました。自嘲はやがて自己叱咤となりました。そしてわたしは沢田正二郎さんなんぞが、初日が開く前には、一週間くらいは徹夜して稽古をなさる時もある、というようなことを想いだすのでした。

Nの帰国は長引くばかりでした。桜が散ってツツジの便りがチラホラ新聞に現れる四月下旬になって、またまた二、三ヶ月は延びるという通知が届きました時には、わたしはもう驚きませんでした。・・・傍らにもいない、またいつ帰って来るかもわからないNへの愛着から解放されて、自分の時間を自分の芸術のために完全に捧げよう。わたしは六年前、夫のもとから飛び出したときの〈生き生きした生活〉を再び喚び起しました。淋しさを忘れる気持からでなく、いよいよ真剣になって自分自身を掘り下げる生活へ猪突するようになりました。

灰燼の中から蘇った新劇協会は、更生の意気をもって一回毎に目覚ましく進出していました。それにプロレタリア劇壇が台頭しかけていた頃でしたから、そうして新興新劇運動の動きは、わたし達の立場を絶えず刺衝せずにはおりませんでした。五月になってから、新劇協会は帝国ホテルで第六回の公演をやりました。出し物はチェホフの『桜の園』でした。

ロシアの農民生活をテーマに取り入れた筋は、どんなにわたしの心を動かしたことでしょう。貧しい人々、虐げられた人々の生活を、自分の変転極まりなかった過去、ほかの女優さん達のように豊かなきらびやかな

服装や持物などを対照して、毛糸の襟巻を無雑作にひっかけている現在の自分と思い合せては、むしろ悲壮の快感を呼び起し、またかっては華やかな功名心にのみ煽られていたことを浅はかに想われてきました。①

伊沢蘭奢略年譜（大地震前後）

大正十二年　浅草御園座の沢村源之助、、先代訥子の一座に加入し、井上正夫氏、水谷八重子氏とともにシャトリアン作『ペルス』を上演して、市長の妻に扮したるとあり。震災後新劇協会は第四回公演を十二月二一日より二三日まで、渋谷・九頭龍女学校の講堂に開催す。シング作『西の人気男』の後家クインとストリンドベリイ作『犠牲』の長女アデエルに扮す。読売新聞の倉若生より「蘭奢君の顔には中世紀風の品がある。この人は柄もあり、顔立もよいが、身体にまだ味が足りない」と言わる。

大正十三年　一月十日より十二日まで仙台座にてチェーホフ作『熊』の未亡人、『西の人気男』の後家クイン、『犠牲』の長女アデエルに扮す。二月十六日より十七日まで帝国ホテル演芸場にて『西の人気男』と『犠牲』を再演す。五月二日より六日まで帝国ホテルの新劇協会第六回公演にチェーホフ作『桜の園』を上演し、ラーネフスカヤ夫人に扮す。金子洋文氏より「熱と暖味の不足を感じたが、夫人の寂しい一面と優しい一面をよく生かしていた」と評される。同月二四日より四日間渋谷聚楽座にて『西の人気男』と『熊』を、つづいて『桜の園』を上演す。十月二三日より二五日まで新劇協会第七回公演に久米正雄作『帰去来』のお

① 伊沢蘭奢著『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』一〇二―一〇五、一七四―一七七、一八五―一八六頁。

さえと岸田国士氏作『チロルの秋』のステラに扮す。前者は新小説の岡栄一郎氏より「三幕目の世話女房は逸品である」と言われ、後者は「この人はいかなる役に分しても、決して破綻を来した事のない貴重な熟練した手腕をもっている。脚本次第で立派な舞台を見せる」と評さる。十一月日本橋劇場の兄弟座に客演し、市川鯉三郎氏等と鈴木泉三郎氏作『山芋秘譚』の海野きくに扮す。十二月より新劇協会は同志会館と毎月興行の約成る。その第一回には武者小路実篤子作『張男最後の日』の夏子と岩野泡鳴作『閻魔の眼玉』の鈴木に扮す。①

中村屋相馬黒光をパトロンとし、秋田雨雀に統率される先駆座は、麹町の土蔵劇場が、震火災で破壊されため、第二回を大正十三年四月、早稲田大学のスコットホールで行った。演目として秋田雨雀作『水車小屋』とアナトオル・フランス作『運まかせ』、それにストリンドベルヒ作『仲間同士』が供され、花柳はるみや柳瀬正夢がここに参加する。『秋田雨雀日記』にはこうした公演の経緯が逐一記録されるとともに、震災後における諸劇団復活の状況も言及された。演劇復活の大局を述べる『雨雀自伝』の一文を併記する。

震災後における先駆座の復活（『秋田雨雀日記』大正十三年抜粋）

一月九日　午後一時から浅草の沢田（正二郎）の招待でアメリカ屋に集まった。山本（有三）、鈴木（善）、

① 「伊沢蘭奢フロニカ」『素裸な自画像―伊沢蘭奢遺稿』三四九―三五〇頁。

藤井、仲本、清見、額田、能島、菊池（寛）、小寺、北尾、金子（洋文）の諸君が来た。四時から『日蓮』と『震災余聞』と『忠次』を見た。沢田の書いた『日蓮』は面白くないものだ。言葉を妙に古風にしたのも面白くない。菊池君のは通俗哲学しかないつまらないものだ。『忠次』は馬鹿げていても面白い。

二月十一日　晴。温かい。半日床の中にいた。寝ていると武藤さんが来たので、二人で（第二）芸術座の『ノラ』を見た。（水谷）八重ちゃんのノラはなんといっても若すぎる。『ドモ又』は新派のよりはいいが、綺麗すぎて貧乏アチリエの感が乏しい。

二月十二日　夜スコットホールで未来社の試演を見た。『内部』は思ったより成功していた。芸術座の時より面白かった。舞台装置もあのとき寄り数等いい。芸術座の時は全く実在感がなかった。

二月十七日　十一時に青山斎場の平沢君の告別式へ行く。代表員達の悲壮極まる弔辞、むせかえるような香の煙、人いきれ、ー憤激の中から生まれてくるセンチメンタリズムー組合旗の剣先の物凄さー弔歌がどこからともなく、地獄の底の方からとつとつとつと沸き上がってきた。

三月十五日　〈新演芸〉から頼まれて、浅草の観音劇場へ守田勘弥を見に行く。

三月二三日　小雨のち晴。午後一時から神楽坂倶楽部で先駆座の顔合わせをした。花柳（はるみ）、運天姉妹、室町歌江、金子の女連も集った。俳優は大体揃いそうだ。稽古の時間が短いので、余程みっしりやらなければならない。顔合わせの後、川添、佐藤、小林の三君と共にスコットホールの舞台を見に行った。あのホールは実にいい感じだ。あのホールを時々借りてなにか継続的にやりたいものだ。

三月二八日　佐藤君と二人でスコットホールに金森主任を訪い、四月二四、二五、二六の三日間借りる約束をした。二四日の昼はアナトオル・フランス八十年生誕祭をする。

四月一日　夜、芸術座を見る。ショウの『ブルンチール大尉の世界観』ー如是閑の『高等曽我延家』

四月二日　スコットホールに先駆座の稽古にいった。『演劇新潮』に『骸骨の舞跳』が出た。

四月三日　スコットホールの先駆座の稽古に行く。関井という女優さんが新たにきた。『演劇新潮』は発売禁止された。『骸骨の舞跳』のためではないかと思った。

四月四日　スコットホールの稽古に行った。ストリンドベルヒを呼んだ。明日から花柳君が出るはず。ストリンドベルヒのベルタをやることに決定した。

四月五日　スコットホールへ行く。今日は花柳君と運天さんの妹さんも出てきたので、女優が全部揃った。ストリンドベルヒと『水車小屋』を稽古した。

四月七日　スコットホールの稽古。中村屋から稽古の室を貸すという返事がきた。

四月九日　今日から新宿の中村屋で先駆座の稽古をした。中村屋の主人がきて親切に話してくれた。ストリンドベルヒとアナトオル・フランスと『水車小屋』をやった。このふうでいくと、きっと物になりそうだ。

四月二一日　先駆座稽古。今日はじめて芝居に自信が出来た。『水車小屋』にはなお工夫の余地がある。花柳君の科白のとき、ポーズを置くこと、笑いを長くつづけることに注意。赤子の泣声、小鳥工夫。宣伝がかなり広くゆき渡っていりようだ。

四月二四日　暑い。スコットホールへ行き、道具の制作に手伝った。夜中村屋の〈夢を語る人々の会〉でストリンドベルヒの第三幕目と『水車小屋』をやった。みんあ喜んでくれた。

四月二五日　風、雨。不安な一日。芝居で頭がいっぱいだ。警視庁検閲済みになった。神経を疲労しつくした一日。スコットホールで半日働いた。『水車小屋』の道具が面白くない。柳瀬（正夢）君がこないので

みんな困った。東洋大学の学生が背景をつくってくれたが、面白くないので悲観した。『運まかせ』と『水車小屋』だけを舞台稽古にした。明日『水車小屋』の道具を変更すること。

四月二六日　よく晴れた。昨日の風雨を心配したがよく晴れた。芝居のことが気になるので、十一時ごろスコットホールへ行く。柳瀬君のデザインを土台にして『水車小屋』の舞台を作った。構成派ふうの舞台にした。今度はよさそうだ。ストリンドベルヒの舞台もよくできたので安心した。夜、驚くべき感激　アナトオル・フランスもよかった。『水車小屋』もよくなった。言葉に非常な力が生まれてきた。ストリンドベルヒの花柳君のベルタは実に立派だ。今夜はじつに愉快な力強さを感じた。

四月二七日　晴。今朝はかなりよく眠れた。連日の稽古で身体が疲れていたのに、この二日間で頭がめちゃくちゃにさせられた。『運まかせ』はあれよりよくはなりそうにないが、ストリンドベルヒは稽古をすればするほどよくなりそうだ。ストリンドベルヒのレアリズムを研究してみよう。二日目を五時半に開けた。見物は昨日と同じ位だ。友人や新聞社の人達が多く来てくれた。『水車小屋』は今日は一番いい出来だ。電気も申分ない。柳瀬君のデザインはいい。言葉もますます自然になった。ストリンドベルヒはもっともっとよくなる。

四月二八日　晴。スコットホールへ行き、あと片づけをした。戦場のあとのような乱雑さがある。芝居に関係して以来、今度のような喜びを感じたことはない。佐藤、川添、佐々木、小林の他、東洋大学の諸君も手伝ってくれた。夜六時からカフェ・プランタンで先駆座慰労会を開いた。同人のほか、花柳、室町、関井、松井の女優連もきた。全員二十名、愉快な無邪気な一夜をごした。ストリンドベルヒの日本に於ける最初の

成功と確信していい。①

震災からの復興と演劇の再建（秋田雨雀著『雨雀自伝』）

関東大震火災は大きな傷あとを日本の社会に残したまま、一歩々々記憶の世界へ過ぎ去っていった。しかし、いつでも耳を澄ますと、どこかで人々の泣き叫ぶような声がしていた。人々はちょっとした物音にも強い衝動を感じた。一旦京阪やその他の地方へ逃げのびた人々も、そろそろ東京へ帰って来た。復興！復興！という声は機械的に響いている。内包した矛盾をそのままにして、日本の社会は復興事業に急いでいる。ローマの廃墟のような東京の焼土の上に、バラック建が一通り立ち並んでいる。すいとんや安てんぷら屋の店がバラック建のカッフェに早変わりしたり、そばやの店が半分土間になって、円テーブルに椅子が並べられたり、子供洋服の店や石油コンロの屋台店が毎日のように殖えていったりした。そして動物の焼けただれたような臭気が、砂ほこりといっしょになって植民地のようなバラック建の上を吹き捲くっていた。その中を人々は血走ったような眼をして、そのくせどこか浮わついたような足どりでぞろぞろ歩いていた。これが大震火災の翌年の春ころの東京だった。・・・

大きな社会激動の直後に来る芸術が、詩および演劇であることは、ロシア革命の場合によっても証拠だてられているが、震災直後に起った芸術は、日本では演劇の復興であった。沢田正二郎は震災前から浅草で芝

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三三七ー三四七頁。

居をしていたが、この年の一月にはバラック建の劇場で『国定忠治』『日蓮上人』および『震災余聞』の三つの作物を上演していた。沢田は前にも記したように、表現力の強い俳優であったが、生活態度の英雄主義的傾向から、次第にファッショ的になっていった。この傾向のテンポを早めていったのはやはり大震火災による自然的・社会的脅威であった。このころの沢田正二郎は、すっかり『国定忠次』になりすましていた。

私はこのころ佐々木孝丸、佐藤青夜、川添利基などと先駆座の仕事をつづけていた。この座は最初小ブルジョア的演劇研究者の集団であったが、土蔵劇場の試演後大震災に逢い、この年スコットホールにアナトール・フランスの『運まかせ』、ストリンドベルヒの『仲間同士』および私の『水車小屋』をやった。舞台装置は柳瀬正夢であった。この演劇研究のグループは、劇場商業主義に対する反対を標榜し、エレオノーラ・ジョーゼの言葉を引用して All or Nothing（凡てか無か）のスローガンを掲げていた。しかし、このスローガンのかげに既に二つの対立した力が動いていた。一つは社会的なものであり、他は芸術至上主義的なものであった。前者は後ではトランク劇場、前衛座等のプロレタリア演劇の創立の一要素となった。

小山内薫はこの年、築地小劇場の旗揚げとともに華々しい活動を開始した。この劇場は、若き演出家であり、出費者である土方与志との芸術的協力によって創立されたもので、その第一回の公演はゲーリングの『海戦』によってはじめられた。これは文字通りの『海戦』であった。小山内は自由劇場の失敗いらい長く休火山的芸術生活をつづけていたばかりでなく、この演劇行動によって再びその存在を認められ、またその敵をある程度まで屈服せしめたという感じがした。小山内と当時の論敵との対立は、小山内の芸術至上主義と小

ブルジョワ的通俗主義との対立であったと私は理解している。①

① 秋田雨雀著『雨雀自伝』一〇五―一〇六、一〇八―一一〇頁。